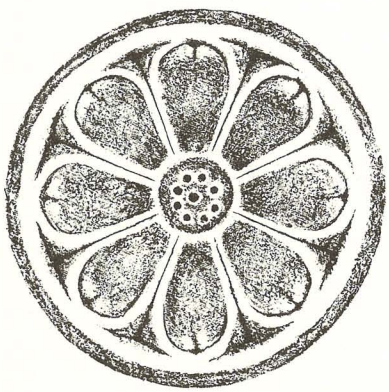
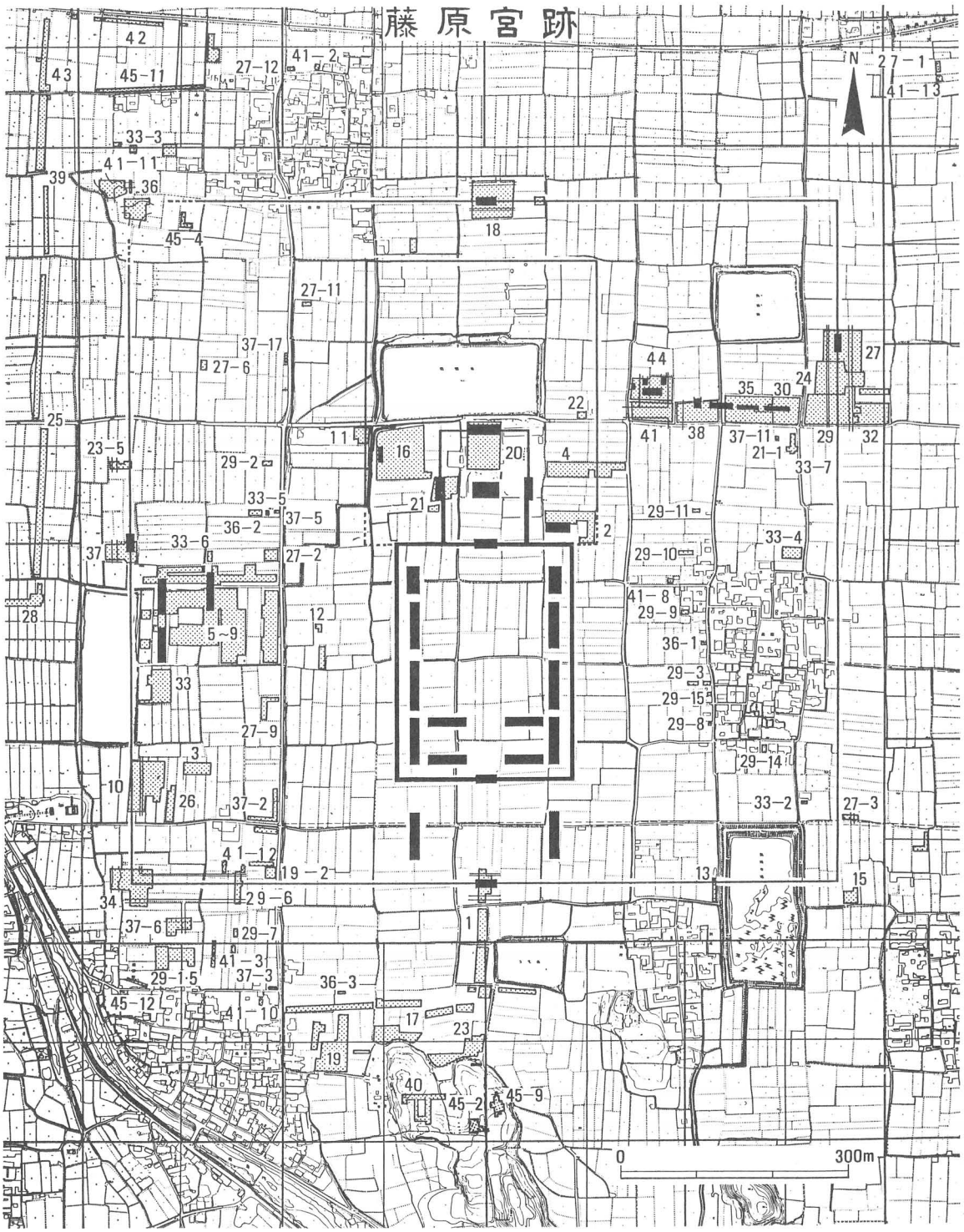
飛鳥・藤原宮発掘調査概報 16



1986年4月

奈良国立文化財研究所



藤原宮周辺調査位置図（数字は次数）

飛鳥・藤原宮発掘調査概報 16

目　　次

発掘調査地一覧表…… 2
Ⅰ　藤原宮・京の調査…… 4
　1　左京六条三坊の調査（第45・46次）…… 5
　2　朱雀大路・左京七条一坊（日高山）の調査（第45―2・9次）…29
　3　右京八条四坊の調査（第45―6・7次）……36
　4　藤原宮・京その他の調査概要……40
Ⅱ　飛鳥地域の調査……44
　1　石神遺跡第5次調査……45
　2　水落遺跡第5次調査……54
　3　豊浦寺第3次調査……57
　4　坂田寺第5次調査……68
　5　飛鳥寺の調査……73
　6　飛鳥地域その他の調査概要……75
写真図版

発　掘　調　査　地　一　覧　表

※ 本号に未収録

遺跡・調査次数	調査地区	面　積	調査期間	調　査　地	所有者等	備　考
藤原宮　45	6AJC−N•M 6AJD−H•J	3,410 ㎡	85. 4. 3 〜85. 9.21	橿原市木之本町宮脇 96他	国	調査部庁舎建設予定地
46	6AJD−H•J 6AJC−N	5,965 ㎡	85. 8. 6 〜86. 1.28	同　上	同上	同　上
※ 47	6AJC−N 6AJD−H	2,500 ㎡	85.12.20 〜継続中	同　上	同上	同　上
41−15	6AWR−D	172 ㎡	85. 2.15 〜85. 2.27	橿原市城殿町東テ 160	西田　恒善	露天駐車場
45− 1	6AMQ−D	91 ㎡	85. 4. 4 〜85. 4.16	橿原市城殿町 433	奈良総合高等職業訓練校	校舎増築
45− 2	6AWH−H•J	320 ㎡	85. 5.15 〜85. 7. 8	橿原市上飛弾町	橿原市	市営住宅建替
45− 3	6AJC−L	12 ㎡	85. 7.23 〜85. 7.25	橿原市木之本町 ツクダ 127	安田　洋夫	住宅新築
45− 4	6AJJ−C	194 ㎡	85. 8. 5 〜85. 8.26	橿原市縄手町48− 2	福田長太郎	住宅新築
45− 5	6AMQ−S	30 ㎡	85.10.23 〜85.11.11	橿原市栄和町唐星山102−1	喜多　秀行	共同住宅新築
45− 6	6AWJ−T•U	285 ㎡	85.11.13 〜85.12.13	橿原市城殿町金池 257 − 1 • 2	高山　貞雄 高山マサエ	露天駐車場
45− 7	6AWJ−U	90 ㎡	85.11.13 〜85.12.13	橿原市城殿町 256−1	山田　利治	露天駐車場
45− 8	6AJS−C	6 ㎡	85.12.18 〜85.12.19	橿原市山之坊町丑河原 314•314−1	大谷　義男 大谷　全男	住宅改築
45− 9	6AWH−H•J	330 ㎡	85.12.23 〜85.12.27	橿原市上飛弾町	橿原市	市営住宅建替
※ 45−10	6AJQ−D	564 ㎡	86. 1. 8 〜86. 2. 5	橿原市醍醐町•南八木町	奈良県	バイパス建設７次 桜井線高架
※ 45−11	6AJQ−A	320 ㎡	86. 2.12 〜86. 2.27	橿原市醍醐町	橿原市	道路拡幅
※ 45−12	6AJM−D	90 ㎡	86. 2.28 〜86. 3. 8	橿原市飛弾町79〜97	橿原市	都市計画道路
水落　5	6AMD−V	151 ㎡	85. 2.25 〜85. 4.10	高市郡明日香村飛鳥水落 213−1	明日香村	史跡整備に伴う調査
※ 6	6AMD−V	45 ㎡	86. 2.12 〜86. 2.25	高市郡明日香村飛鳥水落 213 − 1	明日香村	史跡整備に伴う調査
石神　5	6AMD−T	960 ㎡	85. 7.10 〜86. 2. 6	高市郡明日香村飛鳥 ハリワケ 280 − 1	森　正己	継続調査
石神周辺	6AMD−B	81 ㎡	85. 9.10 〜85. 9.17	高市郡明日香村飛鳥 469 • 470	山下　昭夫	保育園新設
※	6AMD−B	70 ㎡	86. 3.12 〜86. 3.20	高市郡明日香村飛鳥 218 − 3	山本　進章	資材置場
飛鳥寺 1985−1	5BAS−E	2.4 ㎡	85. 8.27 〜85. 8.28	高市郡明日香村飛鳥 641	島田　弘治	塀新築

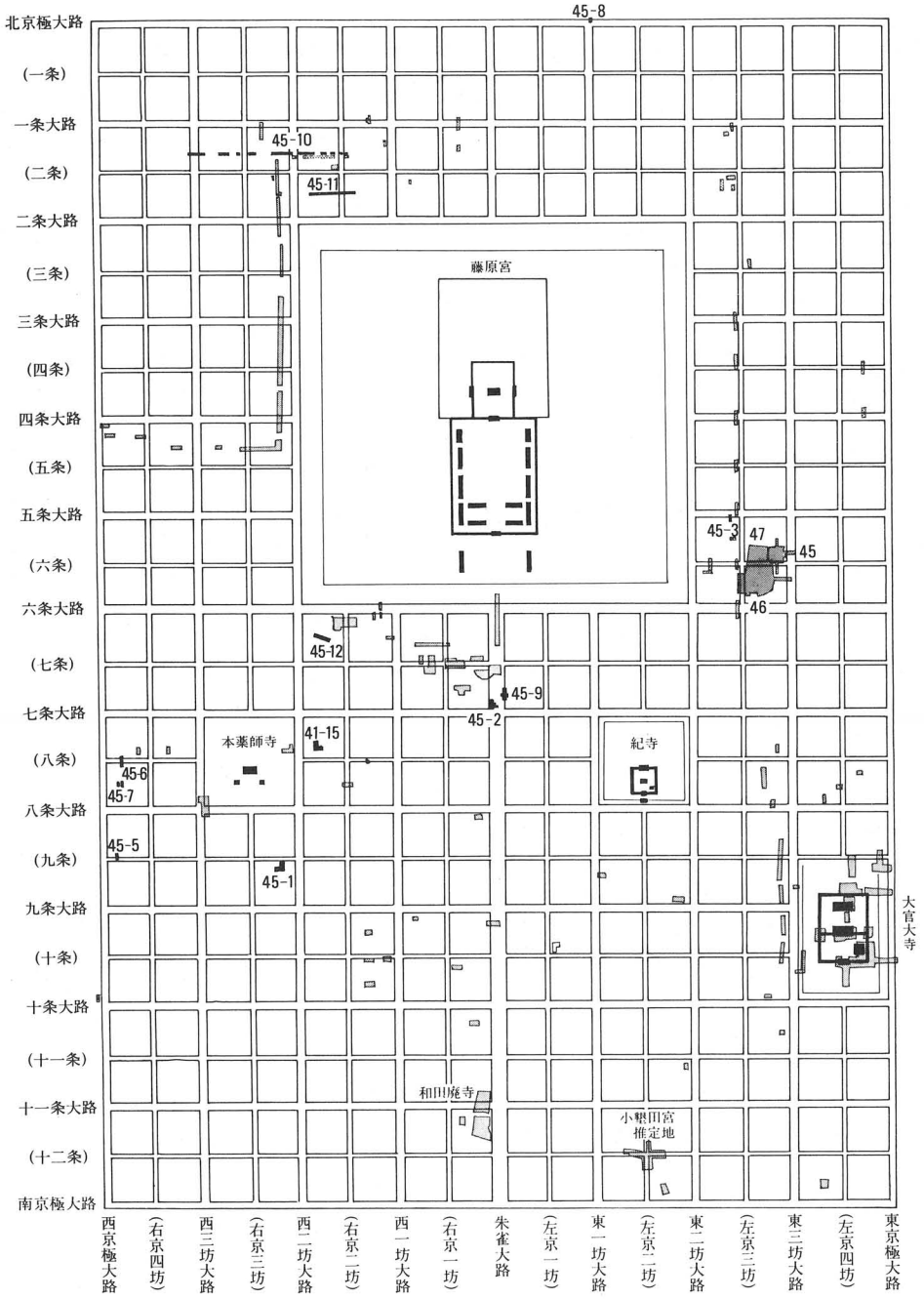
遺跡・調査次数	調査地区	面　積	調査期間	調　査　地	所有者等	備　考
飛鳥寺 1985－2	5BAS－B	33 ㎡	85. 12. 3 ～85. 12. 17	高市郡明日香村飛鳥	明日香村	史跡現状変更（路肩石積）
豊浦寺 3 (1985－1)	5BTU－L	119 ㎡	85. 2. 26 ～85. 5. 16	高市郡明日香村豊浦 630	蘇我原敬浄	向原寺庫裡改築
奥山久米寺 1984－1	5BOQ－Q	20 ㎡	85. 3. 8 ～85. 3. 11	高市郡明日香村奥山 カミヤタ26－2	吉松　利則	住宅改築
1985－1	5BOQ－I	14 ㎡	85. 4. 10 ～85. 4. 11	高市郡明日香村奥山 653	福田　英一	住宅改築
坂田寺 5 (1985－1)	5BST－C	40 ㎡	85. 7. 7 ～85. 7. 19	高市郡明日香村阪田 328・329	山本　源治	住宅改築
1985－2	5BST－F	5 ㎡	85. 12. 12 ～85. 12. 15	高市郡明日香村阪田 293	西川　孝夫	納屋改築
川原寺 ※ 1985－1	6BKH－D	11 ㎡	86. 3. 13 ～86. 3. 18	高市郡明日香村川原 899	石田　真夫	住宅改築

凡　　例

1. 本号には奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部が，1985年４月から1985年12月までに行なった調査の概要を収録した。また，1984年度の調査で未報告分については本号に収録した。
2. 発掘調査地一覧表には，1985年度の調査地をすべて示すとともに，本号に収録した1984年度の調査地を再録した。なお，寺院跡の調査については，各寺院で年度毎の通し番号を次数としてつけることとした。またその中で主な調査については別の調査次数を合わせて与えた。例：豊浦寺第３次（豊浦寺1985－１次）ただし，本号では飛鳥寺についての主な調査の次数は未定である。
3. 遺構図に用いた座標は，すべて平面直角座標系第Ⅵ座標系であり，遺構図では「－」符号を省略している。
4. 本文中では『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』を『概報』,『奈良国立文化財研究所学報』を『学報』と省略した。
5. 遺構図には，個々に，遺跡あるいは大地区割ごとの一連番号を付し，その前にＳＡ;築地・塀，ＳＢ;建物，ＳＤ;溝・濠，ＳＥ;井戸，ＳＦ;道路，ＳＫ;土坑，ＳＸ;その他，などの分類符号を示した。なお，遺構番号には仮番号で示したものがある。

表紙カット：豊浦寺第３次調査出土軒丸瓦

Ⅰ　藤原宮・京の調査



第1図　藤原京内調査位置図（1：20000，条坊は模式図）

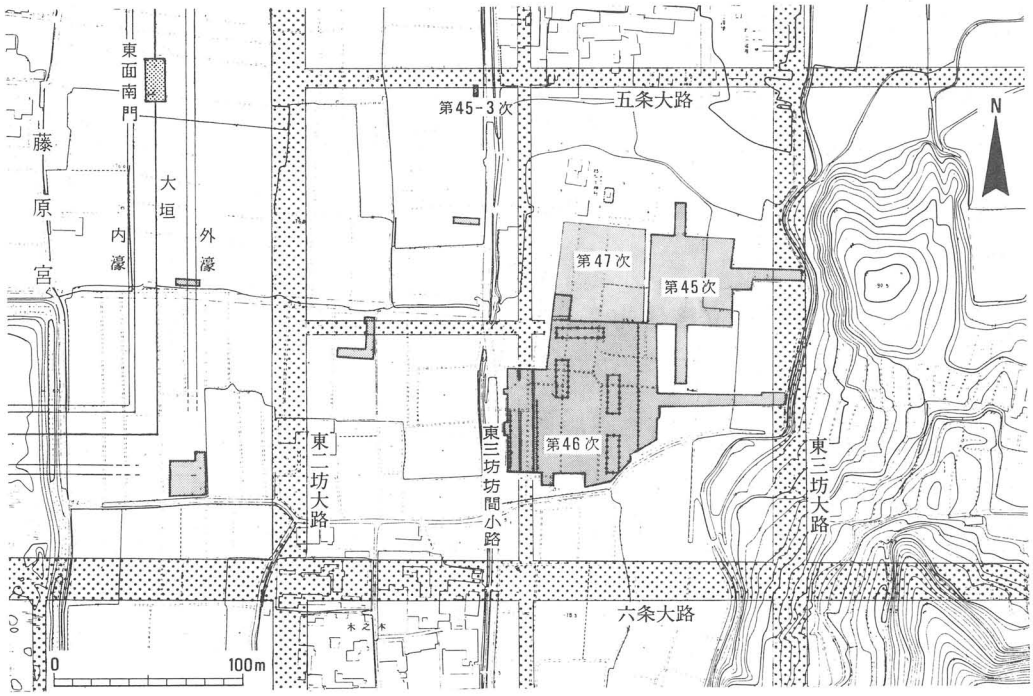
1．左京六条三坊の調査（第45次・46次）

（1985年４月～９月，1985年８月～1986年１月）

この調査は，奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部の新庁舎建設予定地において行なったものである。調査地は香久山の西，畝尾都多本神社の南で藤原京左京六条三坊東北坪・東南坪にあたっている。調査はまず，第45次調査として，予定地の遺構状況を把握することを主な目的とした調査を行なった。その後ひき続いて，第45次調査の成果をもとに，第46次調査として，六条三坊東南坪の西半部を中心に調査を実施した。さらに続いて，第47次調査として六条三坊東北坪の西半部の調査を行なった。３次にわたる調査の総面積は11,875㎡である。なお第47次調査は３月末現在，継続中であり，今回は第45次・46次の調査結果について報告する。

ａ．藤原宮第45次調査

第45次調査は新庁舎建設予定地の全域について，遺構の有無とその残存状況



第２図　左京六条三坊調査位置図（１：4000）

を把握することを目的とし，幅６ｍで東西トレンチ３本（Ⅰ・Ⅱ・Ⅳトレンチ），南北トレンチ１本（Ⅲトレンチ）を設定した。総延長は330ｍに及んだ。

調査の結果，地盤の高い西南部の平坦面では遺構の遺存状態が良好で，藤原京の掘立柱建物２棟，掘立柱塀１条および東三坊坊間路などを確認した。これに対して東半部は香久山の西裾に向って緩やかに傾斜しており，比較的遺構の密度が薄いことが確認されたが，東北部で条坊推定位置とは異なる藤原京の大溝が検出された。西南部の本格的な調査は次に予定していた第46次調査に委ねることとし，敷地東北部の藤原京左京六条三坊の東北坪東半部を中心として調査区を拡張した。調査面積は延べ3,410㎡である。以下，第46次調査区内に吸収された約500㎡（Ⅱトレンチ西半およびⅣトレンチ）を除き，敷地東半部の調査結果について述べる。

調査地区は西から東に向って緩やかに傾斜し，堆積土の層序は基本的に上層から耕土・床土・灰褐色土・茶褐色砂質土・黄褐色粘質土の順であり，灰褐色土には中世の遺物を含む。遺構の大部分は弥生時代の遺物を含む茶褐色砂質土層の上面で検出した。拡張した中央区の西辺では遺物は含まない黄褐色粘質土の上面で検出した。

遺構

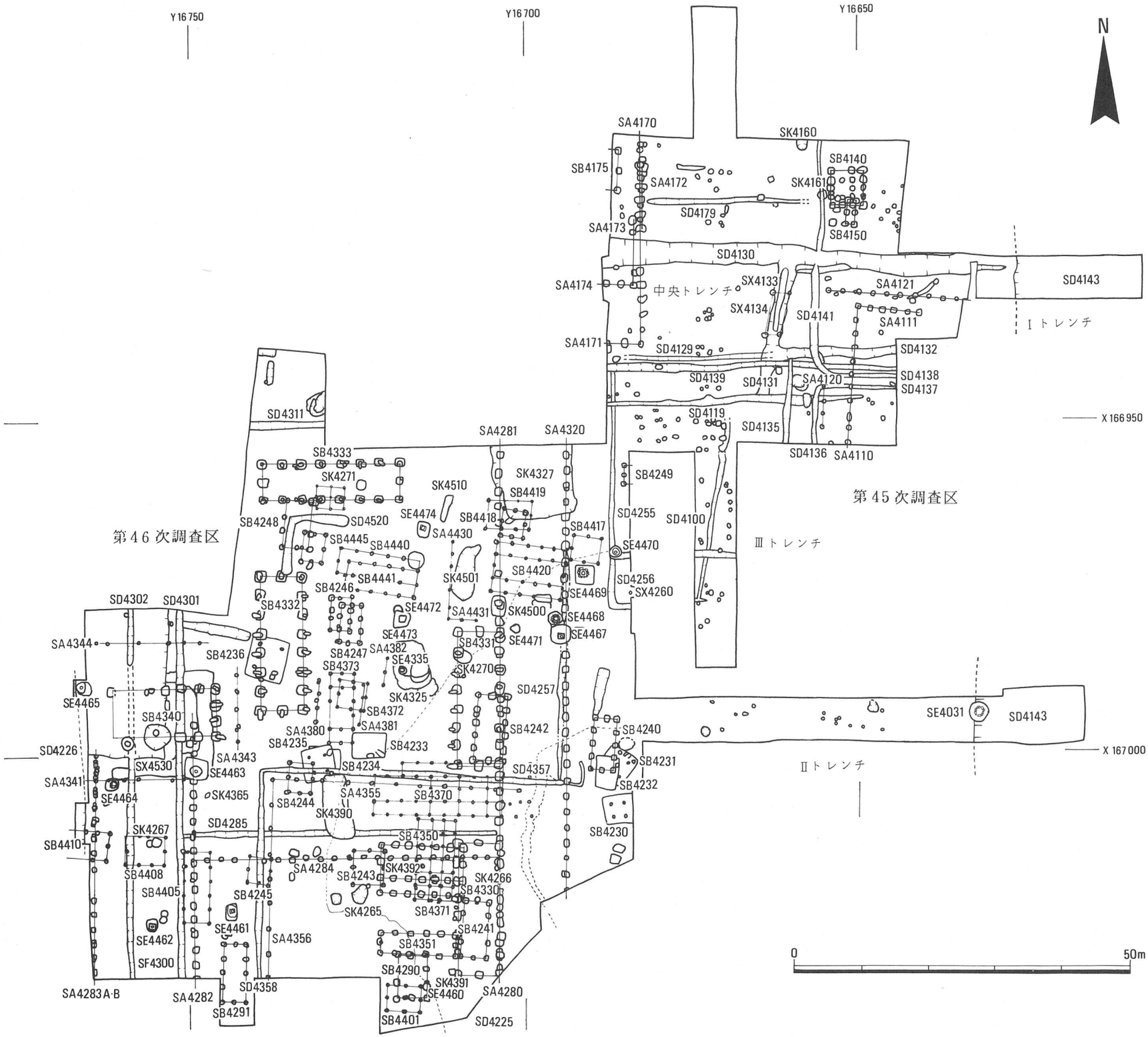
検出した遺構には掘立柱建物，掘立柱塀，素掘溝などがあり，これらは藤原京の遺構，７世紀代の遺構，中世の遺構が主である。

１．藤原京の遺構

藤原京の遺構には掘立柱建物２，掘立柱塀５，素掘溝４，自然河川１などがある。

ＳＤ4130～4132は調査区内で合流する素掘溝である。

ＳＤ4130は中央区ほぼ中央に位置する東西大溝である。東流して，東でやや南に振れている。Ⅰトレンチ東部は遺構面が深く削平されているため，大溝東端部はわずかに溝底部を留めるにすぎない。地山の高い西端での溝の規模は幅4.5m，深さ1.5mであった。堆積層は下から暗褐色バラス・灰褐色砂質土・茶褐色砂質土に分かれる。東半部では大量の砂が一時に埋まり，この砂中から



第３図　第45次・46次調査遺構配置図（１：700,）

藤原宮期から奈良時代の土器が出土した。「美濃」の刻印の須恵器もある（第6図5）。SD4131は南から東西大溝SD4130に合流する南北大溝で，北で東に振れる。中央区南辺部は遺構面が削平されており，南端は底部がわずかに残る。北端の東西大溝への合流部付近で幅2.5m，深さ0.8mである。東西大溝と同時期の開削と考えられるが，堆積土の重複関係があり，奈良時代以前に廃絶していたことが分る。SD4132は東西大溝SD4130の南約11mを流れる東西溝で，SD4130とは逆に西流し南北大溝SD4131に注ぐ。幅1～1.5m，深さ0.6mと比較的小規模であり，堆積層に藤原宮期の瓦や土師器片を含む。SD4131と同時に廃絶したとみられる。

SX4133は南北大溝SD4131の護岸施設で，2条の東西溝SD4130およびSD4132に挟まれた間にのみ構えている。溝の法面下半部を垂直に切り落とし，これに横板を当てて内側に杭を打ち込んだものである。横板の最大残存長は2.3mに及ぶ。杭は腐蝕して残らないが，径5～10cmほどの杭痕跡を確認した。

SX4134は南北大溝SD4131の両肩にある4つの掘形で，掘形の間隔は南北6.2m，東西2.4mである。溝の振れに沿って平面は菱形にゆがんでいる。護岸施設SX4133の上部に懸かる橋の橋脚と考えられ，東西溝SD4130とSD4132の間は道路と考えられる。

自然河川SD4143はⅠトレンチおよびⅡトレンチの東辺で西肩を検出した。幅は19m分を確認したが，調査区外の東方にのびる。香久山の西麓に接して北流し，幅25mほどの規模と推定できる。湧水が著しく，深さは未確認であるが，肩から下1.5mまで中世の遺物を含む青灰色粘土が堆積しており，その下に須恵器小片を含む砂礫層を確認した。この河川が藤原京の時期あるいはそれ以前からあるとすれば，東流する大溝SD4130の落口としたとも考えられる。

SD4100はⅢトレンチ南で検出した南北小溝であり，やや蛇行しながら北流し，北で東に振れる。

SA4170～4174は中央区西辺で検出した掘立柱塀である。南北塀SA4172は，6間分（12.6m）を確認し，柱間寸法は2.1m（7尺）等間である。掘形には炭化物を含み，柱痕跡は明瞭でない。北は調査区外に続くが，南端は東西大溝

ＳＤ4130の北岸で途絶え，大溝と並存した遺構と考えられる。南北塀ＳＡ4170はＳＡ4172と柱筋を揃えて重複する。ＳＡ4172より新しいが，大溝以南にも延び14間分（29m）を確認した。柱間はやはり2.1m（７尺）等間であるが，大溝を挟む３間分を欠く。南端には東西塀ＳＡ4171が西から取り付く。ＳＡ4171は２間分を確認し，柱間寸法は約2.4m（８尺）である。ＳＡ4173は，ＳＡ4170の西約１mに位置する５間（10.4m）の南北塀である。柱は2.1m（７尺）等間で並ぶが大溝にあたる部分の３間分を欠く。掘形はＳＡ4170と重複し，これより古いが，ＳＡ4172とは柱筋がずれ，掘形埋土も異なる。南端には西から東西塀ＳＡ4174が接続し，２間分（4.2m）を確認した。ＳＡ4173・4174ともに柱穴の一部に拳大の石が残り，柱抜取後に投棄されたものと思われる。

ＳＢ4175は中央区西北隅で検出した南北に並ぶ３個の柱掘形で，東西棟建物の東妻柱と考えられる。梁行は南北塀ＳＡ4170の３間分と柱筋を揃え，埋土もこれらに類似する。ＳＢ4140は中央区東北隅で検出した南北棟建物で，弥生時代の遺物を含む厚い整地層の上に造営されており，中央区の中でもやや小高い場所に位置する，桁行４間（5.3m），梁行３間（4.9m）で，北面の西妻柱を欠く。内部の掘形はいずれも小振りで浅いことから間仕切りがあったと考えられる。

その他，藤原京の時期もしくはそれ以降の遺構として東西溝ＳＤ4119・4129・4139・4179，南北溝ＳＤ4135がある。東西溝ＳＤ4119・4129・4139は，いずれも南北大溝ＳＤ4131より新しいが，ＳＤ4129からは飛鳥Ⅱ～Ⅲ段階の土器片が出土している。ＳＤ4179には飛鳥Ⅱ段階の土器片を含む。出土遺物からは遺構の年代が明らかでなく，溝の性格については西延長部に予定している第47次調査の成果を待ちたい。

南北溝ＳＤ4135は東西溝ＳＤ4119およびＳＤ4139よりさらに新しく，ＳＤ4139以北では確認できなかった。埋土には藤原宮期を含む７世紀後半の遺物を含み，土師器壷Ａおよび土師器大盤各１が出土している。

２．７世紀代の遺構

藤原京以前と考えられる遺構には掘立柱塀ＳＡ4110・4111がある。

ＳＡ4110は中央区東南部に位置する南北塀で10間分（20.5ｍ）を確認した。北で東に振れる。ＳＡ4111はＳＡ4110の北端から直角に東に折れる塀で，東西５間（9.2m）である。ＳＡ4110・4111ともに掘形は隅丸方形で，柱間はやや不揃いである。

なお，方位の振れおよび掘形の形状が類似する遺構に掘立柱建物ＳＢ4150がある。桁行２間，梁行１間と小規模な建物で，ＳＢ4140と重なるが，掘形に重複関係はなく，年代が降る可能性も残る。

ＳＢ4140の西側には土坑ＳＫ4160・4161がある。ＳＫ4160は径1.5ｍほどの浅い土坑で，７世紀中葉の大型の丸・平瓦が一括投棄された瓦溜りである。ＳＫ4161はＳＫ4160と同様の瓦を少量含む。藤原京もしくはそれ以前の遺構である。

３．中世の遺構

中世の主な遺構には井戸１，掘立柱塀２，素掘溝４がある。

ＳＥ4031は，Ⅱトレンチ東辺で検出した円形石組井戸で，径約３ｍ，深さ３ｍの円形掘形を有する。石組は人頭大の自然石を積み上げたもので，上部が取り壊されており高さ約２ｍ分が残る。底での径は約0.7ｍである。井戸底には径0.4m，高さ0.3mの曲物１段を裾えている。井戸内からは12～13世紀の土器が出土した。

ＳＡ4121はＳＤ4130の南約３ｍに位置する東西塀で，９間分（19ｍ）を確認した。柱間寸法はやや不揃いだが平均2.1ｍ（７尺）である。東で南に振れる。ＳＡ4120は南北３間（6.3m）の掘立柱塀で北で東に振れる。北延長線はＳＡ4121の西端に延びてこれと直交する位置にある。円形掘形を有することや柱間寸法などがＳＡ4121と類似する。

ＳＤ4136は中央区東南部にある南北溝で幅0.6m，深さ0.2～0.3ｍである。北で東に曲がり，東西溝ＳＤ4137に接続する。ＳＤ4138はＳＤ4137の北約１ｍ隔てる東西溝で，幅0.6m，深さ0.2～0.3ｍである。西で北に曲がり南北溝ＳＤ4141に接続する。ＳＤ4141は南北溝ＳＤ4136の北延長線上に位置し，溝内からは瓦器が出土している。

まとめ

新庁舎建設予定地は藤原京左京六条三坊の東北坪および東南坪に当たるが，第45次調査の結果，両坪の東半部に関しては藤原京条坊を示す遺構が極めて稀薄であった。東三坊大路推定位置にあたる香久山西麓には幅25mに及ぶと推定される自然河川があり，藤原京の時期もしくはそれ以前から存在していた可能性も考えられる。また，東南坪と東北坪の坪境小路（六条条間路）想定位置には条坊関連遺構が認められなかった。やや起伏のある地形が広がっており，京の条坊とは関係なく浅い谷筋を東西大溝ＳＤ4130，南北大溝ＳＤ4131などが流れている。発掘区内でもやや小高い中央区東北隅には建物１棟が存在するが，全体に遺構密度は薄く，明確な京内の宅地割りの状況は検出されなかった。中央区西辺，坪のほぼ東西心近くには南北塀があって建て替えも行なわれ，塀以西には建物の一部も確認されるなど，坪の西半部は東半部とは異なった様相が窺われ，第47次調査の成果を待ちたい。

ｂ．藤原宮第46次調査

第46次調査は，第45次調査の東西トレンチ２条に重複する敷地予定地の西南部に発掘区を設け，東西80m，南北100mの範囲を調査した。調査面積は5,965㎡である。

調査区の基本的層序は，耕土と床土の下に灰褐色土が全面的に堆積するが灰褐色土下の層序は調査区が広いため所により異なる。西南部と東南隅では灰褐色土直下が黄褐色粘土系の地山となり，その上面で遺構を検出した。北半は灰褐色土が厚く，その下の黄褐色ないし灰褐色砂質土が地山となり，西北隅は暗褐色砂礫土が地山となる。この他に調査区東半を蛇行して流れる古墳時代の自然河川ＳＤ4225と，調査区西端をかすめて北流するＳＤ4226があり，この部分ではその上層をなす灰色砂上面で遺構を検出した。

遺構

今回の調査区は多数の柱穴・小穴・土坑・溝などが重複しており，出土遺物

も縄文時代から鎌倉時代まで長期にわたるため，正確な建物の棟数や，それぞれの所属時期についてはなお今後の検討を必要としている。ここでは比較的まとまりもあり，時期もほぼ確定できるものを中心に報告する。主な遺構は掘立柱建物54，掘立柱塀19，素掘溝10，井戸16，土坑38などである。これらの遺構は藤原京の遺構と，それに先行する古墳時代と７世紀代の遺構，京廃絶後の奈良時代，平安時代中期，平安時代後期から鎌倉時代にかけての各時期の遺構に大別できる。なおこの他に水田耕作に伴う縦横に掘られた多数の小溝がある。なかには平安時代に遡る例もあるが，今回は図示・記述を省略する。

１．藤原京の遺構

調査区は藤原京の条坊復原に従えば，左京六条三坊の東南坪と西南坪にまたがる。調査の結果，藤原京の遺構は重複関係から大きくＡ・Ｂ２期に分かれることが判明した。Ａ期の遺構には道路遺構１，掘立柱建物２，掘立柱塀５，素掘溝３があり，Ｂ期の遺構には掘立柱建物４，掘立柱塀３がある。

＜Ａ期＞　調査区西寄りで，左京六条三坊を東西に分かつ坊間路ＳＦ4300と両側溝を推定位置のやや西寄りで検出した。ＳＦ4300は路面幅6.4ｍで55ｍ分を確認した。東側溝ＳＤ4301は幅が0.8～1.3ｍ，深さは南側は浅く0.3ｍ，東西溝ＳＤ4285との合流点以北は深く0.6ｍである。西側溝ＳＤ4302は一部が削平されているが幅が0.6～1.1ｍ，深さは南側が浅く0.1ｍ，北半は深く0.4ｍである。両側溝間の心心距離は測定位置によって若干差があるが，７～7.5ｍとなる。

西側溝ＳＤ4302の西約５ｍの位置で，西南坪の東を限る南北塀ＳＡ4283Ａを確認した。ＳＡ4283Ａは14間分を検出したが，さらに南北に延びると思われる。

一方，東南坪は西を限る南北塀ＳＡ4282と，東を限る南北塀ＳＡ4280・4281で東西に二分され，さらにこの２つの塀にとりつく東西塀ＳＡ4284によって南北にも二分されていることが判明した。西限の南北塀ＳＡ4282は東側溝ＳＤ4301の東約２ｍに位置する。18間分を確認したが，北側は削平されたためか検出できず，また掘形も浅く柱痕跡・抜取穴ともに明瞭ではない。このＳＡ4282から東へ45ｍの位置に東南坪を東西に二分する南北塀ＳＡ4280・4281がある。Ｓ

時期	遺構番号	種類	規模		柱間寸法	
			間数	総長		
			桁行 梁行	桁行 梁行	桁行	梁行
藤原京A期	SA4280	南北塀	24間以上	54m以上	平均2.25 m	
	SA4281	南北塀	9間以上	22.6以上	2.2～2.9	
	SA4282	南北塀	18間以上	38以上	2.1～2.2	
	SA4283A	南北塀	14間以上	32.5以上	2.0～2.3	
	SA4284	東西塀	22間	45.3	2.05	
	SB4290	南北棟	3×2	6.3×4.3	2.1	2.15
	SB4291	南北棟	4×2	8.6×3.3	2.15	1.8・1.5
藤原京B期	SA4320	南北塀	28間以上	65.5以上	2.34	
	SB4330	南北棟	7×2	19.9×6.2	2.84	3.1
	SB4331	南北棟	7×2	19.9×6.2	2.84	3.1
	SB4332	南北棟	7×2	19.7×6.2	2.81	3.1
	SB4333	東西棟	7×2	19.9×5.3	2.84	2.65
7世紀代	SB4240	南北棟	4×2	7.6×3.4	1.9	1.7
	SB4241	南北棟	4×2	8.4×3.8	2.1	1.9
	SB4242	南北棟	5×2	9.9×4.4	1.98	2.2
	SB4243	南北棟	2×2	5.1×4.5	2.55	2.25
	SB4244	南北棟	2×2	4.5×3.4	2.25	1.7
	SB4245	南北棟	2×2	3.9×3.2	1.95	1.6
	SB4246	南北棟	3×2	4.8×3.0	1.6	1.5
	SB4247	南北棟	3×2	5.5×3.1	1.83	1.55
	SB4248	南北棟	3×2	7.2×4.2	2.4	2.1
奈良時代	SA4355	東西塀	10間	36.5	3.5～3.9	
	SA4356	南北塀	8間以上	29.5以上	3.5～4.0	
	SB4350	東西棟	6×2 南庇	12.1×4.9，2.2	2.02	2.45
	SB4351	東西棟	5×2	11.05×3	2.21	1.5
	SB4340	東西棟	6×3	15.6×6.9	2.6	2.3
平安時代中期	SB4370	東西棟	9×2 北庇 南庇	19×3.7，2 2	2～2.2	1.7～2
	SB4371	南北棟	6×3 総柱	12×5.5	2	1.7～2.1
	SB4372	南北棟	2×2	4.2×4.1	2.1	2.05
	SB4373	南北棟	5×2	10.5×3.5	2.1	1.75
平安時代後期～鎌倉時代	SB4405	南北棟	5×2	10.6×4	2.12	2
	SB4420	東西棟	5×2 北庇 南庇	10.5×3.6，2 2	2.1	1.8
	SB4440	東西棟	5×2	12×3.9	2.4	1.95

第1表　第46次調査主要遺構一覧表

A4280は調査区南端から24間分を確認したが，掘形はいずれも浅く柱痕跡や抜取穴は検出していない。ＳＡ4281は，ＳＡ4280北端の柱穴に重複する掘形から北へ延びＳＡ4280より新しい。９間分を確認し，いずれも柱痕跡が残るが，柱間寸法は2.2～2.9ｍとばらつきが目立つ。ＳＡ4280とＳＡ4282に取り付く東西塀ＳＡ4284は22間分を検出し，その北3.5ｍの位置に幅0.6～１ｍ，深さ0.2ｍの東西溝ＳＤ4285を伴う。ＳＡ4284は東南坪を南北に二分する線上よりやや北に位置するが，一応東南坪の西半を南北に分ける塀と考えておきたい。このＳＡ4284で画された南側の区画には，桁行３間，梁行２間の南北棟ＳＢ4290と，桁行４間，梁行２間の南北棟ＳＢ4291が建つが，北の区画ではＡ期の遺構を確認していない。

この他に調査区北端の六条条間路推定位置付近で，その南側溝かと推定される幅0.8～1.2m，深さ0.35ｍの東西溝ＳＤ4311を検出している。しかし，その位置は第21－２次調査（概報８）で検出している南側溝の位置より約６ｍ北へずれており，第23－２次調査（概報９）や第45次調査でも両側溝の位置は確認していない。条間路の有無・位置については，第47次調査の結果をまって検討したい。

＜Ｂ期＞　Ｂ期は東南坪西半の利用状況が一変する。Ａ期の南北塀ＳＡ4280・4281は撤去され，東へ約10ｍ区画を広げて南北塀ＳＡ4320が設けられる。ＳＡ4320は坊間路心より約60ｍ東に位置し，東南坪をほぼ東西に二分する線上に位置する。さらにＡ期の東西塀ＳＡ4284と東西溝ＳＤ4285及び南北棟ＳＢ4290・4291は廃され，坪の西半を一体として利用する区画が新設される。区画内には大規模な南北棟建物３棟と，東西棟建物１棟をコの字形に配する。建物配置は整然とした計画に基づくようで，南北棟ＳＢ4330・4331は東限の南北塀ＳＡ4320から9.8ｍ西をその東側柱筋とし，南北棟ＳＢ4332も西限の南北塀ＳＡ4282から9.8ｍ東を西側柱筋とする。また東西棟ＳＢ4333は，南北棟ＳＢ4332の西側柱筋にほぼ西妻柱筋を揃えており，ＳＢ4330とＳＢ4331，ＳＢ4332とＳＢ4333との距離は11.4～11.7ｍと近似した数値を示す。なお，ＳＢ4330・4331の東側柱筋はＡ期のＳＡ4280の位置を踏襲しており，Ａ期とＢ期の配置計画に密接

な関係があったことを示している。

B期の掘立柱建物SB4330・4331・4332はいずれも桁行7間，梁行2間の南北棟で，その規模もきわめて近似しており同一規格に基づくと思われる。ただし，SB4330と4331は柱穴が比較的浅いのに対し，SB4332は柱穴もひとまわり大きくかつ深いという施工上の違いが認められる。SB4333は桁行の長さは以上の3棟とほぼ同じであるが，梁行が狭くその規格を異にしている。なおSB4330・4331・4333は，いずれも妻柱柱穴がきわめて浅いという特徴がある。

この他検出された遺構に，大土坑SK4335・SK4325と井戸SE4335がある。SK4325は長径7m，短径5.5mの大規模な土坑で，深さは平均0.6mであるが，一部井戸状に深くなる所では1.6mとなる。底からチョウナの削り屑や木片が出土しているので，B期建物建設時のゴミ捨て穴と考えられるが，上層は7世紀中葉の瓦を含む山土で埋め戻している。SE4335は，このSK4325埋め戻し後に掘られた井戸である。径1.1m，深さ1.7mの掘形底に長径50cmの小判形の曲物を埋設し，その外側に長さ1.1m以上，幅20cmほどの縦板材8枚をつきあわせながら組んだ簡素な構造である。井戸内から藤原宮期の土器が出土しており，B期の建物群に伴う井戸と考えられる。なお西南坪の東限南北塀は同位置で柱位置をずらして建て替えられ，B期にはSA4283Bとして存続する。

2．古墳時代の遺構

2群に分かれる竪穴住居7と自然河川2がある。

調査区東南隅の微高地で3棟の竪穴住居SB4230・4231・4232を検出した。SB4230は削平が著しいが，炭化材がみられ焼失住居と思われる。東端を調査していないが方形に配される柱穴4を確認しており，一辺4.3mほどの方形住居に復原できる。SB4231はSB4232が重複しており全体を調査していないが，北壁を除き壁溝が巡り柱穴3を確認している。北壁中央位置にカマドを設け，石を置いて支脚とする。SB4232は焼失しており焼土や炭化した屋根材がほぼ放射状に落下堆積していた。壁溝が巡り，カマドは北壁から約20cm離れて設けられ，これも石を置いて支脚とし煙道が北へ延びる。東壁北寄りに接して貯蔵穴がある。

自然河川ＳＤ4225は，以上３棟の竪穴住居の西側を南から東へ蛇行して流れ，幅が広いところで約30m，深さ0.5mを測る。上層の砂層中に竪穴住居出土のものとほぼ同時期の土器を含み，住居群と流路が併存していたことを示している。

ＳＤ4225西岸の微高地に４棟の竪穴住居ＳＢ4233・4234・4235・4236がある。ＳＢ4233は壁溝が巡り，カマドは東南隅に斜めに設ける。カマドは内側へ位置をずらして作り替えられており，第２次カマドは土師器高杯脚部を芯にして粘土を巻き支脚とする。南壁のほぼ中央に接して貯蔵穴がある。ＳＢ4234は大半がＳＢ4235によって壊されているが，南壁東寄りに接して貯蔵穴がある。ＳＢ4235は壁溝が巡り柱穴が方形に配される。南壁中央に接してカマドの痕跡があり，東壁北寄りに接して貯蔵穴がある。ＳＢ4236は最も大きい竪穴住居で，浅い壁溝が巡り柱穴が方形に配される。北壁中央やや東寄りにカマドの痕跡が残る。南壁東寄りに接して貯蔵穴があり，底の四隅に細い杭を打ち込んだ痕跡がある。

自然河川ＳＤ4226は調査区西端をかすめて北流するが，その東岸の一部を検出した。東岸は深く落ち込んでいるが，上層から６世紀代の土師器甕・須恵器杯が出土した。

３．７世紀代の遺構

重複関係や建物方位の振れ，出土遺物から７世紀代の遺構と考えられるものには掘立柱建物10，素掘溝３，土坑７，埋甕遺構１などがある。

掘立柱建物はいずれも小規模で，建物方位が国土方眼方位に対して北で東へ2.5～８°前後振れる特徴がある。ＳＢ4240・4241は桁行４間，梁行２間の南北棟で，ＳＢ4241は藤原京Ｂ期のＳＢ4330と重複し，これより古い。ＳＢ4242は桁行５間，梁行２間と７世紀代の建物の中では最も大きく，これも藤原京Ｂ期のＳＢ4331に先行する。ＳＢ4243・4244・4245はいずれも桁行２間，梁行２間の小規模な南北棟で，ＳＢ4243は飛鳥Ⅲ段階の土器を含む土坑ＳＫ4265より新しい。ＳＢ4246・4247・4248はいずれも桁行３間，梁行２間の南北棟で，ＳＢ4246がＳＢ4247より古く，ＳＢ4248は藤原京Ｂ期のＳＢ4333より古いことが

判明している。ＳＢ4249は今回検出したこの時期の建物では唯一の東西棟と思われ，その西妻を検出した。以上の建物はその配置に規格性が見られず，かつ小規模でその性格は明らかでない。

南北溝ＳＤ4255・4256は第45次調査区西端から南へ延び，東へ折れ曲がる溝である。幅0.7m，深さ0.3mで全長35m分を検出した。埋土上面から７世紀中葉の丸・平瓦がまとまって出土している。南北溝ＳＤ4257は藤原京Ｂ期の南北塀ＳＡ4320に一部重複する浅い溝であり，断続的に約34m分を検出した。

土坑ＳＫ4265は長径３m，深さ１mを測り，上層の埋土中から飛鳥Ⅲ段階の土師器・須恵器が少量出土した。ＳＫ4266は藤原京Ｂ期のＳＢ4330より古い小規模な土坑で飛鳥Ⅲ段階の土器が出土した。ＳＫ4267・4270からは７世紀中葉の丸・平瓦片が出土しており，ＳＫ4270は藤原京Ｂ期のＳＢ4331より古い。ＳＫ4271は井戸状の土坑で，埋土上層から７世紀中葉の丸・平瓦や飛鳥Ⅳ段階の土器が出土している。

調査区東端で検出した埋甕遺構ＳＸ4260は，上半を欠く須恵器大甕底部を伏せ，その上を拳大の礫で覆う。甕内から７世紀中葉の土師器杯が埋納された状態で出土している。

４．奈良時代の遺構

掘立柱建物３，掘立柱塀６，素掘溝２，土坑１などがある。

調査区南半で，塀と溝で北と西を画し，その中央に東西棟建物２棟を整然と配した一画を検出した。北限の東西塀ＳＡ4355と西限の南北塀ＳＡ4356はほぼ直角に曲折し，その１m外側に東西溝ＳＤ4357（全長47m）と南北溝ＳＤ4358（31m以上）を伴う。東西溝ＳＤ4357の東端は南へは曲がらず，約４m北折して途切れるが，この塀と溝は東西45m，南北40m以上の区画の北と西を囲む一体の施設と考えられる。この区画のほぼ中軸線上に東西棟建物ＳＢ4350と4351が位置する。ＳＢ4350は桁行６間，梁行２間の身舎に南庇を有する建物で，その南に東西の妻をほぼ揃えた桁行５間，梁行２間のＳＢ4351を配する。ＳＢ4350はこの区画の主殿，ＳＢ4351はその前殿風の建物と考えられる。この一群の遺構の方位は，国土方眼方位に対して北で東へ３°前後振れる。

調査区西寄りで検出した掘立柱建物ＳＢ4340は，水田の地下げによる削平を受け西南部の柱穴が失われているが，桁行６間，梁行３間の東西棟に復原できる。柱はいずれも抜き取られている。坊間路ＳＦ4300との重複関係から京廃絶後の遺構と考えられるが，建物方位は藤原京の造営方位とほぼ一致し，先述した一群の方位とも異なり，その性格については今後の検討を要する。なおＳＢ4340の周囲には小規模な塀ＳＡ4341・4342・4343・4344があり，この他に小土坑ＳＫ4365がある。

５．平安時代中期の遺構

平安時代中期の遺構は調査区中央にまとまっており，掘立柱建物４，掘立柱塀３，土坑４などがある。この時期から鎌倉時代にかけての柱穴は径30cm前後で，径約10cmの柱痕跡が残る例が多い。また柱穴底に小礎石を有する例や，根固めの礫が見られる例も多い。

掘立柱建物ＳＢ4370は桁行９間，梁行２間の身舎に，南庇と東寄り７間分の北庇を有する大規模な東西棟である。身舎には東から１間目，３間目，５間目に間仕切りがある。ＳＢ4371はＳＢ4370の南にある桁行６間，梁行３間の南北棟総柱建物である。西側柱筋の柱穴に根固めと思われる礫がある。ＳＢ4372は桁行，梁行とも２間の小規模な建物であるが，小溝群との重複関係は建物の方が古い。一方ＳＢ4373は桁行５間，梁行２間の南北棟であり，これは小溝群より新しい。なお，ＳＢ4372とほぼ同じ振れを持つ小規模な南北塀ＳＡ4381・4382はやはり小溝群より古く，ＳＢ4373と同じ振れをもつＳＡ4380は小溝群より新しい。

ＳＢ4370の西にある池状の大土坑ＳＫ4390は，岸に沿って点々と玉石が遺存していた。埋土から10～11世紀の黒色土器・土師器の一括資料が出土した。ＳＫ4392は小さな土坑であるが，木炭片や焼土塊を多量に含み，10世紀後半の土師器小皿や須恵器甕片などが出土した。またＳＫ4391からは10世紀後半の土師器小皿・甕が出土している。

６．平安時代後期から鎌倉時代にかけての遺構

この時期の遺構は調査区全域から検出したが，中でも３か所に集中して認め

られ，これを便宜的にＡ～Ｃ区に分けて記述する。各区とも主屋と付属建物，井戸・土坑などで構成されており，継続的な宅地とみられる。これらの遺構からは大量の瓦器・土師器と少量の白磁・青磁などが出土しており，その存続期間は11世紀末から13世紀に及ぶものと考えられる。主な遺構は掘立柱建物24，掘立柱塀３，井戸15，土坑多数などがあるが，特にＡ・Ｂ区ではこれ以外にまとめきれない多数の小柱穴・小穴があり，なお多数の建物が存在したものと思われる。ここでは現状で把握できる遺構についてその概略を述べる。

調査区北東のＡ区は約25ｍ四方の範囲を占める。中央に桁行５間，梁行２間の身舎に南北庇を有する主屋ＳＢ4420があり，その周囲に桁行３間，梁行２間の東西棟ＳＢ4419などの付属建物が数棟配置される。この他，東から南にかけては順次掘削された井戸６基と土坑多数が，西側には池状の大土坑ＳＫ4501があり，西辺と南辺の一部を塀ＳＡ4430・4431で画している。主屋ＳＢ4420は柱位置をずらしながら数回建て替えられているが，規模はあまり変化がないようである。なおＡ区の西南隅には皿状にくぼむ浅い土坑ＳＫ4500がある。南半にはコの字形にめぐる石列があり，東辺北寄りの一部を除き周囲を巡る杭列の痕がある。その性格は明らかでないが，近世民俗例などから類推すると，牛馬小屋にあたる可能性が強い。しかし，このＳＫ4500が主屋内に取りこまれているのか，別棟になるのかは判然としない。

Ａ区に伴う井戸は６基ある。ＳＥ4466・4467・4468は重複しており，ＳＥ4466が後二者より古い。ＳＥ4466はＳＥ4467・4468の掘形によって大半が破壊されており，その構造は明らかでないが，径1.7ｍの円形掘形のみが遺存していた。ＳＥ4467は隅丸方形の掘形を有する方形縦板組の井戸で，３段の横桟とそれをささえる四隅の支柱が遺存していた。各辺に３枚の縦板を用いるが，この板材の中には表裏に赤色顔料を塗った転用材とみられる例が２枚ある。この他に隙間を塞ぐために幅の狭い板を外側からあて補強している。なお井戸側上半は廃棄後に抜き取られている。ＳＥ4468は円形の石組井戸で，底に曲物を４段積み重ねている。掘形は径2.1ｍの円形である。石組は西側の一部が崩れており，その部分に桶の底板材４枚をあてがって補修している。この井戸も廃棄後

に上半の石組が抜き取られている。ＳＥ4469は方形の掘形を有する方形の石組井戸で，底に曲物を１段設置している。方形の石組井戸はこれだけである。ＳＥ4470は円形掘形に曲物７段以上を重ねて埋設した井戸で，井戸側を抜き取らず廃棄された状態で埋没していた。ＳＥ4471も円形掘形に曲物を８段以上重ねて埋設した井戸である。廃棄にあたって上半の曲物は抜き取られている。

Ｂ区はＡ区の西側に位置するが，その間には約５ｍ程遺構の稀薄な部分があり，両区の境界を示している。Ｂ区はＡ区とほぼ同規模，同配置の宅地で，桁行５間，梁行２間のＳＢ4440・4441，桁行４間，梁行２間の身舎に北庇を有するＳＢ4442，同規模の建物で南庇を有するＳＢ4443などの東西棟を主屋とし，周囲に桁行・梁行とも２間の小規模な建物ＳＢ4445・4446・4447などを配している。この他に，東あるいは南に井戸，西に鉤の手に曲がる溝を配置する。

Ｂ区に伴う井戸は３基あり，ＳＥ4472・4473は重複している。ＳＥ4472は掘形の南半をＳＥ4473に壊されているが，円形の掘形に曲物を９段以上積み重ねた井戸である。ＳＥ4473は方形の掘形を有する円形石組井戸で，底に曲物を１段設置しているが，上半の石組は廃棄時に抜き取られている。ＳＥ4474は方形の掘形を有する方形の縦板組井戸で，板は完全に抜き取られていたが，底に最下段の横桟が遺存しており，曲物を３段積み重ねている。この３基の井戸は出土した土器や重複関係から，ＳＥ4472，4474，4473の順に掘られたものとみられ，曲物井戸，縦板組井戸，石組井戸という変遷が知られた。

Ｃ区は調査区西南隅に位置し，Ａ・Ｂ区とは建物の配置を若干異にするが，同時期の宅地と考えられる。柱穴の重複状況はＡ・Ｂ区に比べ少ないが，桁行５間，梁行２間で南２間分に間仕切りがある南北棟ＳＢ4405が，柱位置を少しずらしながら３回建て替えられている。この他に，桁行４間以上，梁行２間の東西棟ＳＢ4406，桁行４間，梁行２間の東西棟ＳＢ4407，桁行３間，梁行２間の東西棟ＳＢ4408，桁行２間以上，梁行２間の東西棟ＳＢ4410がある。

以上の建物群の周囲には，井戸ＳＥ4461・4462・4463・4464・4465がある。ＳＥ4461は長方形の掘形を有する方形縦板組の井戸である。板材はすべて抜き取られていたが，底に最下段の横桟と３本の支柱が遺存しており，底に曲物１

段を設置する。ＳＥ4462は隅丸方形の掘形を有する方形縦板組の井戸である。厚さ約５mmのきわめて薄い板材を用いており，底に横桟があるが強度は弱く，板材が内側に倒れこんだ状態で検出した。板材は幅15cmの板を一辺に12枚用い，底に曲物２段を設置している。ＳＥ4463は方形の大規模な掘形を有し，井戸側が完全に抜き取られているので構造は明らかでないが，抜取穴の大きさから縦板組の井戸と考えられる。底から潰れた状態の曲物を検出している。ＳＥ4464は方形の掘形を有する円形石組井戸で，底に曲物２段を設置しているが，石組の上半は廃棄後に抜き取られている。ＳＥ4465はＣ区からかなり離れているので，別の宅地に伴う井戸の可能性もある。不整円形の掘形を有し，上半は抜き取られているので明らかでないが，底に曲物３段以上が遺存しており，掘形の大きさから推定すると曲物を埋設した井戸と考えられる。この他にＣ区に伴う遺構としては小規模な土坑ＳＫ4485・4486・4487がある。

Ａ～Ｃ区以外のこの時期の遺構は建物２，井戸１，土坑３などが分散して認められた。調査区南寄りで検出した桁行２間，梁行２間の東西棟ＳＢ4401は，井戸ＳＥ4460を伴う，ＳＥ4460は円形の掘形に曲物を５段以上積み重ねた井戸である。調査区中央で検出したＳＢ4402は桁行３間，梁行２間の東西棟である。この他，調査区東南隅で検出した土坑ＳＫ4480・4481・4482・4483がある。

７．その他の遺構

以上の各時期の遺構の他に，出土遺物が乏しく，配置などからも時期を決定できない南北棟建物ＳＢ4550・4560，整地層ＳＸ4530などがある。調査区西北で検出したコの字形に巡る整地層ＳＸ4530は幅５m，厚さ0.6mに及び，青灰色粘土と茶褐色砂質土を厚さ５cmほど版築状に積み上げたもので，一部を溝状に掘り下げる。重複関係から奈良時代のＳＢ4340よりは新しく，12～13世紀の井戸ＳＥ4463よりは古いことが判明しているが，その性格は明らかでない。この他に多数の柱穴・小穴・土坑などを検出しているが，今後の検討に委ねここでは省略する。

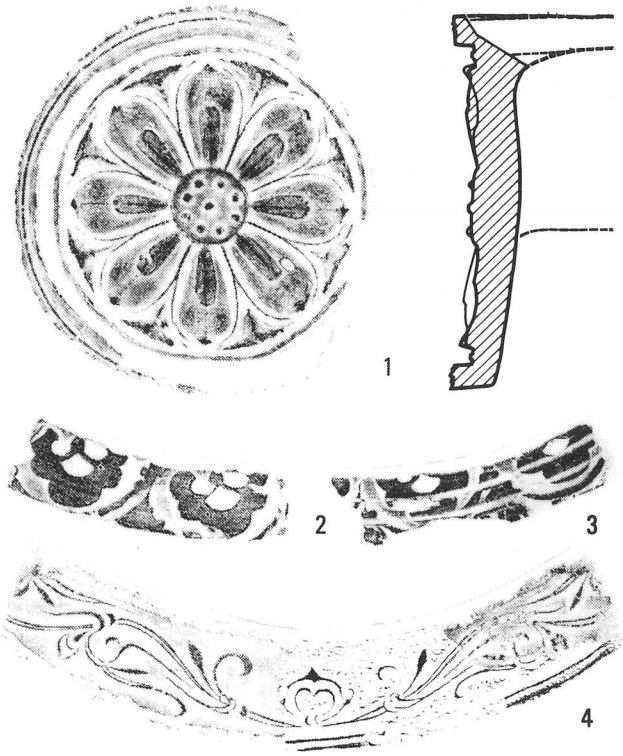
遺物

遺物は縄文時代から鎌倉時代にかけての土器（第６図），石器，瓦（第４図），

木製品，金属製品などがある。縄文時代の遺物は石斧と石鏃が各１点，弥生時代の遺物は弥生土器少量と石斧１点がある。以上の遺物に伴う顕著な遺構は検出していない。

古墳時代の遺物は竪穴住居床面や貯蔵穴から５世紀後半の土師器の良好な資料が出土しており，ＳＢ4232では須恵器が伴うことを確認している。この他，各住居から少量の製塩土器が出土し，ＳＢ4232・4235・4236で韓式土器の小片を，ＳＢ4235・4236では特殊な蓋形土器を検出している。またＳＢ4234からは銅釧の破片が，ＳＢ4231からはガラス小玉と土玉が出土した。

７世紀代の土器は，ＳＫ4265から飛鳥Ⅲ段階の資料がややまとまって出土した以外はあまり顕著なものはない。この時期の遺物で特記しておかねばならないのは瓦で，土坑ＳＫ4270，溝ＳＤ4255からまとまって出土しており，藤原京Ｂ期の大土坑ＳＫ4325からも大量に出土した。これ以外にも遺構に伴うものではないが，調査区北半からの出土が目立った。瓦塼類は軒丸瓦６種16点，軒平瓦６種13点と多量の丸・平瓦があり，特殊なものとしては塼仏１点がある。軒丸瓦で目立つのはＩＡ型式(1)で，大阪四天王寺出土例や桜井市吉備池瓦窯出土例と同笵であり，11点が出土した。その他は各１点出土したもので，山田寺式の軒丸瓦，藤原宮式の軒丸瓦（6273Ｂ・6233系・6278系），大官大寺式の軒丸瓦（6231Ｃ）がある。軒平瓦で目立つのはＩＡ型式(2)で５葉のパルメット文を連続



第４図　第46次調査出土軒瓦（１：４）

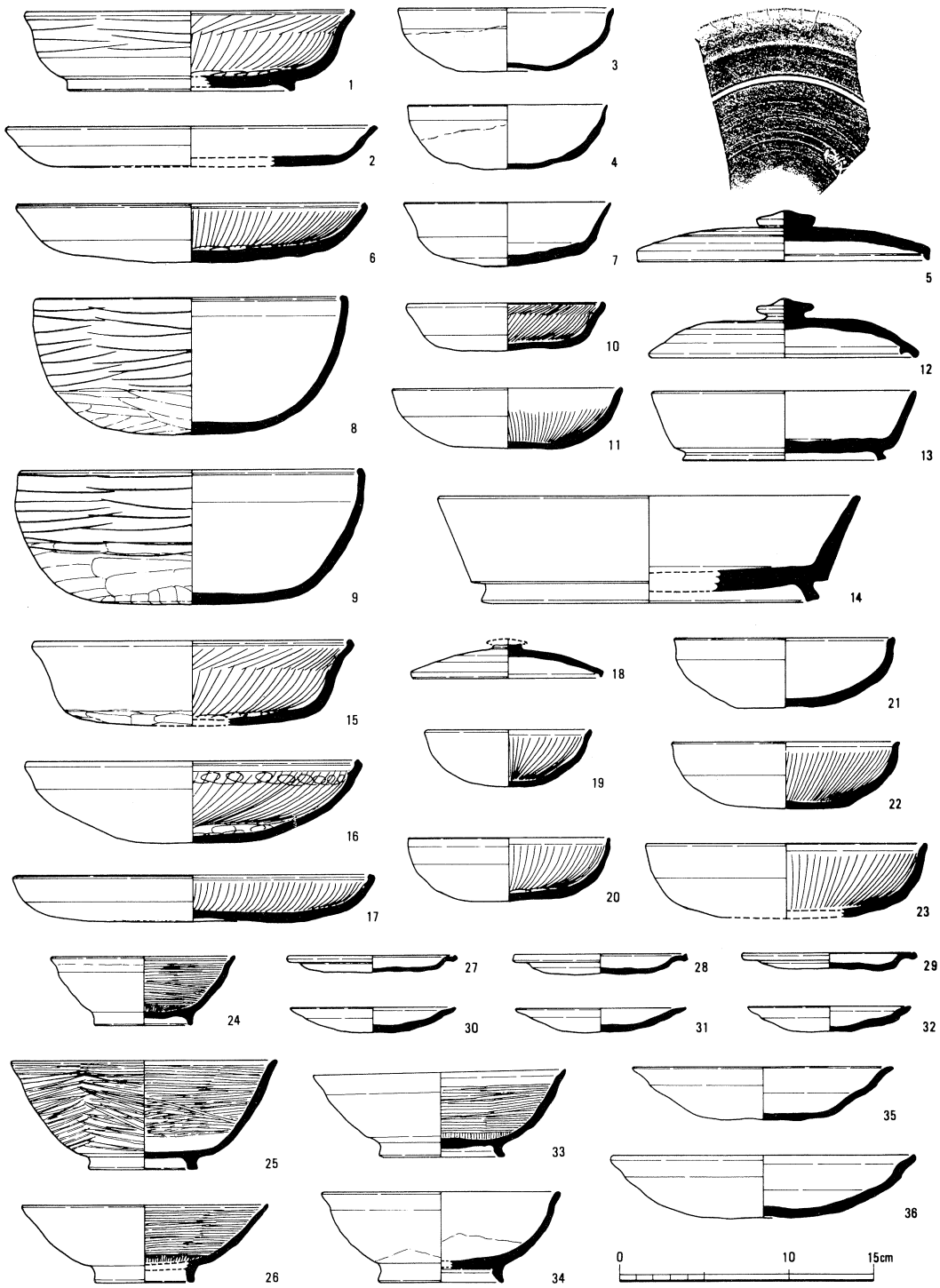
第5図　瓦刻印
（1：1）

押捺したものである。法隆寺若草伽藍出土例と同笵であるが，今回出土した8点にはいずれも笵傷が生じており，押捺の方向も，若草伽藍例が上下交互に押すのに対して全て下向きである点が異なる。この特徴は吉備池瓦窯出土例や日高山瓦窯出土例と共通する。なお，施文後に3重弧文を重ねる例(3)が数点あることも注目される。その他の軒平瓦としては，ⅡA型式(4)が法輪寺出土例と同笵の忍冬唐草文軒平瓦として注意され，また藤原宮式軒平瓦（6641C・6643C）と，大官大寺式軒平瓦（6661B）が各1点づつある。多量に出土した丸・平瓦は軒丸瓦ⅠA型式と軒平瓦ⅠA型式に伴うと考えられ，いずれも比較的大形である。なおSD4255から出土した丸瓦凸面に「池上」の刻印を押した例が1点あり（第5図），刻印は法輪寺出土例と同笵である可能性が強い。塼仏は瓦器を伴う土坑SK4510から出土した。中尊の頭光および菩提樹の葉の一部を留める小片で，三重県夏見廃寺出土の方形三尊塼仏と同原型である。藤原京の遺構に伴う遺物はA・B期ともに少なく，坊間路両側溝や柱穴に少量の土器が見られたにすぎない。ややまとまっているのはB期の大土坑SK4325とSK4327，井戸SE4335に投棄された状態で出土した土器である。SE4335からは藤原宮期の土師器小型甕が7個体，須恵器小壷1個体，大型鍋形土器1個体，カマド大小2個体分などが出土している。

奈良時代の遺物も少なく，溝や柱穴から少量の土器が出土したほか，小規模な土坑SK4635から天平年間の土師器杯が出土した。

平安時代中期の遺物は，池状の大土坑SK4390から10～11世紀の黒色土器・土師器が出土した他は，土坑SK4391・4392からも同時期の土器が出土している。

平安時代後期から鎌倉時代にかけての遺物は量的には最も多い。土器は瓦器・土師器が大量に出土し，少量の白磁・青磁などが伴う。鉄製品は鉄鎌がSE4467・4473から出土し，柄付きの庖丁がSE4474から出土した。この他に刀子や鉄釘などがある。特殊なものとしてはSK4490から箱状容器とみられる漆膜が出土し，また銀製鋳造の飾金具などがある。銭貨には元豊通寶（初鋳1078年）



第6図　第45・46次出土土器（1～5　SD4130，6・7　SD4131，8～14　SK4325，15～18　SK4327，19　SX4260，20　SK4266，21　SK4365，22・23　SK4265，24～36　SK4390，2・7・5・12～14・18；須恵器，24・25　黒色土器B類，26　黒色土器A類，34　灰釉陶器，他は土師器。1：4　拓本のみ1：3）

1点がある。

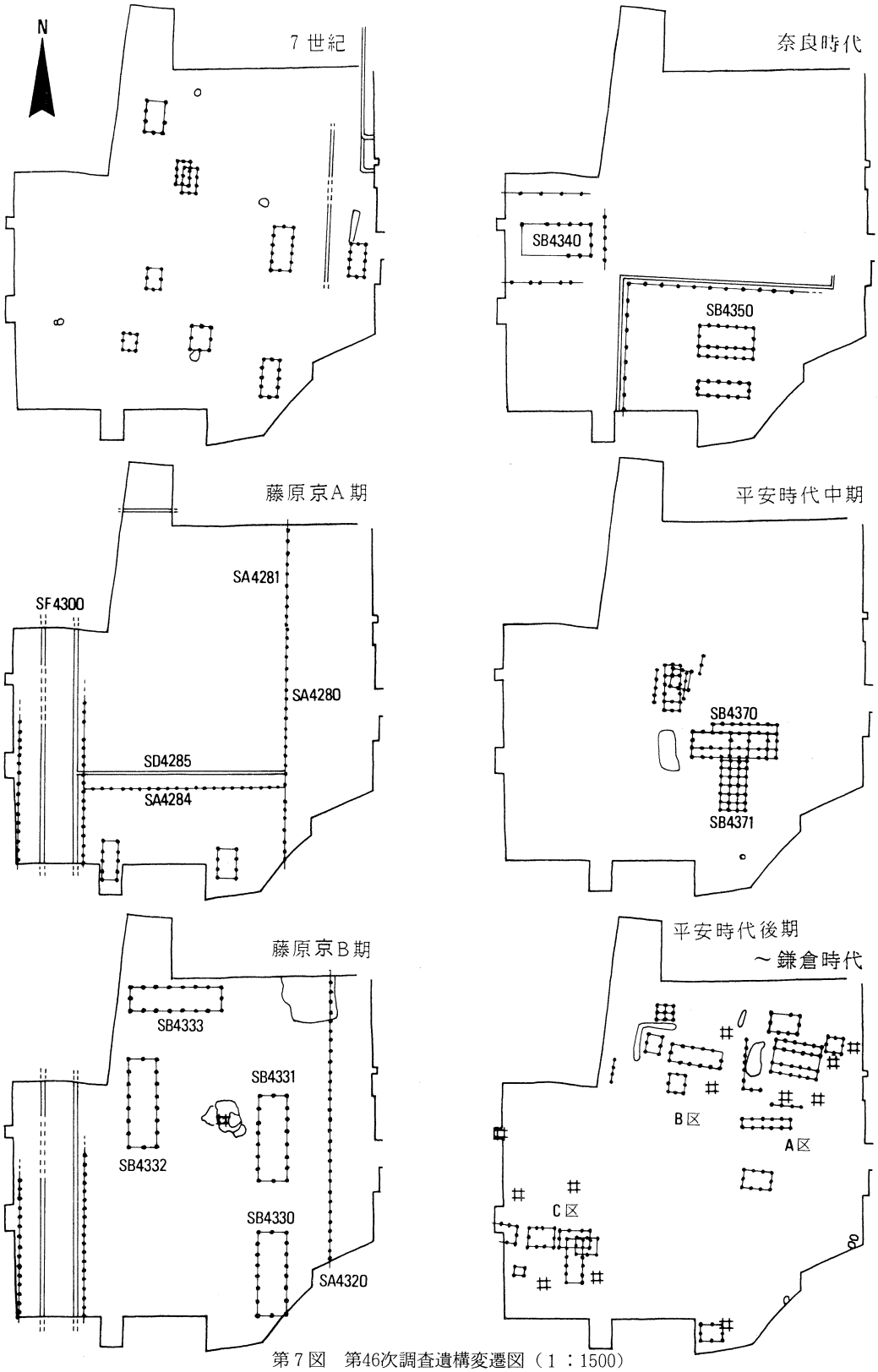
まとめ

今回の調査は広範囲を調査することにより多くの知見が得られた。しかし残された問題点も多く，最終的なまとめは敷地予定地の調査終了を待つこととし，ここでは今回判明した二，三の事項についてまとめておく。

第1の成果は京域に宅地や寺院以外の利用形態があったことを確認したことである。B期の遺構は，左京六条三坊東南坪の少なくとも西半全体を囲いこむ大きな区画を設け，コの字形に大規模な建物4棟を配し井戸を伴うことが判明した。整然とした配置計画に基づくこのような建物のあり方は，一般の宅地としての利用形態とは考えにくく，むしろ宮内官衙との共通性が多く認められる。ここでは東南坪の西半が京内における官衙として機能していた可能性が強いことを指摘しておきたい。なお，調査区北端で検出した東西棟SB4333は，推定条間路上に位置しており，建物の北でも今のところ北限の施設を検出していないので，この官衙地区はさらに東北坪にも広がる可能性がある。

第2の成果は藤原京の遺構に2時期の変遷が確認できたことである。すでに藤原宮の東方官衙においては，官衙建物が大きく2期の変遷を示すことが明らかになり，大宝律令制定後の官衙機構の再編に伴う改作である可能性が指摘されている（第44次調査，概報15）。また京域においても，右京七条一坊の調査で建物に重複する例があること（第19次調査，概報7），さらに左京二条三坊東南坪の調査でも宅地内の比較的大規模な建物に2時期存在することが判明しており，京内の宅地にも若干の変遷があったことが明らかになりつつある（第39・43次調査，概報15）。このように遷都後16年という短期間にもかかわらず，様々な要因に基づく改作が宮の内外において行なわれたことが判明しつつあるが，京域において大規模な区画変更を伴う改作が確認された点に今回調査の意義が認められよう。なお今回の調査結果では，A期の遺構は稀薄でその利用形態やA期の年代の上限についてはなお残された問題も多い。

第3の成果は古墳時代から鎌倉時代にかけてのこの地域の土地利用の変遷がかなり具体的に把握できたことである。



第7図　第46次調査遺構変遷図（1：1500）

5世紀後半に初めてこの地域が居住区として利用され始める。2棟1単位程度の竪穴住居群が，香久山西麓を北流する数条の自然河川にはさまれた微高地に存在していたことが判明し，当時の景観を復原することができた。

6世紀代の遺構は明確でない。しかし，7世紀代に入ると小規模な建物が多くその性格を明らかにしがたいが，なんらかの形で継続的に居住区として利用されたことが窺われる。一方，瓦の出土状態からは，調査区北方に寺院址の存在が推定できる。軒丸瓦ＩＡ型式が少数ではあるがまとまっており，創建の時期は少なくとも7世紀中葉に遡ると思われる。この軒瓦は四天王寺や若草伽藍出土例と同笵で，軒平瓦は若草伽藍出土例より後出することが判明しており，丸・平瓦の特徴を考え併せると，吉備池瓦窯で生産された可能性が強いことを指摘しておきたい。また各1点づつではあるが，軒平瓦ⅡＡ型式と「池上」銘刻印が法輪寺出土例と同笵であり，軒平瓦ＩＡ型式と併せ斑鳩地域の寺院との密接な関係が窺われる点も興味をひく。寺院の遺構は未検出であるが，地名によって「木之本廃寺」と仮称することにする。

藤原京廃絶後の奈良時代にもこの地域が引き続き利用されたことが判ったことも大きな収獲といえる。特にＳＢ4350を主殿とする邸宅風の遺構群や，その性格は明らかでないが，大規模な東西棟ＳＢ4340の存在は奈良時代における旧京域の利用に新たな問題点を提起するものといえよう。

奈良時代以後は一旦水田化したことが平安時代中期の建物ＳＢ4373より古い小溝群の存在によって知られる。その後再び居住区として利用され，平安時代中期から鎌倉時代にかけては，少なくとも4単位以上の宅地が継続的に営まれたことはすでに述べたとおりである。特にＡ・Ｂ区の遺構は，石神遺跡第2次調査で検出した14世紀の東西棟ＳＢ460を主屋とし，溝や塀，牛馬小屋と思われる土坑ＳＫ443・444・445などの配置と共通した点が多く，この地域における13～14世紀の宅地の一つのあり方を示すものとして注目される（概報13）。その後，この一帯は再び居住区として利用されることはなかったようで，縦横に掘られた小溝群の存在が全面的に水田化し現在に至ったことを物語っている。

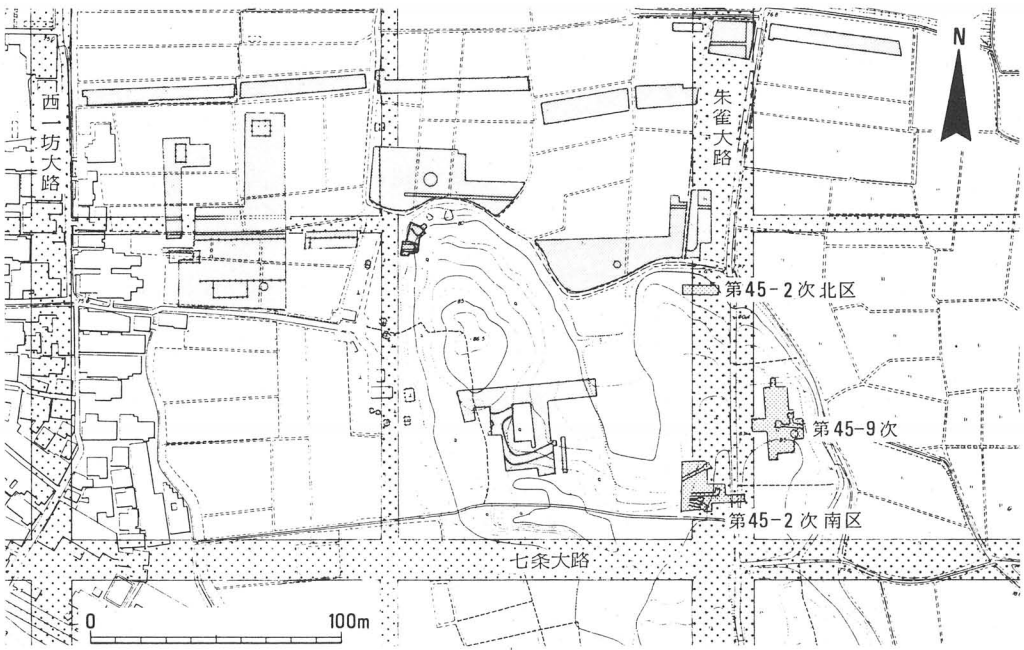
2．朱雀大路・左京七条一坊（日高山）の調査（第45—2・9次）

（1985年4月～6月，12月）

この調査は，橿原市営住宅の改築工事に伴って橿原市上飛騨町で行なったものである。調査は第45—2次調査として朱雀大路想定地区，第45—9次調査として左京七条一坊にあたる地区について実施した。日高山地区では，1984年に調査地から谷1つはさんで西側の丘陵尾根部で行なった調査で，5世紀代の円墳を検出した。これにより，日高山にはかって各時期にわたる古墳が存在しており，その破壊が藤原宮・京の造営とかかわりをもつことが明らかになってきている（第40次調査，概報15）。

a．藤原宮第45—2次

発掘区は北区と南区とに分かれ，両区ともに藤原京朱雀大路想定地内にある。朱雀大路の確認を主な目的として調査を開始したが，南区内に特異な状況で埋没した横穴群を検出するという予想外の成果を得た。



第8図　日高山周辺調査位置図（1：3000）

北区

宮南面中門の南約240m，日高山北斜面の裾付近に設定した。表土を除くと直接花崗岩風化土の地山が露出する状態で，遺構は何も残っていなかった。

南区

北区の更に南約80mの位置，丘陵西斜面の中腹にあたる。南区周辺は橿原市営住宅の建設時に大規模な削平工事を受け，現状は丘陵北側水田面より4～5mほど高い平坦面をなしている。南区東半は，朱雀大路の路面想定部に当るが，厚さ20cm前後の表土の下はすぐに削平された岩盤の上面が顔を出し，遺構の残存は認められない。大路西側溝位置を含む西半でもそれらしい遺構はなく，表土の下に西に落ちる斜面を埋める整地土が見られた。整地土は日高山の北裾から南向きに入りこむ谷を満たし，最深部では厚さ3mを越えている。この下に花崗岩地山斜面に掘りこまれた横穴群が埋もれていた。そしてこの横穴が谷の埋め立てに先立って改葬されていたことも明らかになってきた。

横穴群　南北20mほどの発掘範囲内で4基の横穴を発見した。後述の第45—9次調査で，同一尾根の東斜面にも2基の横穴を検出したことから，第45—2次調査の横穴をW—1～4号，第45—9次調査の横穴をE—1・2号と呼ぶこととする。W—1～4号横穴はいずれも朱雀大路想定部の下にあり，古い谷の西向きの斜面を東に向って切りこんだ墓道先端に一つずつの玄室を持つもので，南北にほぼ平行に並んでいる。4基ともに墓道床面の幅は20cm前後と非常に狭く，両側壁はV字形に立ちあがる。W—2号横穴の墓道のみが階段状の削りだしをもち，東になだらかに昇っているが，他の墓道はほぼ水平につくられている。

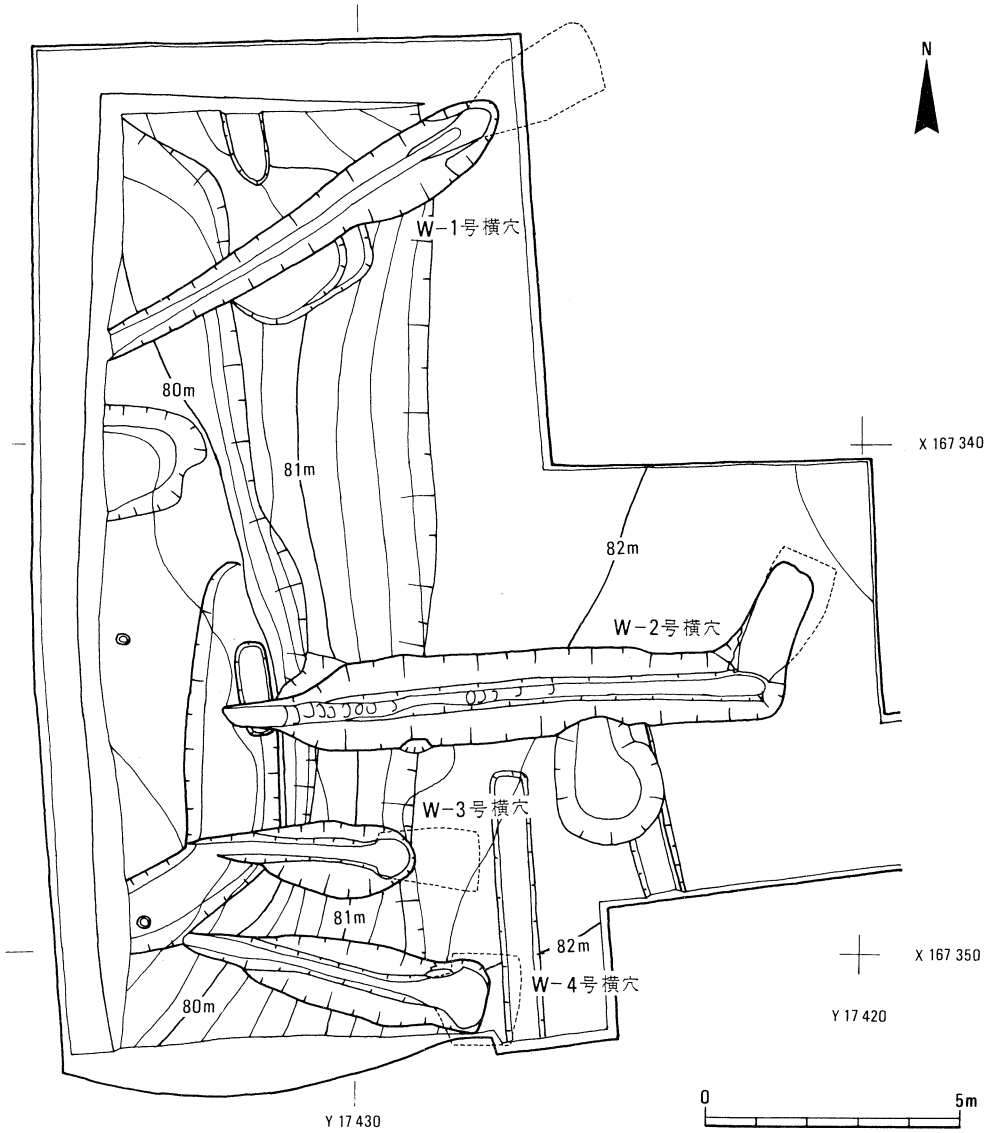
W—1～3号横穴の玄室は，断面がカマボコ形，平面は羽子板形を呈する。W—1・2号横穴の玄室入口部には玄門を意識したような簡単な作りだしが残っていた。W—2号横穴は地山中の花崗岩と花崗岩風化土の境につくられていて，玄室は北側のしっかりした花崗岩脈の方に首を振っている。W—4号横穴の玄室は家形であったと思われ，他の3基とちがって平入りとなっていた。

横穴床面付近に僅かに残された遺物から，W—1号横穴の年代が6世紀末か7世紀初頭，W—2～4号の3基は7世紀中頃と推定される。南側の3基は，

墓道前部に溝状の窪みを共有する一群をなしているが，３号，２号，４号という順で作られたようである。W－３号横穴床部からは，鉄釘のついた板材破片が出土しており，遺体は簡単な木の棺に納められていたものと思われる。

各横穴の規模を簡略にまとめておく。

W－１号　墓道長８m以上。玄室奥行2.9m。奥壁の最大幅1.5m。高さ0.89m。
W－２号　墓道長10.8m以上。玄室奥行2.6m。奥壁の最大幅1.2m。高さ0.68m。
W－３号　墓道長3.7m以上。玄室奥行2.1m。奥壁の最大幅1.18m。高さ0.73m。
W－４号　墓道長5.2m以上。玄室南北長1.76m。北壁幅1.35m，高さ0.9m以上。南壁幅1.15m，高さ不明。

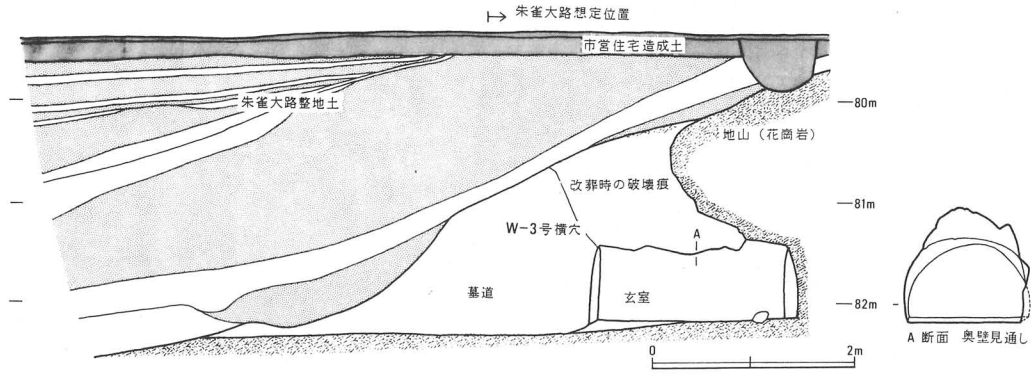


第９図　第45－２次南区調査遺構配置図（１：150）

改葬と整地　今回検出された横穴は4基全部が，谷の整地直前に一度発かれ，内部の遺体と副葬品とが取り除かれていた。状況から見て改葬が行なわれたことは間違いない。

改葬の作業はどの横穴でも同じ手順を踏んでいる。まず，玄室部を確かめるように玄室入口上部から漏斗状の穴をあける。次に玄室および墓道の遺物と土とを取り除き，埋葬前の空の状態に戻す。それから新しい土で，横穴全体をいっぺんに埋め戻している。W－3号横穴では埋め戻しの前に墓道入口で火を焚いた跡が残っていた。改葬の作業はまず，W－2～4号の3基について行なわれ，埋め戻しもこの3基をひとまとめにしている。埋土は3基の横穴を蔽って小山ができるまで盛り上げられ，この小山を埋め込む形で北に向って谷自体の埋立て工事が続けられる。工事関係者がW－1号横穴の存在に気付いたのは，この段階の途中らしく，埋め立てを中断し，一度積んだ整地土の一部を掘り取って，W－1号横穴の改葬がなされている。

谷の埋め立ては上層になるに従って丁寧になり，残存する整地層の最上部では厚さ5cmから10cmほどの層が重なって，版築状の様相を呈している。埋め立ては横穴群東側の尾根を掘り崩した土を使ってすすめられたようで，整地土はだいたいにおいて真東から真西に向って投げこまれている。南側3基の横穴埋土と，これを蔽う谷整地土下部には5世紀後半代の土器などが多量に混りこんでいて，谷埋め立てに伴って東側尾根上にあった古墳が壊されたことを示している。また横穴埋土と整地土の両方に同じ個体の須恵器片が含まれることから，



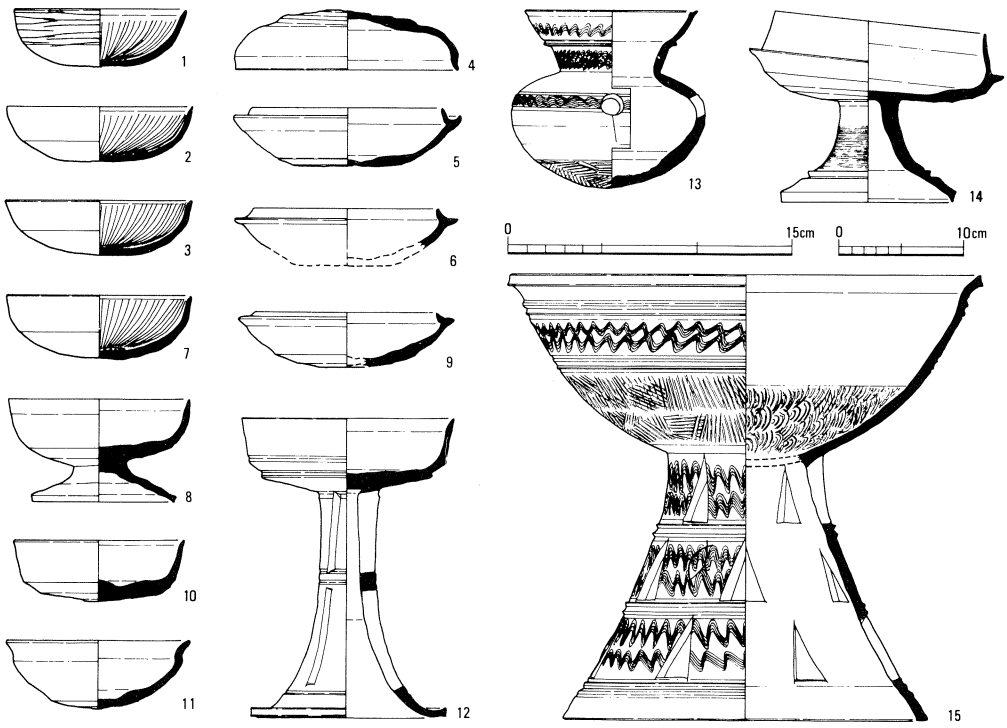
第10図　第45－2次南区W－3号横穴上土層概念図

横穴改葬と谷の整地工事が一時に行なわれたこともはっきりしている。

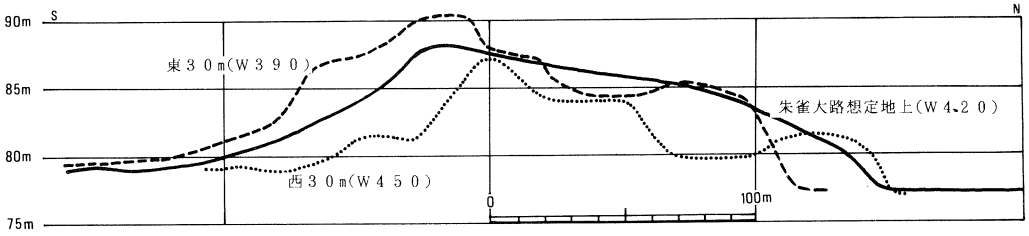
遺物　主な出土遺物を第11図に掲げる。須恵器高杯（12）はW－1号横穴，土師器杯（3）・須恵器杯（4～6）はW－2号横穴，土師器杯（7）・須恵器高杯（8）と杯（9）はW－3号横穴，須恵器杯（10・11）はW－4号横穴出土である。須恵器甕（13）・高杯（14）・器台（15）はいずれも整地土出土である。整地土中の遺物はほとんど5世紀後半の古墳にかかわるもののみで，それ以外には藤原宮もしくはそれ以前の時期と見られる瓦の小片が1点出土しただけである。

まとめ

谷の埋め立て工事，これに先立つ横穴群の改葬，このような大規模な作業が藤原京造営の際以外に行なわれたとは考えがたく，土層の様子，出土遺物のあり方もこの推定を裏づけてくれる。今回の発掘結果は，『日本書紀』持統7年2月の「詔造京司衣縫王等収所掘尸」という命令が忠実に実行された状況を示していると考えたい。



第11図　第45－2・9次調査出土土器（1：4，15は1：6）



第12図　日高山南北断面模式図

南区西半の入念な整地土は朱雀大路の基礎地業の痕跡であり，大路路面，側溝などは後代の削平で失われたと見るのが一番自然であろう。日高山はかなり起伏の多い丘だが，朱雀大路想定部だけが緩やかな斜面になっている。第12図に市営住宅建設前の日高山南北断面の模式図を示す。実線が大路想定部，破線がその東30m，点線は西側30mにあたる。発掘区内の整地はこの実線のカーブにあわせたように谷を埋めていることもわかる。丘陵を越えて朱雀大路を通すために，日高山の南北にわたって切り土，盛り土の工事が行なわれた様子がうかがわれる。

第40次調査の日高山１号墳，今回の横穴群と東側尾根上の古墳など，京造営時に壊された古墳も相当数にのぼることもはっきりした。藤原京造営工事の状況も日高山周辺については，かなり具体的に推定できる資料がそろったといえよう。

ｂ．第45－９次調査

調査地は第45－２次調査区の東北約35mの位置にあり，藤原京朱雀大路に東接する地域である。調査地はすでに宅地化されており，住宅建築に伴う撹乱層（厚さ15～30cm）の直下が，花崗岩風化土となる。この花崗岩風化土上面で，藤原宮期の土坑１と７世紀前半の横穴２を検出した。

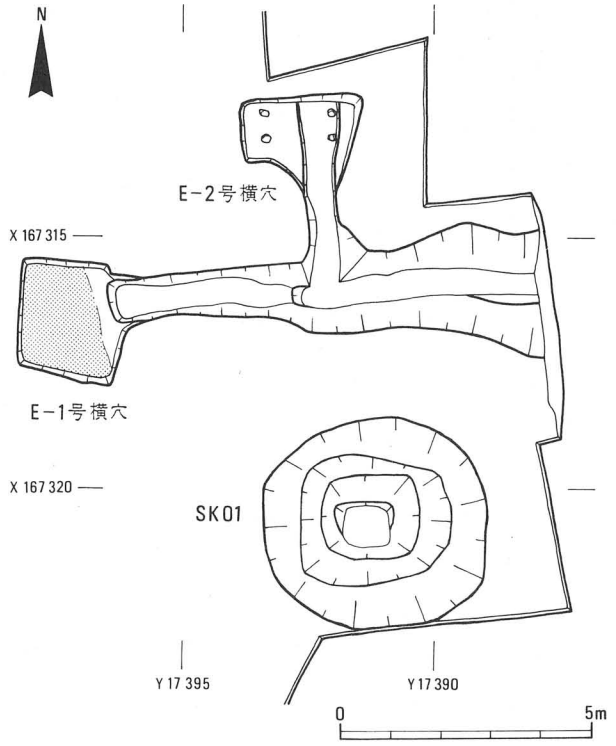
藤原宮期の土坑ＳＫ01は，２段に掘り込まれている。上面の平面形は直径約4.3mの円形，中段は一辺約1.7mの隅丸方形を呈する。深さは，中段までが1.7mで計2.6mとなる。土坑は炭化物を含む暗褐色土や花崗岩風化土で埋め戻され，埋土からは藤原宮期の土器，瓦が少量出土した。形状・規模からすれば，素掘の井戸とも考えられるが，この遺構が丘陵上にあることや，現在では花崗岩風化土からの湧水がみられないことなどを考慮すると，その性格につい

ては不明な点が多い。

7世紀前半の横穴2基は，墓道を共有して，丘陵の東斜面に作られたものである。いずれも天井部および四壁の大半が削平されている。E－1号横穴の玄室は南北方向に長軸をとる。平面形は長方形を呈し，南北は約2.5m，東西は約2m，四壁の現在高は約0.2mである。床面には拳大から人頭大の玉石が乱雑に敷かれている。羨道・墓道は東に向って計8m分を検出した。その断面形を見るとU字形を呈する部分とV字形を呈する部分がある。玄室から東約3.5mの間は断面形がU字形を呈しており，この間が羨道，それ以東が墓道と推定される。羨道部の幅は1m前後，深さは0.6m前後，墓道の最大幅は2.5m，深さは1.6mである。

E－2号横穴の玄室は長軸を東西方向にとる。東西約2.4m，南北約1.3m，現在高は0.7mである。床面の四隅には棺台として使用された人頭大の玉石が各1個配されている。羨道は墓道に対してほぼ直角に作られ，幅0.8m，最大の深さは1.15m，長さは約1.3mとなる。なお，玄室内床面から，7世紀前半の土師器杯2点（第11図1・2）が出土した。

この調査において，藤原宮期の遺構としては土坑を検出したのみであり，藤原宮期における日高山丘陵の利用形態を知る手懸りを得るまでには至っていない。7世紀前半の横穴は先述した丘陵の横穴群（第45－2次調査区）とは別に丘陵東斜面を利用して作られた一群であり，日高山丘陵一帯に大規模な横穴群の存在が推定されるようになった。



第13図　第45－9次調査遺構配置図（1：150）

3．右京八条四坊の調査（第45―6・7次）

（1985年11月～12月）

この調査は露天駐車場造成に伴う事前の発掘調査として橿原市城殿町の集落の西方，本薬師寺金堂の北を通る東西道路の南側3か所の水田で行なったものである。調査地は藤原京右京八条四坊西南坪であり，八条条間路及び宅地遺構が存在していると予測された地点である。調査地近辺でこれまで行なわれた調査によると、1976年に本薬師寺の西南隅における調査で八条大路と西三坊大路の交差点部分を検出し（本薬師寺第1次調査，概報6），また1983年に右京八条四坊東北坪の調査で藤原宮期の井戸を検出しており（第37―12次調査，概報14），八条四坊一帯の遺構の遺存状態は良好であるとみられた。

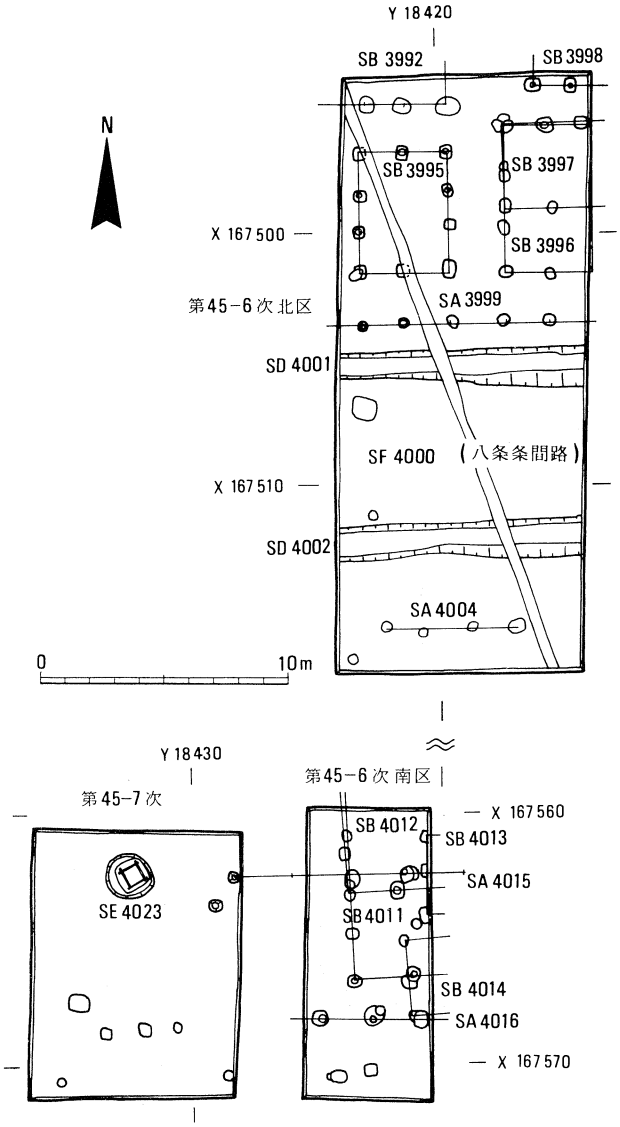
調査は藤原宮第45―6次調査として，東西道路の南側に接して東西9.6m，

第14図　右京八条四坊調査位置図（1：3000）

南北23.5mの北区，北区より約46m南側に東西5.2m，南北11.5mの南区を設けた。さらに藤原宮第45—7次調査として，第45—6次調査南区の西2.5mに東西8.4m，南北11.6mの発掘区を設定して行なった。

堆積土の層序は水田耕土・床土の下に第45—6次北区では黄褐色土層がみられるが，南区および第45—7次調査区では灰色砂であり，この下はいずれも遺物を含まぬ地山である。この地山は地表下0.6mで，第45—6次北区北半が黄褐色土層，その南半が灰色粗砂層，南区および第45—7次調査区が褐色粘土層である。藤原宮およびそれ以前の遺構をこの地山の上面で検出した。

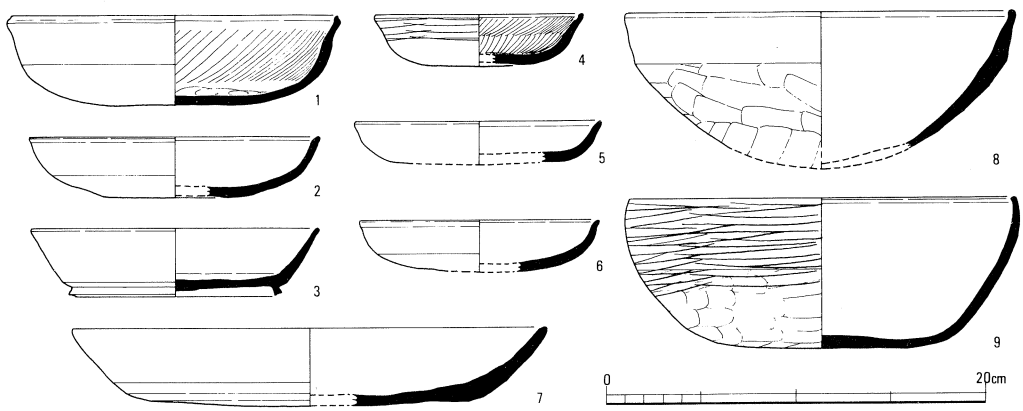
第45—6次北区で検出した主な遺構は八条条間路，掘立柱建物5棟，掘立柱塀2条である。八条条間路SF4000は両側溝を伴い，路面幅5.2m，側溝心心幅6.8m，北側溝SD4001は幅1.5m，深さ0.35m，南側溝SD4002は幅1.5m，深さ0.24mである。両側溝からは藤原宮期の土器（第16図1・2・5・6，いずれもSD4002出土），瓦が出土した。SD4001の北岸より北1.2mに東西塀SA3999があり4間分（13.3m）検出した。塀の柱位置を北側の建物SB3995，SB3996の柱筋にそろえている。またSD4002の南



第15図　第45—6・7次調査遺構配置図（1：300）

岸より南2.7mにある東西塀ＳＡ4004は３間（5.2m）で，柱間寸法は不揃いである。ＳＡ3999の北２mにある南北棟建物ＳＢ3995は桁行３間（4.8m），梁行２間（3.4m）で柱間寸法は桁行1.6m，梁行1.7m等間である。またその東側の南北棟建物ＳＢ3996は桁行３間（5.7m），梁行２間（2.4m）で柱間寸法は桁行1.9m，梁行1.7m等間である。この建物の南側柱筋はその西のＳＢ3995の南側柱筋にそろう。ＳＢ3995の北1.9mにあるＳＢ3992は建物の東南隅にあたるものと考えられる。柱間寸法は1.6mである。またＳＢ3996の北1.5mにあるＳＢ3998は建物の西南隅を検出した。東西棟建物ＳＢ3997は桁行２間以上，梁行２間（3.4m）で，柱間寸法は桁行1.8m，梁行1.7mである。この建物はＳＢ3996と重複しており，ＳＢ3996より古い。これらの建物の柱掘形の大きさはＳＢ3992が一辺0.6～0.9mでやや大きい他は，一辺0.5～0.6mで小さい。以上の建物・塀の所属時期はＳＢ3997が藤原宮期以前である他はすべて藤原宮期である。

第45―６次南区で検出した主な遺構は掘立柱建物４棟，掘立柱塀２条である。建物ＳＢ4011は南北棟の西南隅の部分で桁行４間以上，梁行２間で，柱間寸法は桁行1.9m，梁行2.4mである。ＳＢ4012も南北棟建物の西南隅の部分であるとすれば，柱間寸法は桁行1.6m，梁行1.9mとなる。この建物はＳＢ4011と重複しており，ＳＢ4011より古い。ＳＢ4014は東西棟建物の西側柱筋と考えられ，柱間は1.5mである。この建物はＳＢ4011と重複しており，ＳＢ4011より古い。



第16図　出土土器（１・２，４～６，８・９；土師器，３・７；須恵器，１：４）

これらの建物はいずれも北で西にわずかに振れている。これに対して，東側の壁際で検出したＳＢ4013は柱掘形が一辺0.6～0.9mと大きく，柱筋が南北に通り，振れがなく，建物の西側柱筋にあたると考えられる。柱間寸法は1.6ｍである。ＳＡ4015およびＳＡ4016は東西塀と考えられる。ＳＡ4015はＳＢ4012と重複しており，ＳＢ4012より古い。またＳＡ4016はＳＢ4014と重複しており，ＳＢ4014より新しい。柱掘形からは藤原宮期の土器（第16図８・９）が出土した。これらの建物・塀の所属時期は遺構の重複関係や柱穴出土の土器から考え，ＳＢ4013・ＳＡ4016は藤原宮期で，北で西に振れている建物ＳＢ4011・4012・4014，それに塀ＳＡ4015は藤原宮期以前と考えられる。

第45―７次調査で検出した主な遺構は藤原宮期の井戸ＳＥ4023で，その南側の柱穴や土坑はそれ以降のものである。ＳＥ4023は一辺0.6mの方形の井戸で，その掘形は直径1.8m，深さ1.1mである。井戸側は井籠組で５段積み上げており，二次的に転用された板を使用している。井戸内からは藤原宮期の土器（第16図３・７）や瓦が出土した。土器には，須恵器杯蓋の頂部外面に墨書をもつものがあるが，判読できない。

まとめ

今回の調査で特筆すべきことは次の２点である。第一は八条大路から八条条間路までの南北距離は124.85mで，これまで明らかにされている藤原京の半条分の距離133mより約８m短いことが判明したことである。このことはさらに本薬師寺西南隅にあたる地域での調査により，本薬師寺両塔の心から西三坊大路心までの東西距離が127.8mで，これまで明らかにされている藤原京の半坊分の長さ133mより約５m短いことがわかっていることと合わせて，今後さらに藤原京の条坊復原にあたっての新たな視点となるものと考えられる。第二は，八条四坊の西北坪において，八条条間路の北側に道路に沿う東西塀があり，その内側に南側柱筋をそろえた小規模な建物群が整然と建ち並んでいる様子を明らかにし，さらに八条四坊の西南坪においても井戸・東西塀・建物の存在する宅地の一角を明らかにすることができたことである。今後のこの周辺での調査が期待される。

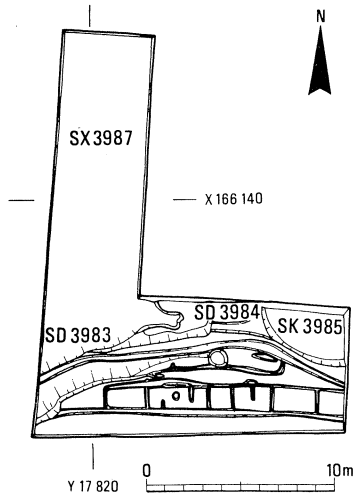
4. 藤原宮・京その他の調査概要

a．藤原宮西北隅の調査（第45―4次）

（1985年8月）

この調査は住宅新築に伴う事前調査として橿原市縄手町で行なったものである。調査地は縄手町の北東，藤原宮西北隅にあたる。宮西北隅周辺は今回調査地の西隣を1968年に奈良県教育委員会が，西45mの地点を1982年に奈良国立文化財研究所が発掘調査を行ない（第36次調査，概報14），この地域の様相を明らかにしている。

調査は南北21m，東西15mのL字形の発掘区を設定して行なった。地山は北側が地表下2.3mであるのに対し，南側が0.8mであり，北側に大きく傾斜している。検出した主な遺構は調査地北側の落込みSX3987と南側の東西溝SD3983・3984，土坑SK3985である。SX3987はその埋土が砂や軟質の粘土で，厚さ1.5mもあり，下層から弥生時代から鎌倉時代までの遺物が出土していることから，北半は検出していないが，沼あるいは川と考えられる。SD3983は南側の高まりの縁辺に沿っており，埋土から瓦器が出土している。SK3985は発掘区外に拡がっており，南北2.4m以上，東西4m以上で，深さ0.3mほどある。埋土は青灰色砂質土で，7世紀後半の土器が出土している。



第17図　第45―4次調査遺構配置図（1：400）

第36次調査で，北面大垣付近に，13世紀頃まで存続し，西外濠SD260に向って西流する自然河川SD3410を検出している。今回の調査で検出した落込みSX3987はSD3410の東延長部にあたる可能性もある。そして，この地域が現在みられるような水田の景観となったのは，SD260，SD3410やSX3987などが13世紀頃に埋没したのちであることが推測される。

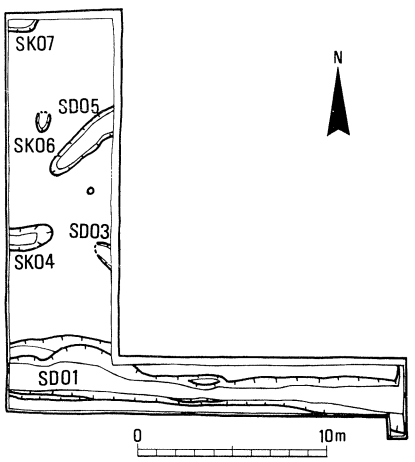
b．右京八条二坊の調査（第41－15次）

（1985年 2 月）

この調査は駐車場造成に先立ち実施したものである。調査地は本薬師寺金堂跡の東北東約180mの水田で，藤原京右京八条二坊の西北坪にあたる。調査は南北方向（21× 6 m）と東西方向（15× 3 m）のＬ字形の発掘区を設けて実施した。調査区は周辺の地形から予想されたように飛鳥川の氾濫による削平を受けており，薄い床土直下が砂層を主とする遺構面となる。藤原京に伴う遺構は認められなかったが，弥生時代の溝ＳＤ05と中世の土坑ＳＫ06・07，中世大溝ＳＤ01を検出した。

弥生時代の溝ＳＤ05は，南西方向にのびる斜行溝で，幅1.3m，深さ0.2m，全長約５m分を検出した。埋土から畿内第Ⅱ様式の甕形土器２個体分が出土した。この他に調査区北端からも同時期の壺形土器が完形で出土しており，土器の出土状態を考慮すると，あるいはこの斜行溝は方形周溝墓の一部である可能性も考えられる。中世の土坑ＳＫ06は長さ約１mの浅い土坑で，埋土中に骨片と瓦器片が認められ，ＳＫ07からも同時期の瓦器が出土した。東西方向にのびる大溝ＳＤ01は，幅3.4～1.2m，深さ0.8～0.6mの比較的大規模な溝で東流していたと考えられる。溝埋土上層から大量の羽釜，火鉢，擂鉢，小皿などの土器類が出土した。これらの土器は15世紀代を中心とするが，この他に７～８世紀代の土師器・須恵器・屋瓦，平安時代から鎌倉時代にかけての緑釉陶器・青磁・瓦器が少量出土した。また15世紀の土器に伴う木製品には黒漆地に朱漆で文様を描く漆器椀３個体分，下駄，糸巻，ツチノコ，曲物，桶の箍，加工木片などがある。

今回検出した中世大溝ＳＤ01は遺物の豊富さから考えると，中世村落の周囲を取り囲む環濠の一部とも考えられる。しかし，西方約60mの本薬師寺第２次調査地区ではその延長部を検出しておらず（概報14），周辺に中世



第18図　第41－15次調査遺構配置図
（１：400）

村落のなごりを留める集落も存在しないので，その性格についてはなお今後の調査を必要としている。

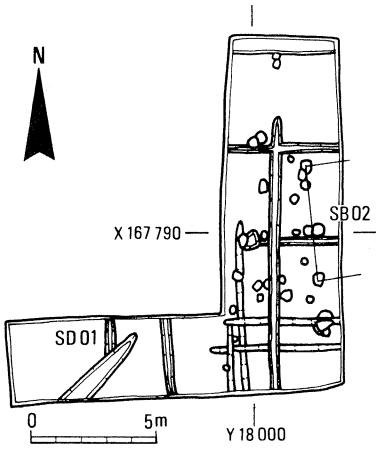
c．右京九条三坊の調査（第45―１次）

（1985年４月）

この調査は奈良総合高等職業訓練校の校舎増築に伴う事前調査として，橿原市城殿町で実施したものである。調査地は本薬師寺金堂の東南約270mの地点で，藤原京右京九条三坊東南坪にあたり，宅地遺構が想定された。調査は幅３m，長さ13mの東西トレンチと，その東部分に北へ幅５m，長さ10.5mの南北トレンチを合わせたＬ字形の発掘区を設けて行なった。

堆積土の層序は盛土，水田耕土，床土，灰色砂，暗灰褐色土，暗灰褐色砂となっている。発掘区西側は，後世の改田により灰色砂，暗灰褐色土の大半は削られており，最下層である暗灰褐色砂面で，一部を中世斜行溝にこわされている南北溝ＳＤ01を検出した。溝内から遺物は出土しなかったが，周辺の暗灰褐色砂中より畿内第Ⅱ様式の弥生土器が出土しており，この溝は，弥生時代に属すると考えられる。

発掘区東側は削平をうけておらず，耕土下約0.5mの灰色砂上面で，８条の中世小溝・小柱穴，下層の暗灰褐色土上面で，掘立柱建物ＳＢ02を検出した。ＳＢ02は西側柱のみの検出であり，全貌は明らかでない。柱掘形は一辺0.5mほどの大きさである。方位の振れの関係で考えれば，藤原宮期以前の建物とすることができる。



第19図　第45―１次調査遺構配置図
（１：300）

今回の調査では，藤原宮期の建物を検出することはできなかったが，藤原宮期以前と推定される遺構の一部が検出され，今後この周辺での調査が期待される。

d．左京六条三坊の調査（45―３次）

（1985年７月）

この調査は住宅新築工事に伴う事前調査として橿原市木之本町で行なったものである。調査地は藤原京左京六条三坊で五条大路が想定される位置である。調査は東西２m，南北６mの発掘区を設けて実施した。堆積土の層序は盛土，水田耕土，床土，灰褐色粗砂で，その下は褐色砂層となる。水田耕土下約40cmの灰褐色粗砂層上面で検出した遺構には，東西方向の浅い小溝と小穴があるが，五条大路に直接関連すると思われる明確な遺構は，今回の発掘区では検出できなかった。また出土遺物がまったくないため，小溝・小穴の時期は確定できなかった。

e．右京九条四坊の調査（第45―５次）

（1985年10月～11月）

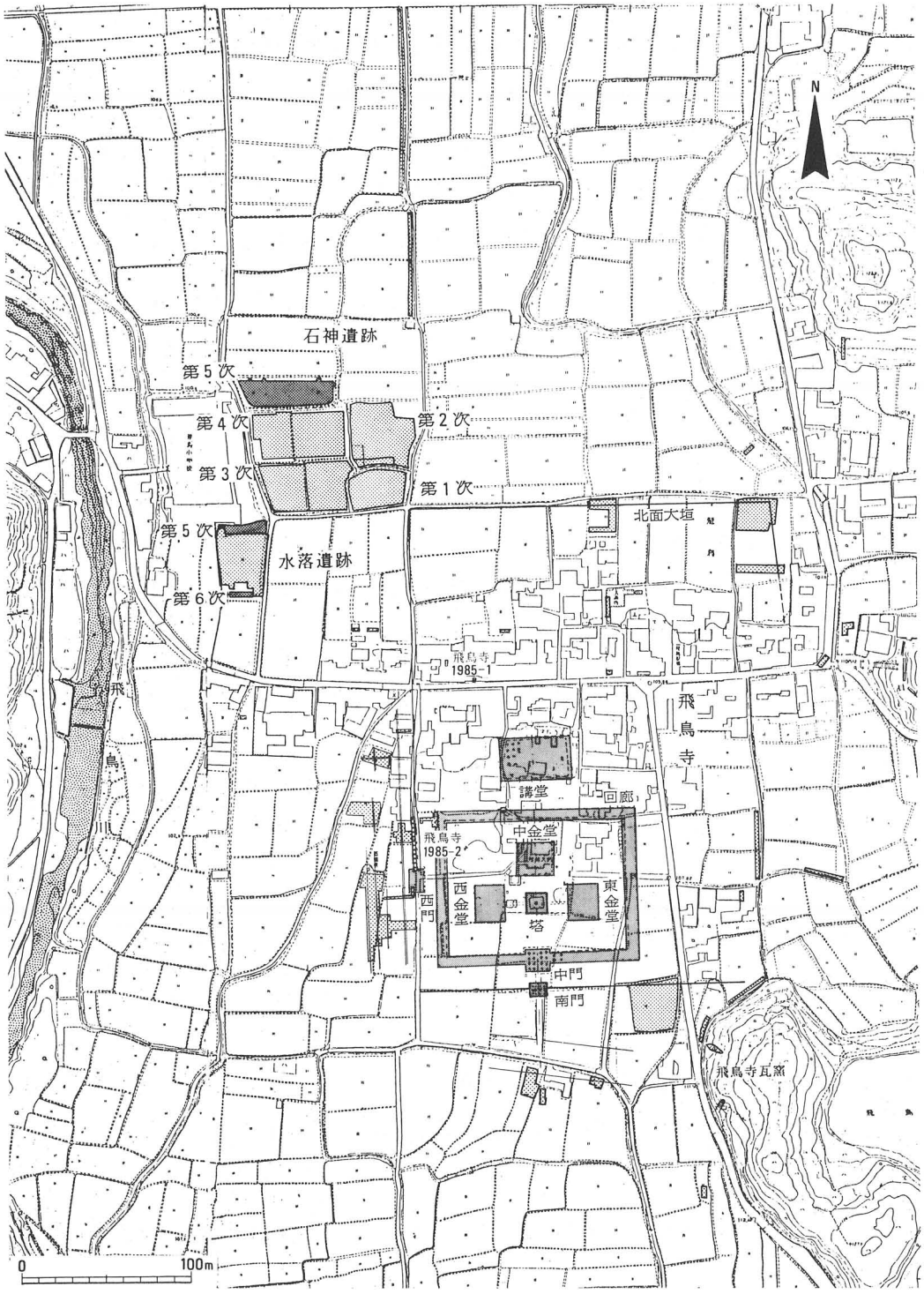
この調査は共同住宅建設に伴う事前調査として，橿原市栄和町で行なったものである。調査地は藤原京右京九条四坊で，九条四坊の宅地遺構及び九条条間路が想定される位置にあたる。調査は東西３m，南北10mの発掘区を設けて実施した。堆積土の層序は水田耕土，床土，灰褐色砂質土，暗灰褐色砂質土と続き，地表下60cmで暗褐色粘土の地山となる。暗褐色粘土上面で検出した遺構には北で西に振れる斜行溝がある。この溝は幅26cm，深さ25cmで，溝埋土からは藤原宮期の瓦・土器が出土しており，周辺に藤原宮期の宅地遺構の存在が予想された。

f．横大路の調査（第45―８次）

（1985年12月）

この調査は住宅建設に伴う事前調査として橿原市山之坊町で行なったものである。調査地は伊勢街道に北接し，大和古道の横大路（藤原京北京極）の位置にあたる場所である。調査は東西２m，南北３mの発掘区を設けて実施した。発掘区の南半部は地表下約１mで暗褐色砂土の地山面となり，地山面は北半部で約30cmさがる。地山面直上から近世の遺物が出土し，横大路に関連する遺構は検出できなかった。

II　飛鳥地域の調査



第20図　石神遺跡・水落遺跡・飛鳥寺周辺調査位置図（1：4000）

1. 石神遺跡第5次調査

（1985年 7 月～1986年 2 月）

日本最古の寺，飛鳥寺の旧寺域の西北に接し，また，「漏刻」の史跡水落遺跡の東北に接する石神遺跡は，「須弥山石」「石人像」の出土地として知られている。石神遺跡はこれらの石造物および石組溝・石敷の存在から斉明紀に認められる外国使節や蝦夷などに対する饗宴の場の庭園施設と考えられていた。また文献考証からは，石神遺跡を含めた飛鳥寺の北側の地域は，天武朝の飛鳥浄御原宮と推定されていた。このように石神遺跡周辺は7世紀中頃以降，重要な地域であったと考えられていたのである。

この地域の性格を明確にするために，1981年以来，石造物の出土地，およびその周辺の水田の発掘調査を継続的に行なってきた。その結果，7世紀中頃（斉明朝）の建物・塀・石敷・石組溝・井戸を中心とする遺構と，これらの遺構を廃棄し，大規模な造成工事を伴った7世紀後半（天武朝）の建物・塀・石敷を中心とする遺構，さらに7世紀末～8世紀初頭（藤原宮直前・藤原宮期）の遺構の存在を確認することができた。斉明朝と天武朝とでは遺構の配置の相違などからみて，遺跡の性格は一変したものと考えられるが，両時期ともに，ほぼ同じ位置の東西塀によって南側の水落遺跡・飛鳥寺と区画されていたことが明らかとなってきている。

第5次調査は第4次調査地の北に接した水田で実施し，調査面積は約960㎡で5次までの調査総面積は約5,900㎡となった。本調査地は第4次調査地と比較すると水田面で約0.5m低く，前調査地で認められた遺物包含層の大半は削平されており，遺構検出面は自然地形の高い東では地表下0.3m，西では0.6mの深さであった。遺構検出面は削平を被っていない所では黒褐色の粘質土，もしくは砂質土の整地土である。

遺構

検出した遺構は縄文時代から中世にかけてのものであるが，これらの中で主要な遺構は7世紀中頃から8世紀初頭のものであり，大きく4時期（A期・斉

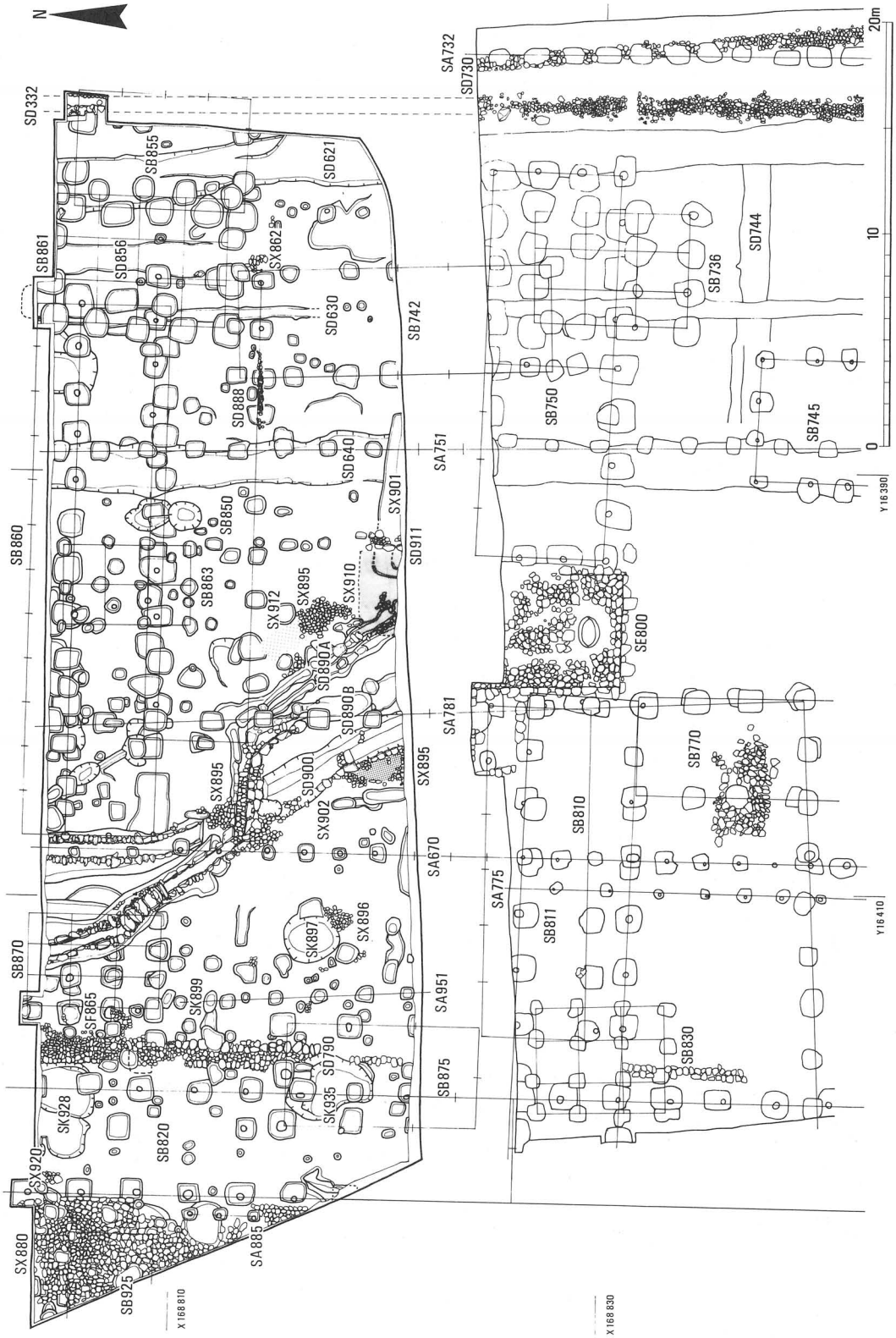
明朝，B期・天武朝，C期・7世紀末，D期・藤原宮期）に分けることができる。

A期　この時期の遺構は第4次調査区北側中央で検出した側石・石敷を伴う特異な構造の井戸SE800を中心に変遷し，掘立柱建物5棟以上，石組溝（一部は暗渠）4条，石敷などを検出した。A期の遺構は重複関係からさらに2期に分けられる。

A－1期には調査区東端の石組溝SD332，井戸SE800の北にある建物SB850，井戸から西北に流れ出る石組溝SD900，調査区西端の石敷SX920などがある。東西棟建物SB850は桁行10間（21.6m）・梁行2間（4.8m）の規模である。石組溝SD332は第3次調査区から続く南北溝で，総延長約70mを確認し，さらに北へと流れていく。本調査地では著しく削平を受けており，また東の側石の位置には吉野川分水が流れているため，西の側石の底部と底石の一部を検出したにとどまった。井戸の排水路をかねる石組溝SD900は幅0.6m，深さ0.7mの規模で全長27mを確認した。SD900はSB850の西側付近からは暗渠になっていたものと考えられる。溝の底石は開渠部分で一部検出しただけである。また，SD900の開渠部分の周辺は溝へとむかってゆるやかに傾斜する石敷SX895Aでおおわれていたものと想定できる。石敷SX920は数石しか確認できなかったが，後の石敷SX880より約0.5m低い位置にある。柱穴の存在から建物SB850以外にも他の建物が存在したようであるが，整地土・上層の石敷等を完全に除去しなければ全貌を明らかにできないため，検出をさしひかえた。

A－2期には，調査区西端に南北方向の長廊状建物SB820が建ち，その東側に建物が並ぶというかなり大きな改修があり，遺跡の西方の一画が一変する。建替えなどから2小期にわけられる。

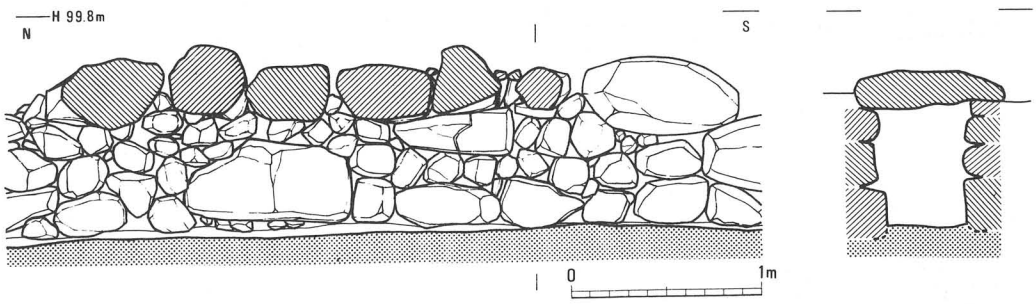
A－2-1期にはSB820の東に，建物SB855・860・870の3棟が東西に並び，ほぼ柱筋をそろえて建てられる。井戸から北方へと流れる溝はこの時期には存在しない。建物SB861は桁行4間（8m）・梁行3間（推定5.5m）の南北棟である。建物SB860は桁行12間（24.8m）・梁行3間（6m）の北



第21図　石神遺跡第５次調査遺構配置図（１：300）

庇をもつ東西棟建物で，西側柱筋はA－1期の石組溝ＳＤ900の暗渠部分の蓋石をはずし，埋めたて，東の側石をこわして柱を建てている。建物ＳＢ870は桁行３間（６ｍ）・梁行３間（4.5m）の総柱の南北棟建物で，東側柱筋は布掘りとなっている。長廊状の南北棟である建物ＳＢ820は梁行２間（4.9m），桁行は第４次調査とあわせて15間（37.2m）を確認した。ＳＢ820は柱間などからみると，この一画の南を限る東西塀ＳＡ600にとりつく可能性もある。ＳＢ820の東側にはゆるい傾斜をもつ石組の雨落溝ＳＤ790があり，西側には柱に接して東側に見切をもつ石敷ＳＸ880が西へと広がっている。ＳＢ820は立柱後に整地が行なわれており，整地土が残存している所では掘形は認められずに柱痕跡しか認められない。この整地土のうえをＳＸ880の裏込めの黄色粘土がおおう。ＳＡ885は２間（３ｍ）の南北塀で，その掘形は黄色粘土におおわれている。構築の手順としては，ＳＢ820立柱→整地→ＳＡ885立柱→黄色粘土裏込め→ＳＸ880となる。しかし，柱位置などからみると，ＳＡ885はＳＢ820にかかわる足場穴の可能性が高い。調査地西北30ｍには「浄御原宮推定地」とする石敷が露出保存されているが，ＳＸ880の位置・標高からみると，この石敷と一連のものと考えられる。調査区東端の石組溝ＳＤ332は建物ＳＢ855の柱穴と重複し，建物より古いことから，この時期にＳＤ332は廃され，東のＳＤ730が新たに設けられたものと考えられる。

A－2-2期には一部の改修が行なわれる。総柱建物ＳＢ870は廃され，その位置に井戸から西北に流れる石組溝ＳＤ890が新たに掘られる。ＳＤ890は西方向から西北方向に流路を変える位置から北は暗渠であったと考えられる。



第22図　ＳＤ890暗渠部分断面図（１：40）

溝の規模は開渠部分で幅0.4m・深さ0.4m，暗渠部分で深さ0.6mで開渠の部分には底石が敷かれている。井戸から流れ出る部分，約16mには改修が認められ，東の溝が古く，西の溝が新しい。東西石組溝ＳＤ888は底石だけ残存し，幅0.3mで４ｍ検出しただけだが，ＳＤ732から水を引きＳＤ890の西流する部分に合流したものと想定できる。井戸から暗渠に至るまでのＳＤ890の両側は溝へむかってゆるやかに傾斜する石敷ＳＸ895Ｂ・Ｃでおおわれている。石敷ＳＸ895はＡ－１期からかぞえて３度の改修を受けている。またＳＢ820とＳＢ860との間は暗渠上を石敷ＳＦ865が通路として敷設され，この位置では雨落溝ＳＤ790も小ぶりな石に改められている。

Ｂ期　Ａ期の遺構が廃され大改造が行なわれる。この時期の遺構には掘立柱建物ＳＢ861・875，掘立柱塀ＳＡ670，石敷ＳＸ862がある。建物ＳＢ861は桁行４間（８ｍ）・梁行３間（６ｍ）の南北棟建物で一部に床束がみとめられる。ＳＢ861の周囲は南側に残る石敷ＳＸ862からみて，幅約２ｍにわたって玉石が敷かれていたものと考えられる。建物ＳＢ875は桁行３間（９ｍ）・梁行２間（4.8m）の南北棟である。南北塀ＳＡ670は第３次調査区から続き36間（63m）分を検出しており，この地域を東と西に区画する塀であろう。

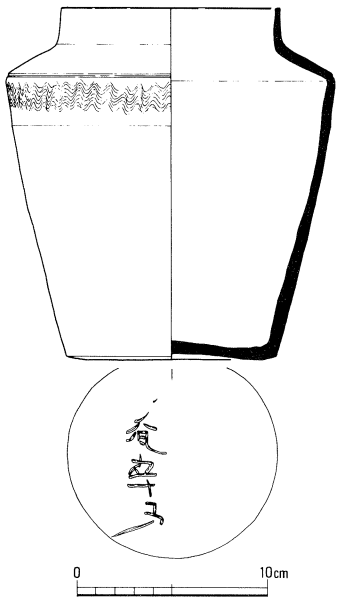
Ｃ期　この時期の遺構には掘立柱建物ＳＢ742・863・925，掘立柱塀ＳＡ751，素掘溝ＳＤ640，方形石組ＳＸ910，石敷ＳＸ896，バラス敷ＳＸ912などがある。建物ＳＢ742は第４次調査区から続く南北棟建物で，桁行６間（14.4m）・梁行２間（4.8m）の規模である。建物ＳＢ863は桁行３間（６ｍ）・梁行２間（４ｍ）の総柱の南北棟である。建物ＳＢ925は桁行２間以上（柱間２ｍ）・梁行２間（４ｍ）の東西棟建物で，Ａ期の石敷ＳＸ880を厚さ10cmのバラスで埋めた後に建てられている。塀ＳＡ751は素掘溝ＳＤ640の東肩にたてられた柱間2.1mの南北塀で，総延長48mを検出した。方形石組ＳＸ910は人頭大の玉石で周囲をかこみ，その内側には拳大のバラスを敷きつめ，東側には石組溝が存在し，東西約４ｍの規模である。ＳＸ910の周辺は石敷ＳＸ896・バラス敷ＳＸ912で舗装されていたと考えられるが，石敷・バラス敷ともごく一部を残すだけである。

D期　この時期の遺構には，掘立柱塀ＳＡ781・951，素掘溝ＳＤ621がある。塀ＳＡ781は柱間2.5mの南北塀で，第４次調査区から続き，総延長35mを検出した。塀ＳＡ951は柱間2.1mで，５間以上の南北塀である。

遺物

本調査地からも第３・４次調査同様に，大量の土器・金属製品，および瓦・石製品が出土している。

土器はＢ～Ｄ期にかけての整地土・土坑などから出土した土師器・須恵器が大半であるが，他に縄文土器，弥生土器，古墳時代の土師器・須恵器などがある。土製品には円面硯，土馬，ルツボ，土玉などの他，Ｃ期の溝ＳＤ640から「贄五十戸」のヘラ書き銘をもつ須恵器壺が出土しており，注目される（第23図）。この須恵器は大阪南部のいわゆる「陶邑」の製品ではなく，土器そのものからでは今のところ決定的な年代を知ることができない。「贄五十戸」の「五十戸」は「里」の意味で，「ほとぎのさと」と読むことができ，木簡などにみとめられる「五十戸」の例を増したことになる。だが『倭名類聚鈔』に該当する郷名はみとめられず，具体的な地名を示すか否かは不明である。もし，固有名詞でないとすれば，「須恵器製作者の里」を意味するのであろうか。



第23図　ヘラ書き土器（１：４）

金属製品は主として，焼土・炭化物を多量に含む包含層から出土しており，その大多数は鉄製品で，鏃・釘・鋏（かすがい）・鎌・鉏（やりがんな）・刀子・紡錘車・鍔（つば）などがある。また，青銅製の香炉の蓋も出土している。

瓦は丸・平瓦ともに前回までの調査に比して出土量は少ない。軒瓦は７世紀初頭の飛鳥寺所用の軒丸瓦と７世紀後半の川原寺所用の軒丸瓦が１点ずつ出土している。

石製品では砥石，古墳時代の滑石製有孔円盤，弥生時代の石庖丁・石鏃，縄文時代の遺物包含層などから石鏃・磨製石斧も出土している。

まとめ

今回検出した7世紀中頃から8世紀初頭の遺構は大きく4時期にわけられるが，ここでは過去の4次にわたる調査も含めて，調査結果をまとめておこう。

A期は斉明朝にあたり，この時期の遺構は饗宴に関わる施設と推定しているが，今回の調査によって第4次調査で検出した大規模な井戸ＳＥ800を中心に，建物の建替えや石組溝のつけ替えなど，短期間に3回の改造が行なわれていることが判明した。このような複雑な遺構の変遷は，A期の遺構の性格を考えるうえでも，また，「興事を好」んだ斉明朝を考えるうえでも重要な資料となろう。ＳＥ800からの水は，当初は石組溝ＳＤ900で，次いでは石組溝ＳＤ890によって，曲折しながら北方へと導かれ，さらに調査地の北側へと暗渠を通って流れていく。A－2－1期ではＳＥ800から北方への水の供給はたたれるが，石組溝ＳＤ730など，別ルートによる水の供給が行なわれたものであろう。このように，南の水落遺跡との間を大規模な東西塀ＳＡ600で区画した饗宴空間はさらに北方へと広がり，南北70m以上の規模であることが確認できた。また，石組溝ＳＤ790から西は，地山の標高が，西の飛鳥川にむかって急激に下がっていくことを確認することができた。A－1期の石敷ＳＸ920は地山上に厚さ0.5～0.6mの整地を行なった後に敷設され，A－2期の石敷ＳＸ880はＳＸ920の上にさらに0.3～0.4mの整地を行なってから敷設され，調査区西側ではあわせて約1mの盛土整地が行なわれている。また，今調査区東側でも，石組溝ＳＤ332の底石や掘立柱建物の掘形底面の標高からみると，当初の生活面は抜き取られた石組溝側石分の高さだけ高く，0.5～0.6mの盛土整地が行なわれていたことが想定できる。このように，A期の造成および改造にあたって大規模な盛土整地が行なわれたことが確認でき，この時期の造営がはなはだ大規模なものであったことが想定できる。

B期は天武朝にあたる。A期の遺構は廃棄され，石敷・石組溝の石のかなりの部分がこの時期の改造にあたって抜き取られている。本調査地東側では建物ＳＢ861の周囲の石敷ＳＸ862がB期の生活面を示すことから，最大0.5mの切土が行なわれたと考えられる。第2次・第3次調査でみとめられる盛土整地と

もども，この区画内の大造成工事が行なわれた時期である。建物配置も東西棟を中心とするＡ期と比べると，南北棟が多い。とくに第４次調査で検出した２棟の３×３間の総柱の南北棟ＳＢ735・736と，今回検出した４×３間のＳＢ861の３棟は規模もほぼ一致し，柱筋もほぼ揃えた整然とした配置をとって南北に並んでいる。この時期の性格はＡ期の饗宴施設的な性格とは異なったものが考えられる。また，南北塀ＳＡ670によってこの区画は東西に分割され，それぞれの区画が異なった性格をもって使用されていたものと考えられる。南の東西塀ＳＡ560で，水落遺跡・飛鳥寺と区画された空間はさらに北へ広がり，Ａ期同様南北70ｍ以上の規模であることが確認できた。

Ｃ・Ｄ期は藤原宮の直前，および藤原宮の時期にあたる。Ｃ期の造営方位はほぼ真北に近く，Ｄ期は北で西に振れている。遺構の性格付けなどについては今後の調査の進展にまちたいが，７世紀末から８世紀初頭にかけてまで，この地域が区画されて盛んに利用され続けていたことが判明したことの意義は大きいものであろう。

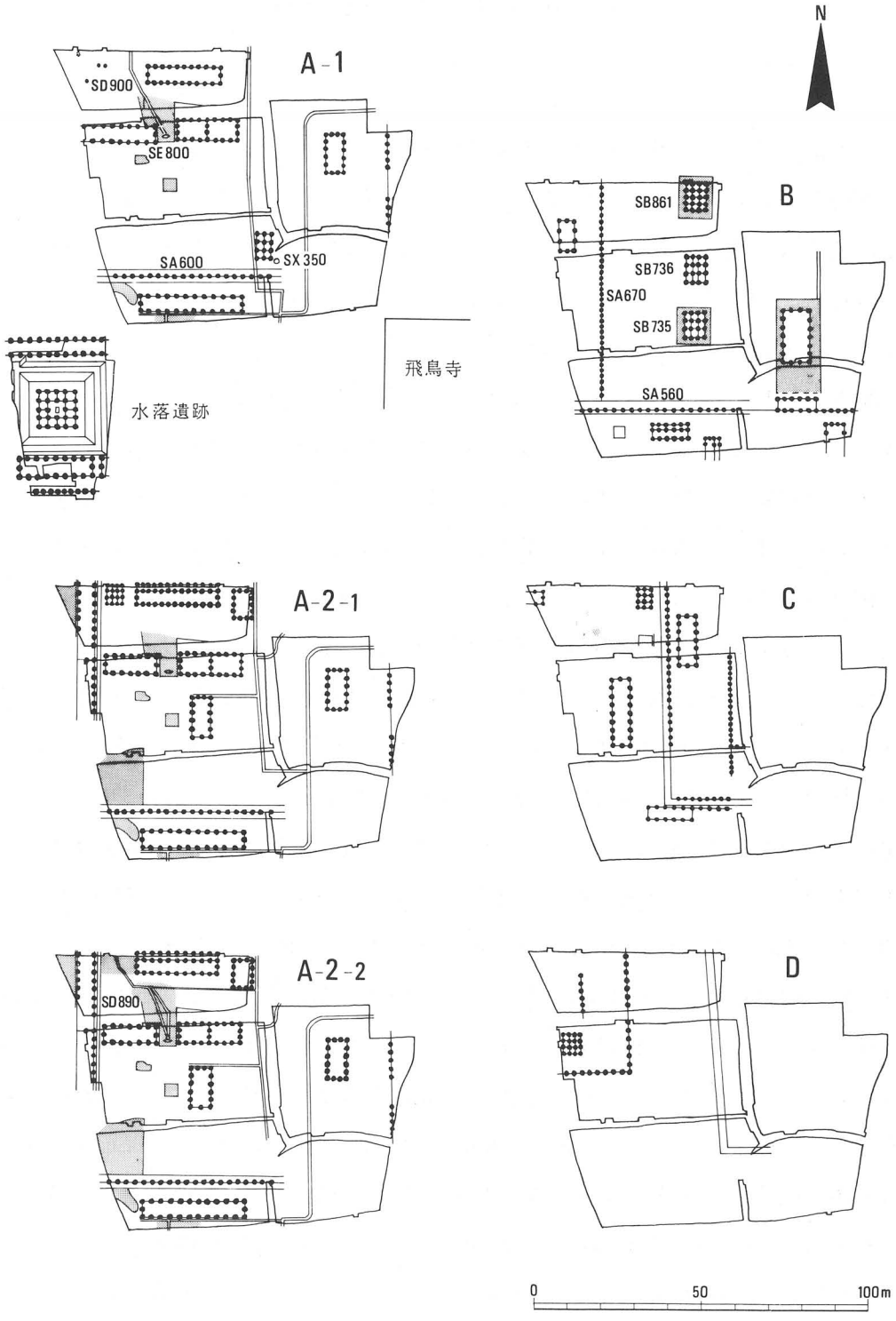
５次にわたる石神遺跡の調査で判明したことを簡単にまとめてみると次のようになる。

①　斉明朝において大規模な盛土を伴う造成工事および改造工事が行なわれ，井戸ＳＥ800を中心としためまぐるしい遺構の変遷がなされたこと。

②　天武朝においても，盛土・切土を伴う大規模な造営工事が行なわれ，整然とした配置をもつ建物群が建てられ，前代とは性格を一変しつつも，重要な地域として引き続き使用されていたこと。

③　藤原宮の時期に至っても，塀による区画を伴って，この地域が引き続き使用されていたこと。

以上のように，石神遺跡の性格を明らかにするうえで重要な知見を得ることができたのであるが，各時期における遺構の範囲の確定までにはいたっていない。また，各時期の遺構の具体的な性格の確定も今後の周辺地域の調査の進展にゆだねなければならない。



第24図　石神遺跡主要遺構変遷図（1：2000）

2. 水落遺跡第5次調査

（1985年2月～4月）

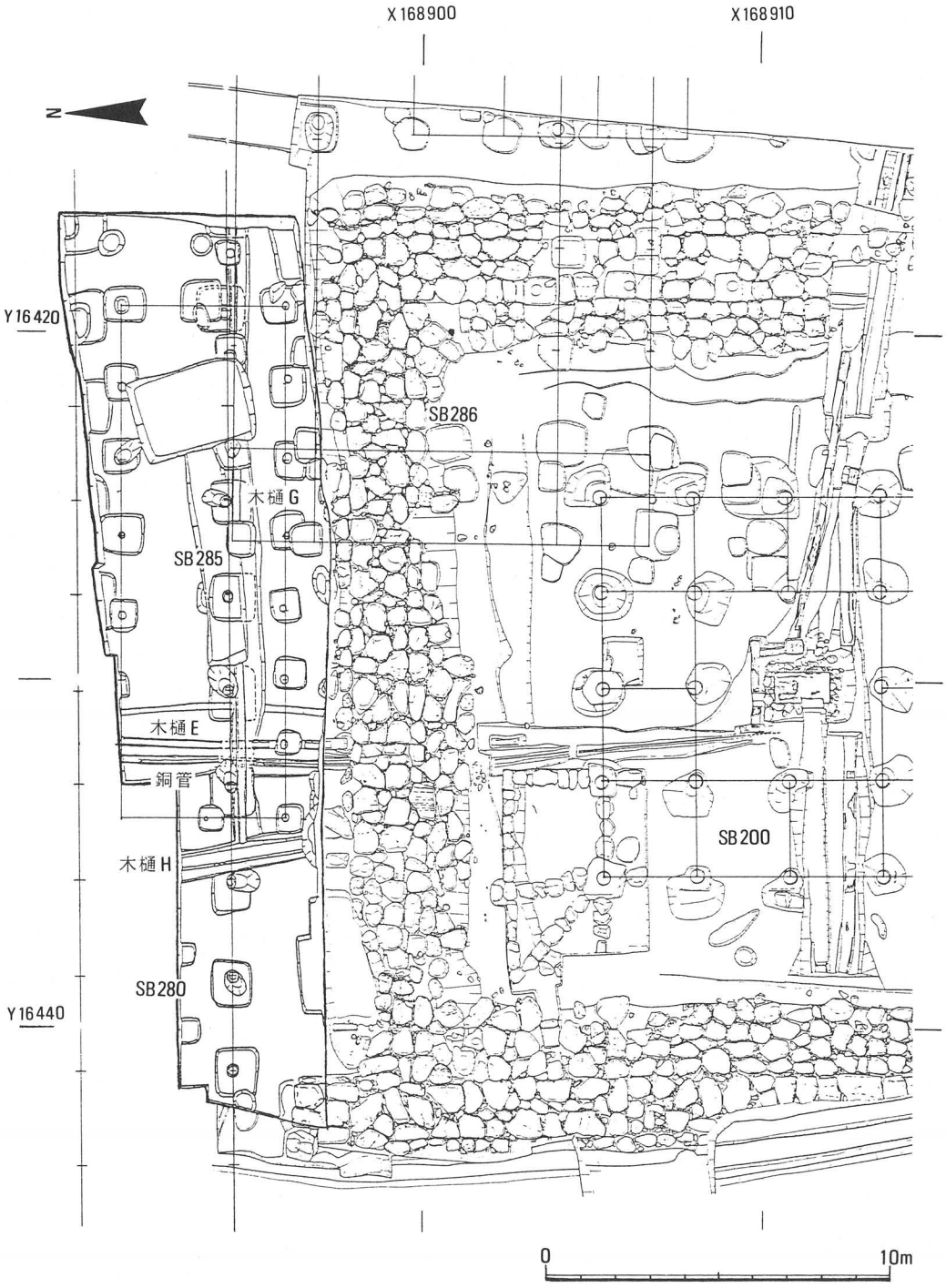
この調査は，史跡整備の資料を得る目的で実施した。調査地は，水時計建物の北辺基壇建物化粧石の北側で，昨年まで旧飛鳥小学校の校舎があった所である。調査は，東西約26m，南北7～5mの調査区を一部旧調査地区に重複させて設定し，掘立柱建物の存否を確認するとともに，銅管・木樋の延長部分を検出することに主眼をおいて進めた。

調査の結果，掘立柱建物3棟，銅管，木樋3条などを検出した。それらは，A・Bの2時期に大別され，B期はさらに重複関係から2期に細分される。

A期の遺構　　掘立柱建物SB280のほか，銅管，木樋E・G・Hがある。これらは，水時計の礎石建物SB200と一連の遺構で，7世紀中葉に属する。

掘立柱建物SB280は，桁行9間以上（24.3m），梁行2間（4.2m）の長大な東西棟建物で，その南側柱列と北側柱列の一部とを検出したが，調査区内では東西とも妻柱は検出されなかった。柱間寸法は東西約2.74m等間で，柱筋ともども，礎石建物SB200および南の掘立柱建物SB180と一致する。南の遺構群と一連の掘込地業中に方1.4mの掘形を掘って立てた直径38cmの柱をすべて抜き取っている。このことから，このSB280が南のA期の遺構群と一体で造営され，また廃絶されたことは明らかである。なお，SB280の南側柱列はSB200の北側柱列の北約11.2mにあるが，SB280の北側柱列と南のSB180の南側柱列とはSB200の中心からの距離がおのおの約20.7mで等しい。

銅管・木樋Eは，前回調査の北延長部を約6.5m分検出した。木樋Eは水時計へ汲みあげた残りの水を北方へ排水する地下水路で，外寸法で幅30cmの規模をもつ。遺存する底材の上には砂が堆積していた。銅管は木樋Eと併走するが，SB200の基壇上から延びる別系統の地下水路で，内径9mmの管を漆でくるみ，それを約10cm角の木製の樋に封じ込めて保護する入念な被覆構造をもつ。銅管はSB280の建物中程で二又に分かれ，一方はなお北へ延びて調査区外へ至る。いま一方は，上方へ約70°の角度で立ち上がり，SB280の建物内で地上へ出



第25図　水落遺跡第５次調査遺構配置図（１：200）

ることになる。後者は，長さ約30cmで折れているが，他と同様の被覆がなされている。なお，前回調査で検出した銅管の南端からこの分岐点までは水平距離で約18.2mあり，彼我の比高は約80cmである。

今回新たに検出した木樋Gは，ＳＢ280の南縁に沿って東から西へと埋設された地下水路である。木樋は完全に腐朽し，粘土と化していたが，木樋Ｅと同規模で約17.8m分を検出した。木樋Gは，先述の銅管・木樋Ｅの上を立体交差で渡り，南北木樋Ｈに接続されている。木樋Ｈは外寸法で幅約50cmと一回り大きい地下水路である。その上半部で木樋Gを受けて，やや斜めの北方へ延びており，約６m分を検出した。木樋Ｈの南端は木樋Gとの接続部の南約1.8mにあって，北辺の化粧石の背面に接している。

Ｂ期の遺構　　掘立柱建物ＳＢ285・286などがある。重複関係から１・２に細分されるが，いずれもＡ期の遺構の廃絶後に大規模な整地をして営まれた７世紀後半代の遺構である。

Ｂ―１期の掘立柱建物ＳＢ285は，桁行７間（14.8m），梁行２間（4.9m）の東西棟建物で，方1.1mの掘形に直径20cm余りの柱をたてている。

Ｂ―２期のＳＢ286は，桁行４間以上，梁行４間で四面庇付の東西棟とみられる。身舎桁行3.0m等間，梁行3.6m等間，庇は桁行2.4m，梁行2.7mに復原できる。Ｂ期の遺構には，他にいくつかの柱穴があるが，建物などにまとめえない。

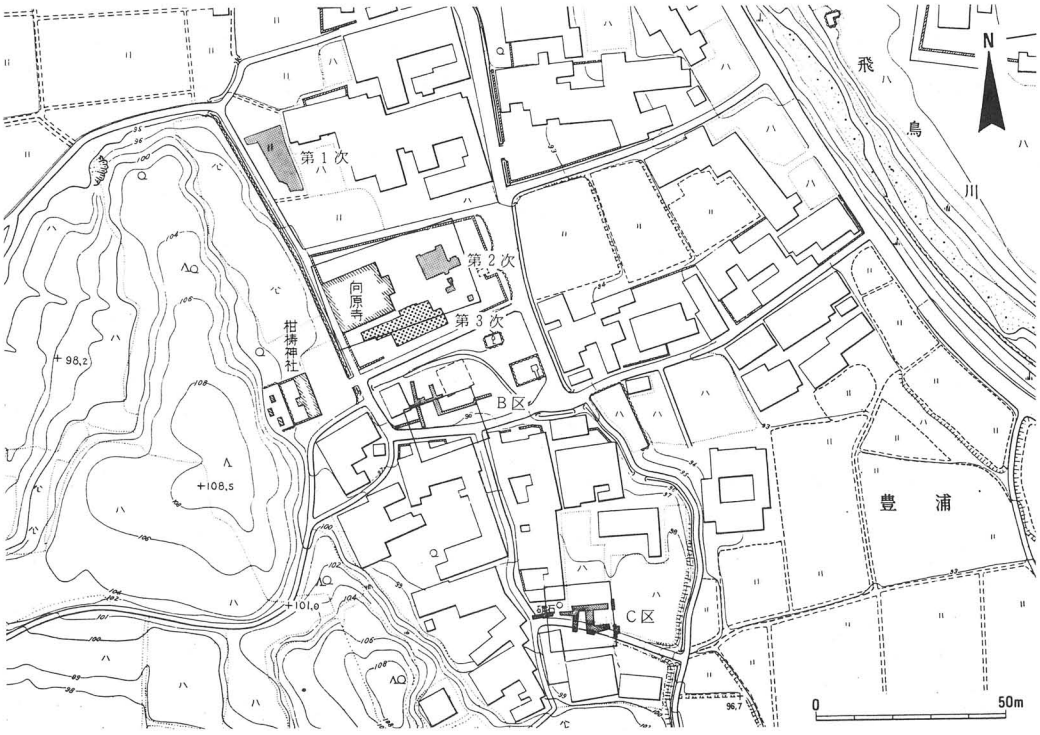
Ａ期の遺構では，水時計の建物の北にも長大な東西棟建物が存在することが判明した。しかも銅管などの地下水路は建物の北方へと導かれており，遺跡の北方には特殊な水利用の施設の存在が想定される。また，建物内で地上に出る銅管の存在は，この建物が単なる付属屋ではないことを示している。さらに，新たに検出した木樋G・Ｈは７世紀中葉の飛鳥の水路網がなお複雑に張り巡らされていることを推測させる。

Ｂ期の遺構は，７世紀後半に度重なる土地利用の大改造の行なわれたことを物語っており，それらは隣接する石神遺跡の遺構群は勿論のこと，飛鳥地域の都城全体の構成の中で理解されるべき内容を含んでいる。

3. 豊浦寺第3次調査

（1985年 2 月～ 5 月）

この調査は向原寺庫裡の改築工事に先立って実施したものである。調査地は豊浦宮推定地及び豊浦寺旧境内にあたり，周辺地域についてはこれまでに数次にわたる調査が行なわれている。1957年の奈良県教育委員会による調査では，向原寺境内（Ａ区）で５×４間に復原できる中世の礎石建物，その南接地（Ｂ区）で雨落溝を伴う二重基壇建物の北縁を，字金堂にある塔心礎周辺（Ｃ区）では周囲に石敷をめぐらした塔跡が検出されている（第26図）。1970年には奈良国立文化財研究所が向原寺本堂の北50ｍの地点を調査し，北で西に約17°振れる南北方向の石列ＳＸ165などを検出している（第１次調査，学報ＸＸⅦ）。その後，民家の改築などに伴なって小規模な調査を数回行なっているが，さしたる成果は得ていない。1980年には向原寺境内の薬師堂の解体移築工事に伴う調査を行ない，境内の礎石建物が鎌倉時代初頭再建の床張りの仏堂であるこ



第26図　豊浦寺調査位置図（１：2000）

とを確認し，室町時代後半に焼失したことも判明した。さらにその下層には前身建物の基壇と思われる版築層が存在することも明らかになるなどの成果を得ている（第２次調査，概報11）。

今回の調査は以上の成果に基づき，再建仏堂の西南隅の確認と，前身建物の規模や年代，さらには豊浦寺創建以前に遡る下層遺構の有無などを明らかにする目的で行なった。調査は東西22.5m，南北7.7mの発掘区を設けて実施した。その結果，１．庫裡建設前の近世の遺構　２．鎌倉時代再建の仏堂に関連する遺構　３．豊浦寺創建期の礎石建物とそれに関連する遺構　４．豊浦寺創建前の遺構など，主として４時期にわたる遺構を層位的に検出した。

遺構

１．庫裡建設前の近世の遺構

調査区の上層は明治38年以前の庫裡建設とその後の著しい撹乱を受けている。この撹乱層を除去して近世の境内面を検出した。この旧境内面からは，東西方向にのびる石敷参道１，部分的に遺存する石敷２，炉穴７，石組井戸１，南北方向の石組溝を伴う石組の池１，再建仏堂の礎石落し込み穴１，再建仏堂及び創建建物の礎石や基壇の石材を焼却破砕した溝状に連なる土坑群などを検出した。これらの遺構には近世陶磁器片，及び桟瓦片が含まれている。

２．鎌倉時代再建の仏堂に関連する遺構

近世の遺構を除去し，調査区の北半では黄褐色山土を主体とする基壇土を，南半では13～14世紀の土器を含む暗褐色土を検出した。北半で検出した基壇土は前身建物ＳＢ400の基壇と考えられ，再建仏堂ＳＢ480に伴う基壇は削平を受け，すでにその礎石位置を示す遺構はすべて破壊されていることが判明した。ただし，近世の礎石落し込み穴中の自然石礎石ＳＸ408があまり旧位置を動いていないとすれば，この礎石はＳＢ480の西南隅礎石であった可能性も考えられる。

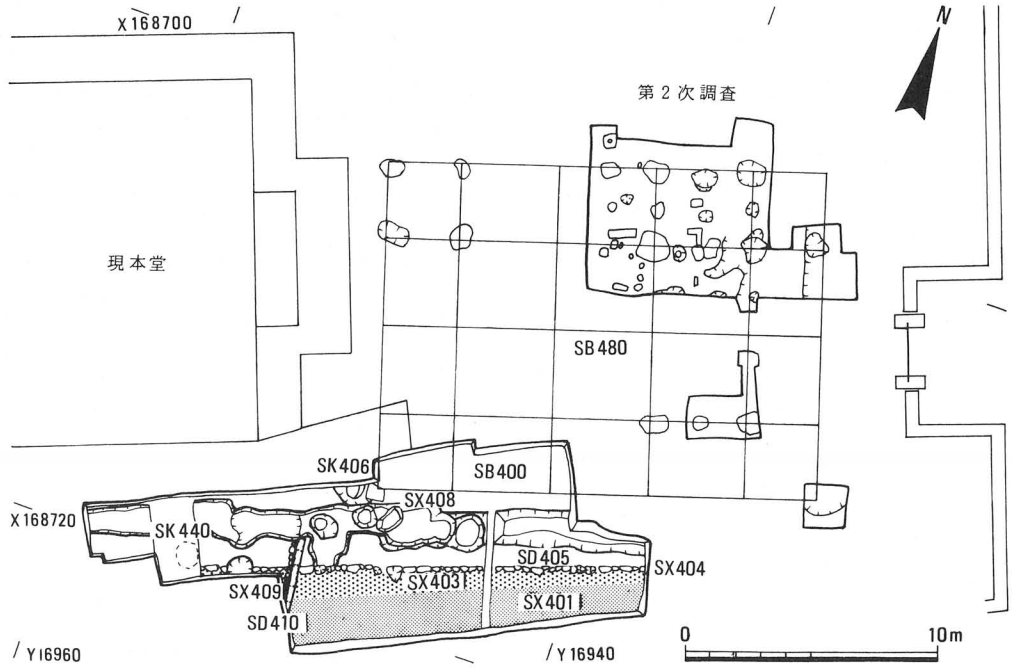
この他に暗褐色土層中で検出した南北方向の石列ＳＸ409がある。ＳＸ409は東側を見切りとして揃え，浅い素掘溝ＳＤ410を伴っており，室町時代の丸・平瓦片を含む焼土層が堆積していた。このＳＸ409は，ＳＢ480とは別の建物

が西側に存在していて，ＳＢ480とともに焼失した痕跡かと考えられたが，遺構が寸断されておりそれ以上の知見は得られなかった。なお，ＳＸ409の方位は北で西へ約15°振れており，北で西へ約18°振れるＳＢ480の方位とは若干異なる。

３．豊浦寺創建期の礎石建物とそれに関連する遺構

調査区南半の基本的層序は，暗褐色土層の下に７世紀前半の軒丸瓦や丸・平瓦の大形破片を多量に含む暗茶褐色土があり，さらに平安時代の土師器・瓦器小片を多量に含む褐色土，旧境内面を形成するバラス敷，石敷，創建時の整地土層の順となる。これらを層位的に発掘して，豊浦寺の創建期に遡る礎石建物ＳＢ400と，雨落溝ＳＤ405，雨落溝の南を画する石列ＳＸ404，石敷ＳＸ403，バラス敷ＳＸ401，礎石落し込み穴ＳＫ406などを検出した。

礎石建物ＳＢ400は調査区全域でその南辺を確認し，東西の長さが22ｍ以上の規模を持つことが明らかになった。建物の方位は北で西へ約19°振れている。基壇の築成は後述する下層掘立柱建物の廃絶後の自然堆積層上に，一旦，厚さ約0.2ｍの整地を基壇外まで行ない，その上に直接版築しており，掘り込み地



第27図　豊浦寺第３次調査上層遺構配置図（１：300）

業は認められない。版築は主として黄褐色ないしは青灰色山土を平均約５cmの厚さで12層以上積み上げたもので，最も遺存状態の良い所で厚さ0.7mを測る。基壇上面は著しい削平を受けており，礎石落し込み穴ＳＫ406と礎石１個を検出したにとどまる。礎石は花崗岩製で，直径0.6mの低い円形造り出しを有し，創建時のものと考えられる。基壇化粧は再建時及び近世に抜き取られ，全く遺存していない。しかし，雨落溝南側を画する石列ＳＸ404に凝灰岩切石を転用した所が３か所あり，この他にも上層で検出した土坑から凝灰岩片が投棄された状態でいくつか見つかっているので，当初は凝灰岩切石を用いた基壇と考えられる。これらの凝灰岩片の中には厚さ14cmの羽目石，基壇隅に用いた地覆石と思われるものがある。なお，階段の痕跡は調査区内では見いだせなかった。雨落溝ＳＤ405は，その南側を石列ＳＸ404で画し，拳大の礫を厚さ0.2m程敷きつめている。北側は基壇化粧を抜き取る際に壊されているが，最も遺存状態の良い所では幅約1.3mを測る。石列ＳＸ404はひと抱え程から人頭大の玉石を主として用い，北側を見切りとして揃え，抜き取られた部分を含め全長17.5m分を検出した。ＳＤ405とＳＸ404は一部に凝灰岩切石を転用していることから創建当初のものとは考えられず，雨落溝下層から出土した奈良時代前半の土器から考えると，奈良時代以降に付設されたもので，当初は特に雨落溝を設けなかったと推定できる。雨落溝の南側には人頭大の玉石を敷く石敷ＳＸ403が幅0.6mにわたって部分的に残る。しかし，その上面は必ずしも平面をなさない点が注目される。ＳＸ403の南側には北側を見切りとする玉石を一列並べ，その南側に拳大の礫を敷く石敷ＳＸ401があり，奈良時代以降の旧境内面を形成していたと考えられるが，後世に撹乱を受けて全域には遺存していない。さらにＳＸ401・403の全域を覆うバラス敷ＳＸ426が設けられ，境内面のかさ上げが行なわれる。その年代は出土した土器から10世紀前半のことと考えられる。ＳＸ426上に堆積する暗茶褐色土層からは，７世紀前半の軒丸瓦や丸・平瓦の大形破片がまとまって出土しており，ＳＢ400の焼失ないしは倒壊に伴う堆積と考えられた。

この他の遺構としては，調査区西端近くで検出した土坑ＳＫ440がある。Ｓ

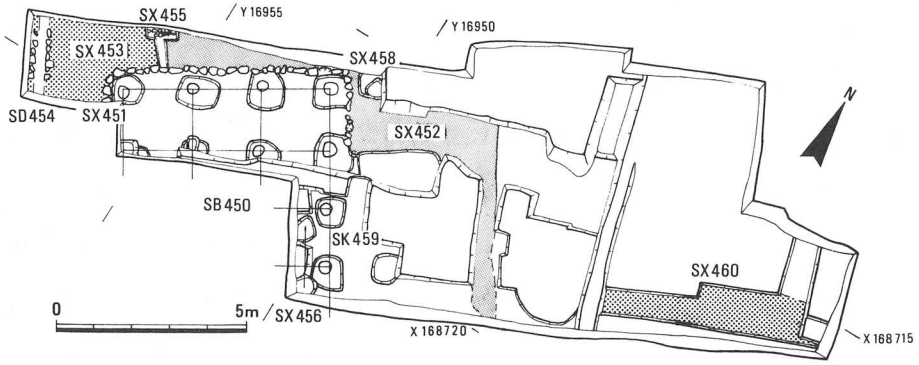
K440は基壇築成に先立つ整地土上面から掘り込まれ，さらに基壇築成と一体と思われる整地土層によって覆われており，その掘削時期を限定できるが，埋土中に飛鳥寺と同笵の軒丸瓦の瓦当破片を多数含む点が注目される。

4．豊浦寺創建前の遺構

ＳＢ400の基壇及びその南にひろがる整地層の下層から石敷をめぐらす掘立柱建物ＳＢ450と石敷ＳＸ460，あるいはそれに相前後する時期の柱穴や土坑を検出した。

ＳＢ450は，桁行３間（4.68m）以上，梁行３間（5.49m）の高床式の南北棟建物と考えられる。柱はすべて抜き取られているが，柱痕跡下半が明瞭に残っており，柱の直径は約30cmに復原できる。柱間寸法は若干のばらつきがあり，柱筋も不揃いであるが，現状では桁行1.56m等間，梁行1.83m等間に割りつけられる。建物方位は北で西へ30°前後振れている。

ＳＢ450の造営から廃絶に至る経過は次のように復原できる。まず，古墳時代（５～６世紀）の土器を含む黒色土層上面に一部薄い整地土を置く。柱掘形はこの上から掘り込み，一辺が0.8～1.1m程の不整方形を呈する。この掘形に柱をたてるが，一部の柱穴では柱のまわりに礫をつめて根固めとしていることが確認できた。柱をたてた後，厚さ0.1m程の盛土を置き整地するが，この段階で北側柱筋から約1.4mの位置に拳大の玉石をならべる石敷ＳＸ455を設ける。ＳＸ455の位置は，ＳＢ450の妻側の軒の出を示すものと考えられる。この上に西側の丘陵からの流入土（暗褐色土）が堆積し，ＳＸ455は比較的短



第28図　豊浦寺第３次調査下層遺構配置図（１：200）

期間のうちに埋没したらしい。その段階で再び盛土して建物の内外を整地し，それぞれの柱筋から0.3～0.4m外側に人頭大の玉石をならべた石列ＳＸ451をめぐらし，西半は人頭大の玉石を用いる石敷ＳＸ453，東半はバラス敷ＳＸ452を建物周囲に敷きつめる。西側柱筋から2.1mの所に雨落溝と思われる幅0.25mの石組溝ＳＤ454があり，軒の出を示していると考えられる。東側のバラス敷ＳＸ452はＳＸ451から約４m幅で建物をとりまいていることを確認しているが，北側への範囲は調査区外にあるため不明である。この段階で建物の床下部分にも低い基壇状をなす盛土が行なわれ，この上に拳大の玉石を敷く石敷ＳＸ449が設けられる。建物周囲の石敷上には再び流入土が堆積したため，ＳＸ453の玉石を一部抜き取り，盛土してかさ上げし，バラス敷を全体に重ねている。廃絶にあたっては，床下の石敷ＳＸ449を壊して柱抜取穴を掘る。抜取穴は上部のみ漏斗状に掘り，下半には及ばない特徴がある。なお，数回の盛土を経た最終段階での柱の埋め込みの深さは約0.6mである。廃絶後の状況は，西側丘陵からの自然堆積層が西に厚く，東へいくに従い薄く調査区全域を覆ったものと考えられる。この土層中には瓦片を一点も含まず，６世紀末から７世紀初頭にかけての飛鳥Ⅰ段階に属する土師器・須恵器の小片が少量出土しており，ＳＢ450の存続年代の下限を示すものとして注目される。

ＳＢ450の東側には，拳大から人頭大の玉石を敷くＳＸ460がある。調査は上層遺構を損なわないように行ない，また各時期の土坑などによって寸断されているので，必ずしも全貌を把握できなかったが，ＳＢ450東側のバラス敷ＳＸ452の東に少なくとも６m幅で存在したことが窺われる。ＳＸ452の東側には数m石敷を欠く部分があったと見られ，ＳＸ460とは直接つながらないようであるが，この部分は特に撹乱が著しく施行順序の前後などは明らかにできなかった。

この他の下層遺構としては，ＳＸ456・458，ＳＫ459がある。ＳＸ456は，ＳＢ450に伴う整地土によって覆われている２個の柱穴であり，ＳＢ450の造営に先行する遺構として注目されるが，その性格は部分的な調査であるため明らかでない。柱穴ＳＸ458はＳＢ450に伴うバラス敷ＳＸ452を破壊して掘ら

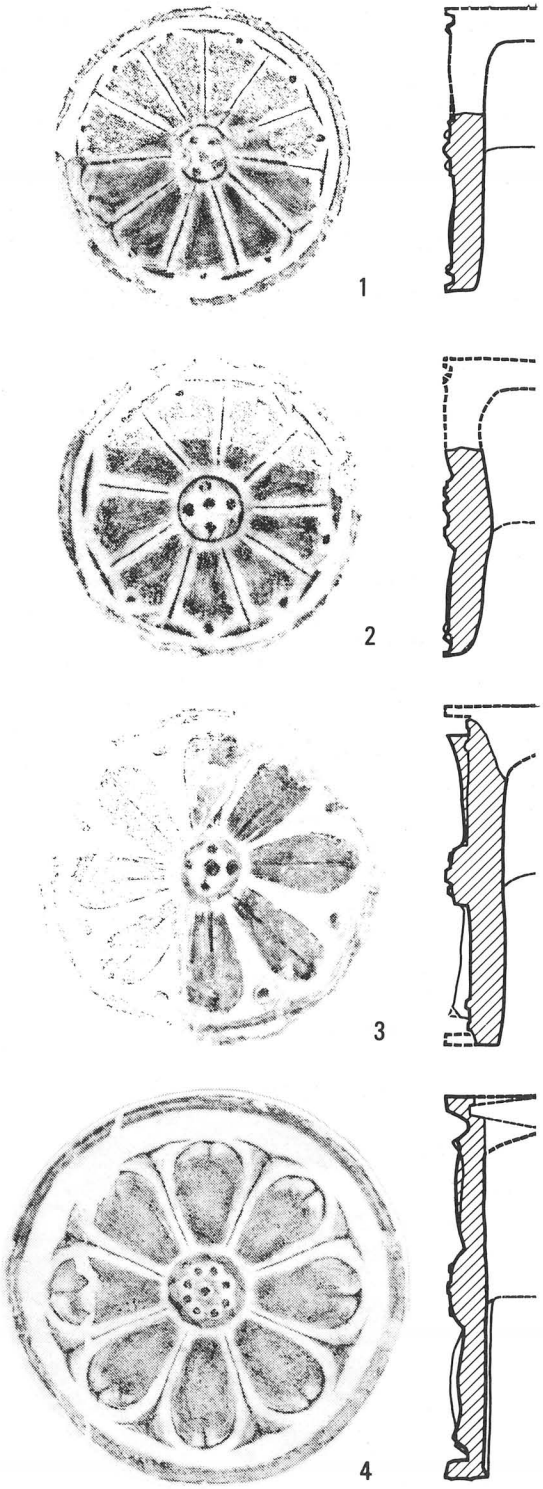
れ，ＳＢ450廃絶後の堆積層で覆われており，ＳＢ450廃絶直後の遺構と思われる。ＳＫ459は廃絶後の堆積層上面から掘られ，ＳＢ400に伴う整地層によって覆われている。埋土中にＳＢ450に伴う石列や石敷のものと思われる礫群が存在しており飛鳥Ⅰ段階の土師器杯が出土した。

遺物

遺物は近世の遺構に伴う陶磁器・桟瓦片，再建仏堂ＳＢ480に伴う鎌倉時代から室町時代にかけての土器・瓦・銅製品，礎石建物ＳＢ400に伴う飛鳥時代から平安時代にかけての土器・瓦・鉄製品，下層掘立柱建物ＳＢ450に伴う土器などがある。ここでは中世以前の瓦と土器について紹介する（第29図・30図）。

瓦は軒丸瓦が多く軒平瓦は少ない。この他に多量の丸・平瓦がある。軒丸瓦の出土量はＳＢ400創建前の土坑ＳＫ440から集中して出土したものが最も多く，ＳＢ400に用いられたものがこれに次ぎ，ＳＢ480に用いられたものは９点ときわめて少ない。

軒丸瓦は７型式13種125点が出土した（第２表）。Ⅰ型式は弁端を切



第29図　出土軒丸瓦（１：４）

り込む単弁軒丸瓦で，A種が１点あり，飛鳥寺Ⅰ型式と同笵と思われる。Ⅱ型式は弁端に点珠を置く単弁軒丸瓦で，A・B・C３種がある。A(1)は，中房に１＋５の蓮子を配す単弁11弁軒丸瓦で，飛鳥寺Ⅲ型式と同笵である。B(2)は，中房に１＋４の蓮子を配する単弁９弁軒丸瓦で，飛鳥寺Ⅷ型式と同笵である。Cは中房に１＋５の蓮子を配す単弁11弁軒丸瓦で，飛鳥寺Ⅵ型式と同笵と思われる。Ⅲ型式は弁端の反転をあらわすもので，A・B・C３種がある。A(4)は半球形にふくらむ中房に１＋８の蓮子を配す単弁８弁軒丸瓦で，完形に近い例が多い。Bは，単弁８弁に復原できるが，中房を欠く。Cは小片が一点出土しただけであるが，奥山久米寺出土例と同笵と思われ，半球形の中房に１＋８の蓮子を配する単弁16弁軒丸瓦に復原できる。Ⅳ型式は高句麗系と称される単弁８弁軒丸瓦で，弁中央縦に凸線や稜をあらわし，弁間に点珠あるいは楔形の間弁を配する。A・B・C・D・E・F６種７点が出土した。いずれも小片であるが，ほとんどが平吉遺跡出土例と同笵であり，AはⅠa型式と，BはⅠd型式，CはⅢa型式，D(3)はⅡb型式，EはⅢc型式と同笵と思われる。なおFは類例を欠く。Ⅴ型式は山田寺式の軒丸瓦でA種のみが出土した。これは1957年の調査でも出土している。Ⅵ型式は複弁の軒丸瓦で，小片であるため，種別を明らかにしがたいが，そのうち１点は中房に１＋８＋12の蓮子を配する複弁８弁軒丸瓦で，

	型式	点数	備考
軒丸瓦	ⅠA	1	飛鳥寺Ⅰ型式と同笵
	ⅡA	38	飛鳥寺Ⅲ型式と同笵、ＳＫ440から37点出土
	ⅡB	35	飛鳥寺Ⅷ型式と同笵、ＳＫ440から34点出土
	ⅡC	4	飛鳥寺Ⅵ型式と同笵、ＳＫ440から出土
	ⅢA	27	ＳＢ400創建時所用
	ⅢB	1	
	ⅢC	1	奥山久米寺出土例と同笵
	ⅣA	1	平吉遺跡Ⅰａ型式と同笵
	ⅣB	2	平吉遺跡Ⅰｄ型式と同笵
	ⅣC	1	平吉遺跡Ⅲａ型式と同笵
	ⅣD	1	平吉遺跡Ⅱｂ型式と同笵
	ⅣE	1	平吉遺跡Ⅲｃ型式と同笵
	ⅤA	2	山田寺式
	Ⅵ	3	複弁蓮華文軒丸瓦
	Ⅷ	6	巴文軒丸瓦
	計	125	
軒平瓦	Ⅰ	1	重弧文軒平瓦
	Ⅱ	1	川原寺751型式と同笵
	Ⅲ	1	鎌倉時代均整唐草文軒平瓦
	Ⅳ	1	室町時代均整唐草文軒平瓦
	Ⅴ	1	室町時代均整唐草文軒平瓦
	計	5	

第２表　出土軒瓦分類表

これも既往の調査で出土している。Ⅶ型式は巴文軒丸瓦で，Ａ・Ｂの２種６点が出土した。

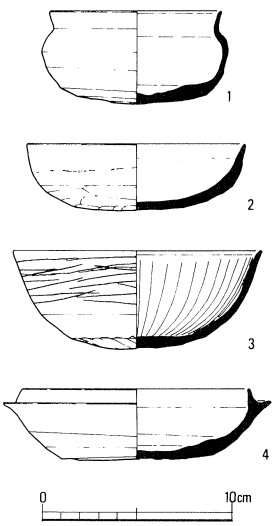
軒平瓦は５型式あり，各１点づつ出土した。Ⅰ型式は重弧文軒平瓦の小片，Ⅱ型式は平安時代前期の均整唐草文軒平瓦で，川原寺出土の751型式と同笵である。Ⅲ型式はＳＢ480に用いられた鎌倉時代の均整唐草文軒平瓦で，火災に伴う高熱で歪んでいる。Ⅳ・Ⅴ型式はいずれも室町時代の均整唐草文軒平瓦である。

土器は古墳時代から近世に至る土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・瓦器・陶器・磁器があり，特殊なものとして緑釉を施した新羅系土器がある。

古墳時代の土器は基盤をなす黒色土層中に５～６世紀の土師器・須恵器がかなり含まれており，今回は十分調査しえなかったが，この地域が古墳時代からの居住区であった事を示すものとして注意された。

７世紀の土器としては，下層の掘立柱建物ＳＢ450廃絶後に堆積した黒褐色土層中から少量ではあるが飛鳥Ⅰ段階の土師器・須恵器が出土しており，それ以降の土器を含まない点が注目される。この他に，飛鳥Ⅰ段階の土器としては基盤の黒色土層上面から出土した須恵器杯の身(4)，ＳＢ450との関係は明らかではないが，ＳＢ400造営前の小柱穴から出土した土師器杯(2)と須恵器短頸壷(1)，ＳＢ450廃絶後の堆積層上面から掘られ，ＳＢ400に伴う整地層によって覆われるＳＫ459から出土した土師器杯(3)がある。

飛鳥Ⅰ段階以降の土器は図示しうる適当な資料はないが，雨落溝下層の黄灰色砂質土層から飛鳥Ⅴ段階から８世紀前半にかけての土器，バラス敷から10世紀前半の土器，褐色土層から10～11世紀の土器，暗茶褐色土層から10～13世紀の土器が出土しており，それぞれの造営時期を示す資料として重要である。なお，緑釉を施した新羅系土器は，雨落溝上層及びバラス敷上面



第30図　出土土器（１：４）

から破砕した状態で出土した。

まとめ

今回検出した礎石建物ＳＢ400と下層の掘立柱建物ＳＢ450について，現状での成果と残された問題について簡単にまとめておく。

ＳＢ400の基壇は前回調査の成果と併せると，東西30ｍ以上，南北15ｍ以上の規模を有していることが明らかとなった。これを飛鳥時代の通有の基壇規模と比較すると，金堂とするよりは講堂にふさわしい建物と考えられる。現向原寺境内が東西約40ｍ，南北約25ｍの土壇状を呈している点も，この旧基壇を利用しているためと思われる。また現境内の北は一段と低い地形となり，大規模な堂宇の存在を認めがたいこともＳＢ400を講堂に推定する有力な手懸りになるであろう。

一方，1957年の調査では，今回調査地の南接地で雨落溝を伴う二重基壇の北縁が検出されており，ＳＢ400とは雨落溝間の心心距離で約18ｍ離れていることが明らかとなった。北で西へ20°前後振れるという建物方位もほぼ一致しており，建物の規模がわからず，また検出された軒瓦も７世紀後半までしか遡らないという難点はあるが，一応これを金堂跡に比定しうるであろう。また字金堂で検出されている塔跡と推定される建物は，建物方位をほぼ真北に揃えており，以上２つの建物とは方位を異にし，その立地する地形も前二者が位置する台地よりは１ｍ以上も高く，必ずしも同一境内面を形成してはいないが，一応南から塔・金堂・講堂を配した伽藍配置が想定できる。寺域は現状の地形からは南北200ｍ，東西80ｍの比較的狭い範囲と思われるが，その長軸線は北で西へ20°前後振れる。

ＳＢ400の造営年代については，廃絶に伴う瓦堆積層出土の軒丸瓦ⅢＡ型式の年代観から７世紀第Ⅱ四半期とみなされる。造営当初の外部施設としては基壇化粧のみが存在し，奈良時代以降に雨落溝や境内の石敷が整備され，埋没に伴い平安時代（10世紀前半）にはバラス敷が境内面を形成していたという経過も明らかになった。廃絶時期は瓦堆積層に伴う土器から12世紀頃と思われる。その後，鎌倉時代初めに規模を縮小し旧基壇の東寄りに５×４間の仏堂が再建

されるが，これも室町時代後半に焼失したことは前回調査の成果通りである。

なお，基壇築成に先行する土坑ＳＫ440から集中して出土した飛鳥寺と同笵の軒丸瓦ⅡＡ・Ｂ・Ｃ型式については，層位関係や出土状況からＳＢ400に用いられたものではなく，基壇築成に先立ち周辺に散乱していた瓦を一括投棄したものと考えられ，ＳＢ400に先行する瓦葺き建物が近くに存在していた可能性が生じる。その候補としては，通常の造営順序に従えば金堂があげられるが，その創建時に用いられた瓦であった可能性が強いことを指摘しておきたい。とすれば，下層掘立柱建物の性格とも併せ，豊浦寺の創建が飛鳥寺造営直後の７世紀初頭に遡る可能性が強くなる。またＳＫ440出土の軒丸瓦の中のⅡＢ型式に彫り加えを施した瓦が，法隆寺若草伽藍金堂の主要な瓦である点を考慮すると，飛鳥寺，豊浦寺，若草伽藍というわが国の初期寺院の造営年代を解き明す貴重な資料を提供したことになろう。

豊浦寺創建前に遡る掘立柱建物ＳＢ450は，北及び東西に丁寧な石敷をめぐらす高床式の南北棟建物であることが判明した。今回検出した建物はこれ１棟であり，その性格を論ずることは困難であるが，飛鳥地域でいくつか検出されている宮殿建物遺構との類似性を指摘することは許されよう。東側にも同時期と思われる大規模な石敷が広がっていることを確認しており，なおいくつかの建物が存在する可能性は強い。

ＳＢ450の造営年代と廃絶に至る経緯については，遺構の重複関係や，出土した土器や屋瓦の年代観からある程度年代を限定しうる。基盤をなす古墳時代遺物包含層の最上層に含まれている土器，また廃絶後の堆積層出土の土器は少量ではあるが飛鳥Ⅰ段階のものに限定できる。また，瓦を一切伴っておらず，ＳＢ450が７世紀初頭に遡る豊浦寺造営前の遺構であることはほぼ確実といえる。とすれば，当然文献に記録が残されている飛鳥地域に最初に営まれた宮殿「豊浦宮」（593～603年）との関連が問題になる。しかし，今回の調査範囲はきわめて限定され，豊浦寺創建前の遺構が存在するという端緒をつかんだにすぎず，現状ではその可能性を認めつつ，今後の調査の進展を大いに期待したい。

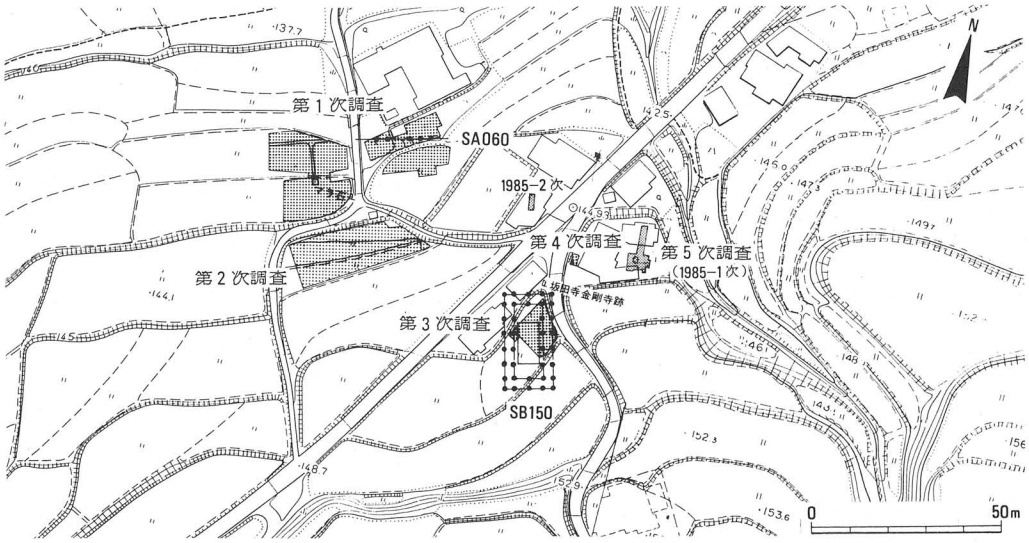
4. 坂田寺第５次調査

（1985年７月）

この調査は住宅改築に伴う事前調査として明日香村阪田で実施したものである。調査地は第３次調査（概報11）で検出した基壇建物ＳＢ150の北東約30ｍに位置する。また，基壇縁と思われる石組遺構ＳＸ153を検出した第４次調査地（概報13）とは同一の宅地内である。調査地の東・北方は急激な段をなして下っている。

調査は当初，東西２ｍ，南北10ｍの発掘区を設定して開始したが，鎮壇具埋納と考えられる遺構を検出したため，南半部を西へ２ｍ，東へ２ｍ拡張して行なった。

堆積土の層序は黒色土，灰色土・橙色土（中世以降の整地土），褐色土，明褐色砂質土となっている。地表下約15cmの褐色土は２層に分層でき，上層はややしまった土（褐色土１），下層は白い岩石粒子が少なく，やや柔かい土（褐色土２）であった。鎮壇具埋納の土坑は褐色土１上面で検出した。褐色土２は建物基壇の築成土と考えられるが，調査区北半では，中世以降の斜行溝によって削られており，北限を確認することはできなかった。褐色土１は厚さ９～13



第31図　坂田寺調査位置図（１：2000）

cm，褐色土２は厚さ８～22cmである。明褐色砂質土はバラス混りであり，発掘区内ではこの土層の下部は検出できなかった。非常に固くしまった土で基壇土とはいい難い。

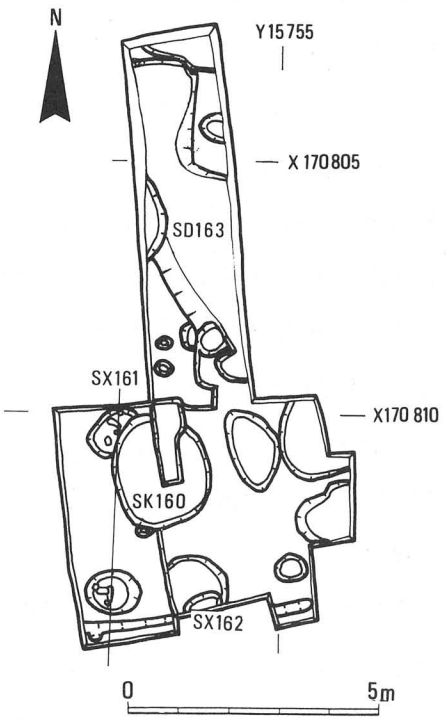
遺構

灰色土・橙色土層では柱穴８，土坑５，溝１を検出した。これらは中世以降の所産である。

褐色土１上面では，鎮壇具を埋納した土坑ＳＫ160，および柱穴ＳＸ161・ＳＸ162，褐色土１を削って作られた斜行溝ＳＤ163を検出した。

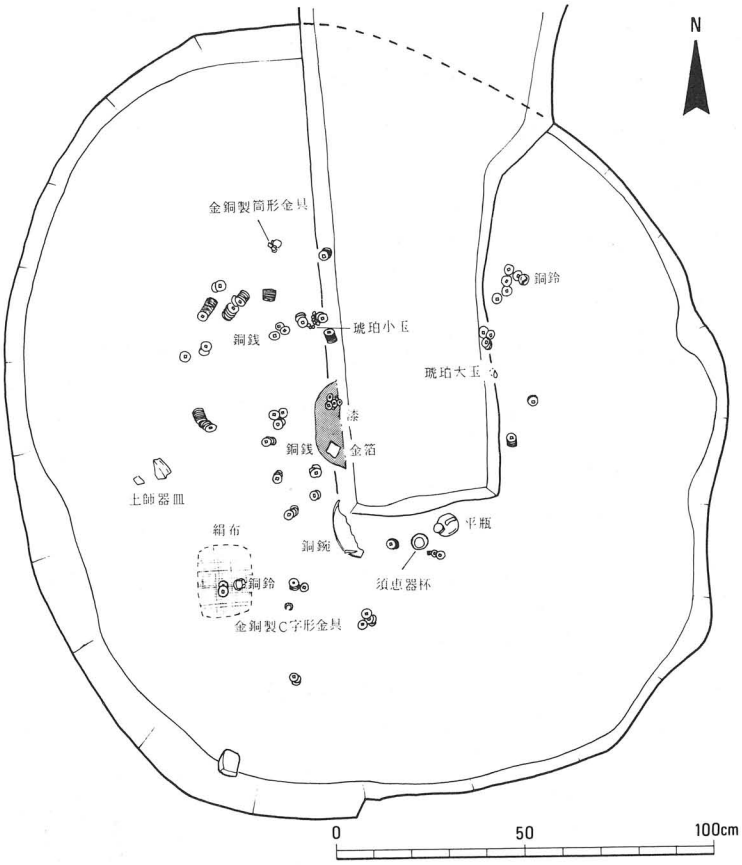
土坑ＳＫ160は南北長2.1m，東西長1.9mの不整円形を呈する深さ0.3mの浅い皿状の土坑である。北側の一部は現代の破壊を受けている。土坑内からは銅銭291枚をはじめとする遺物が多数出土した。出土遺物の内容，出土状況などから，鎮壇具と考えられる。遺物は土坑の底部近くより出土し，絹布に包まれたり，紐で一括りにされた状況を呈するものも存在しており，土坑内に投げ入れられたのではなく，一まとまりごとで置かれた状況を示している（第33図）。第３次調査の際発見された鎮壇具と比べると，埋納の掘形の有無，遺物の量，遺物の種類などの相違がある。

ＳＫ160の周辺では柱穴ＳＸ161，ＳＸ162が検出されている。ＳＸ161は掘形内に石が存在する。石は大きさ・形状ともに不揃いで，北側柱穴で６個，南側柱穴で７個みつかっている。根石もしくは栗石のようにしっかりと据えられたものではなく，底面より浮いた状態で散在している。平面形はともに楕円形を呈している。北側柱穴は東部分をＳＫ160に壊されている。長辺１m，短辺推定0.8mで深さは0.3mであ



第32図　坂田寺第５次調査遺構配置図
（１：150）

る。南側柱穴は長辺1m，短辺0.85mで深さは0.2mである。SX161の柱間寸法は3.3mであり，第3次調査SB150の身舎柱間寸法，庇の出の寸法と異なる。SX161の方向はほぼ南北方向となり，SB150の主軸方向（北で西にほぼ15°傾むく）と異なっている。



第33図　土坑SK160遺物出土状況（1：20）

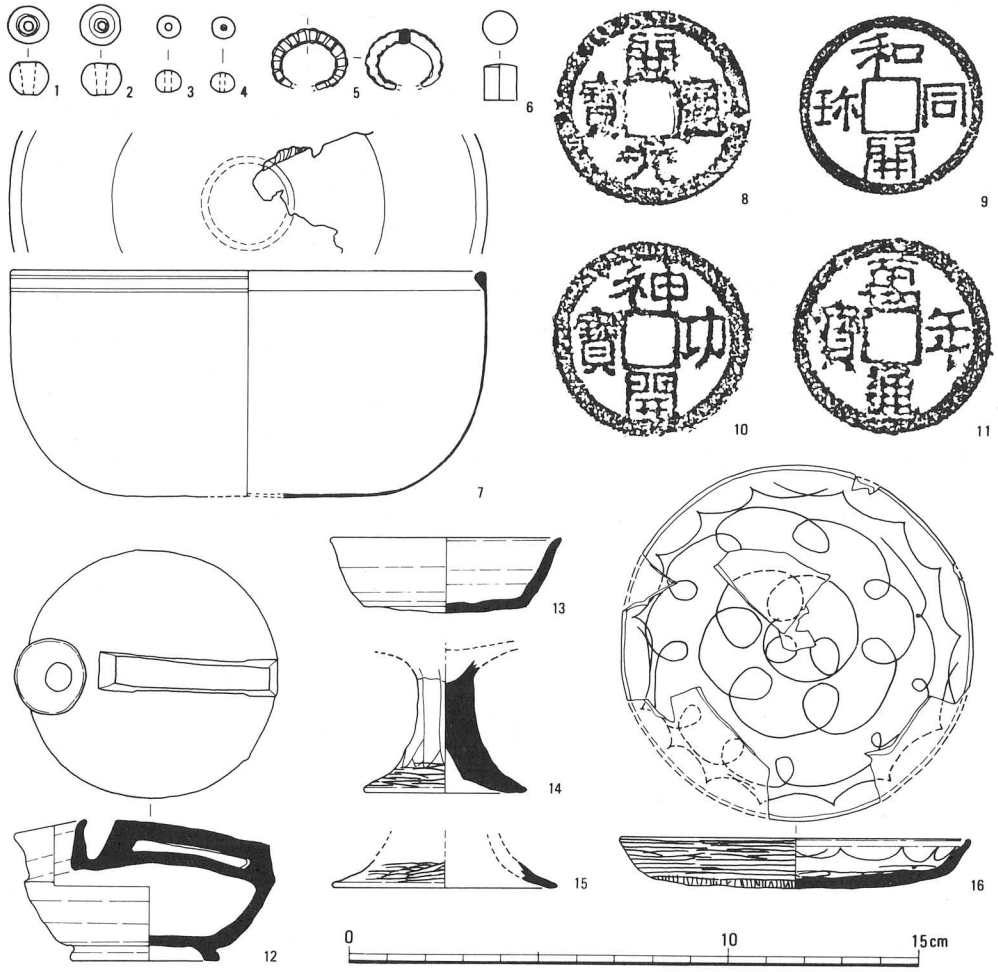
SX162は発掘区南端で一部を検出した。一辺0.7m以上の掘形をもつ。深さは0.45mを測り，掘形内に石はみられない。SX161とは異なる性格の柱穴と考えられる。

斜行溝SD163は発掘区北半部南東から北西方向に流れる。溝幅は最大部で4m，深さ0.8mで，溝内にはバラスが充填されている。バラス中からは中世の瓦器・瓦が出土しており，上部は橙色土に覆われている。これらのことより中世以後にこの地域は大規模な削平が行なわれていることが分る。

遺物

土坑SK160から出土した遺物には，金属・土器容器類，銅銭，玉類，金属製品，布などがある（第3表・第34図）。

佐波理鋺（7）は大きい平底をもち，口縁上半部がほぼまっすぐに立ちあがる。口縁端部内面は断面三角形に肥厚する。口縁端部外面には2本で一対をな



第34図　土坑ＳＫ160出土遺物（８～11；１：１，その他は１：２）

す毛彫沈線が２条めぐる。底部内面にも２条の毛彫圏線があり，一部毛彫文様が認められる。平瓶（12），杯（13），皿（16），高杯（14・15）はいずれも小型品である。平瓶は灰釉陶器で，猿投窯の製品である。土師器皿は内面に連弧と螺旋暗文がめぐり，外面は密なヘラミガキを施す。玉類はガラス丸玉（１・２）の他，琥珀玉があり，琥珀玉には大玉と小玉（３・４）がある。銅銭は総数291点あるが，種類が判別できたものは107点である。唐銭の「開元通寶」が１点含まれるほかは第３次調査出土と同様，「和同開珎」「萬年通寶」「神功開寶」の３種がある。容器以外の金属製品のうち，筒形金具（６）は４点あり，軸端金具かと思われる。Ｃ字形の金具は全面に鍍金されている。両先端を

欠損する。銅鈴は2点あるが，保存状態が悪く図示できない。

まとめ

今回の調査では，基壇土の一部と鎮壇具を埋納した土坑ＳＫ160を検出した。これらの検出により，今回の調査区内に基壇建物が存在していたことが明らかになったが，後世の削平・調査範囲の制約などの理由により，基壇建物の規模・範囲・構造等について明らかにしえなかった。鎮壇具に含まれる銅銭からは，神功開寶より新しい銭貨がないことより，次の隆平永寶の初鋳年（延暦15年，796年）を下らない年代を与えることができ，ＳＢ150と相前後して造営された基壇建物とすることができる。今回の調査範囲では基壇縁は検出しえなかったが，第4次調査で検出した石組遺構ＳＸ153を基壇縁の一部とすると，ＳＢ150とほぼ一致する振れをもつ東西長15ｍ以上の基壇建物を想定することが可能になる。

ＳＸ161とＳＫ160の前後関係は，ＳＸ161が古く，ＳＫ160が新しい。ＳＸ161はＳＢ150の主軸方向，およびＳＸ153の振れと一致しない点，深さも浅い点などから，ＳＫ160が掘り込まれた基壇建物の柱位置とは考え難い。鎮壇具埋納時期に先行する基壇建物の柱穴の可能性もあるが不明な点が多い。

以上のように，今回の調査は小規模ながら今後の坂田寺の調査にとって貴重な成果をあげることができた。これからの周辺地での調査が大いに期待できる。

	種　類	点数	備　考
容器	佐波理　鋺	1	口径　12.0 cm　器高　6.5 cm
	灰釉陶器　平瓶	1	底径　3.5 cm　器高　3.7 cm
	須恵器　杯	1	口径　6.0 cm　器高　2.0 cm
	土師器　皿	1	口径　9.2 cm　器高　1.3 cm
	土師器　高杯	1	脚径　4.1 cm　脚高　4.0 cm
			脚部のみ　ほかに脚部の小破片あり
玉類	琥珀大玉	2以上	
	琥珀小玉	8	直径　0.65 cm
	ガラス丸玉	50	直径　0.95 cm
銅銭	開元通寶	1	
	和同開珎	61	
	萬年通寶	15	
	神功開寶	30	
	（総計）	291	
金属製品	金銅製筒形金具	4	直径　0.9 cm　高　0.9 cm
	金銅製Ｃ字形金具	1	長径　2.0 cm　短径　1.6 cm
	銅　鈴	2	直径　2.1 cm
	金　箔	1	一辺　6.0 cm
布	絹　布		

第3表　土坑ＳＫ160出土遺物一覧表

5. 飛鳥寺の調査

（1985年12月）

この調査は，飛鳥寺西門の上を南北に通る村道の路肩改良工事に伴う事前調査である（飛鳥寺1985－２次調査，第20図参照）。従来この道路位置が，飛鳥寺の西を限る西面築地の位置に推定されてきた。調査地は西門に北接する地区で，道路の西路肩改良工事区に沿って，東西１m，南北33mの調査区を設定し飛鳥寺の西面外郭施設の検出を目的とした。なお，調査区の南端は，1956年に行なわれた西門調査区（学報Ⅴ）と一部重複している。

調査区の基本的な層序は，現路面・路床約15cm，旧路面・路床約20cm，飛鳥寺所用瓦を含む灰褐色土層10～40cm，古墳時代の土師器・須恵器を含む暗褐色土層約50cm，灰色砂混り黒褐色土となる。これらの堆積土のほかに調査区南端では，灰褐色土層と暗褐色土層との間に西門の基壇土と推定される山土を含む暗褐色土層が，厚さ18cmで南北約１mの範囲に認められた。

遺構検出は，主に暗褐色土層上面で行ない，６世紀末から７世紀代と推定される南北方向の掘立柱塀ＳＡ01，東西方向の石組溝ＳＤ02のほか，灰色砂混り黒褐色土上面で古墳時代（５～６世紀）の小ピットを検出した。

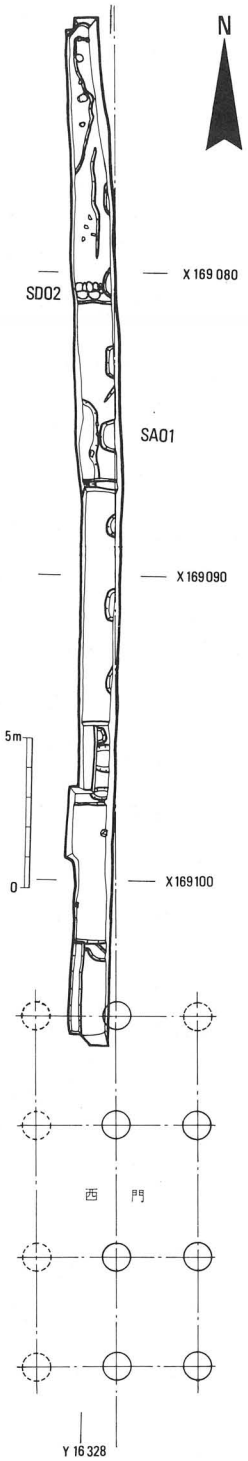
南北方向の掘立柱塀ＳＡ01は調査区中央で６間分，総長約16mを検出した。柱間寸法は2.66m等間となり，この寸法はすでに検出されている飛鳥寺北面の一本柱塀の柱間寸法と一致する（概報８）。柱掘形の大半は道路直下になるため，規模のわかるものはないが，一辺は0.9～１mと推定され，深さは0.9～１mとなる。柱掘形は版築状に埋め戻され，埋土からは少量の瓦が出土した。この南北塀の心と飛鳥寺西門を３間×２間の門とした場合の門の中軸線とはほぼ一致する。柱掘形の規模や位置また，調査区内に築地の築土が全く認められないことを考慮すると，西面の外郭施設は従来推定されていたように築地ではなく，むしろ一本柱塀であったと考えられる。そうした場合，ＳＡ01の南端柱穴から，西門北端の礎石抜取り位置までは約11.2mあり，塀の柱間寸法を2.66mとすると，その間に少なくとも３つの柱穴が必要となるが，その位置が道

路下にあたるため，今回は検出していない。

東西石組溝ＳＤ02は調査区北寄りにある。玉石が使用され，一段に並べた南側石２石と底石４石（東西0.7m）を検出した。北側石は抜取られているが，その痕跡から規模を復原すると内法幅約0.3m，現在の深さは0.2m前後である。遺構面が削平されているために本来の側石の高さは不明であるが，少なくとも２段以上あったものと推定される。石組溝ＳＤ02は南北塀ＳＡ01の柱掘形によって壊されており，南北塀に先行するものであるが，その時期や性格については明らかでない。

古墳時代の遺構は主に調査区北半にある。いずれも径60cm前後の不整円形のピットで，埋土からは５～６世紀の土器が出土した。

これまでに検出された飛鳥寺の外郭施設のうち，北面と東面施設は創建時から一本柱塀であることがすでに明らかにされている（概報８・13）。南面の外郭施設としては，1956・1979年に行なわれた発掘調査において築地痕跡を検出しているが，それを創建当初の施設とするには問題が残る（学報Ⅴ，概報10）。今回西面の外郭施設が一本柱塀であることが判明したことによって，飛鳥寺の外郭施設は少なくとも東・西・北の三面が一本柱塀であることが判明したといえる。この点を考慮すると，創建時の南面外郭施設も一本柱塀であった可能性は高いように思われる。以上のように我が国最古の寺院である飛鳥寺の外郭施設は築地ではなく本来，一本柱塀であったとすれば，古代寺院の外郭施設の構造・変遷を理解するうえで貴重な手懸りを得たことになる。



第35図　飛鳥寺1985－２次調査遺構配置図（１：250）

6. 飛鳥地域その他の調査概要

a．石神遺跡周辺の調査

（1985年 9 月）

この調査は飛鳥保育園新築に伴う事前調査として，明日香村飛鳥で行なったものである。調査地は飛鳥座神社の鎮座する丘陵の北東にある，東から北西に延びる丘陵の西端である。調査は東西方向（２×12m），南北方向（３×19m）の２つの発掘区を設定して実施した。

検出遺構は土坑・集石遺構と南側の沼状の落込みである。集石遺構は東西1.5m，南北３mの範囲にわたって拳大の石を乱雑に置いてあるだけで，特に石を敷詰めたという状況ではない。落込みは南北発掘区の南側および東西発掘区に拡がっているもので，南に急傾斜で下がっており，旧耕土下２mほど掘り下げたが底まで至らなかった。埋土からは７世紀後半の遺物が出土している。今回の調査において顕著な遺構は検出できなかったが，地山が南西に向って大きく傾斜していることが明らかとなり，旧地形を知る手懸りを得た。

b．飛鳥寺寺域北部の調査（飛鳥寺1985－１次）

（1985年 8 月）

この調査は，住宅の石垣工事に伴う事前調査として，明日香村飛鳥で行なったものである。調査地は飛鳥寺寺域北部で，講堂の北西約40mの地点である。調査は東西1.2m，南北２mの発掘区を設けて実施した。地表下約1.4mで黄色砂質土の地山となるが，それまでの堆積土には近・現代の遺物を含んでいる。地山面での検出遺構は，斜行する幅約45cmの溝１条のみである。埋土からは畿内第Ⅰ様式の弥生土器や，７世紀の土師器などが出土した。

c．奥山久米寺寺域南部の調査（奥山久米寺1984－１次）

（1985年 3 月）

この調査は住宅改築に伴う事前調査として明日香村奥山で実施したものである。調査地は奥山久米寺寺域南部で，塔跡の南西約90mの地点にあたり，百貫川の大きな屈曲部のすぐ東側である。調査は東西8.5m，南北1.7mの南区と，その北東に東西３m，南北1.7mの北区を設けて行なった。南区の堆積土の状況は盛土・水田耕土・床土・灰褐色土で，地表下約50cmで黄褐色砂質土の地山となる。地山面で検出した遺構は，14世紀頃までの遺物を含む東西方向の小溝３条，古墳時代の幅３mの斜行溝，土坑などであるが，奥山久米寺に直接関連する遺構は明らかではない。また，北区では小範囲の調査のため明確な遺構はなく，地表下約１mで地山面を確認した。

d．奥山久米寺寺域中心部の調査（奥山久米寺1985－１次）

（1985年４月）

この調査は住宅改築に伴う事前調査として明日香村奥山で行なったものである。調査地は奥山久米寺塔跡の東約20mで，伽藍中心部にあたる。調査は東西2.5m，南北5.8mの発掘区を設けて実施した。堆積土の状況は，約40cmの盛土の下が淡黒褐色土，茶褐色土で，表土下70～80cmで青灰色粘質土の地山となる。地山面は北に向って傾斜している。地山面で小穴，浅い溝などを検出したが，時期など不明であり，奥山久米寺の明確な遺構は検出できなかった。

e．坂田寺寺域内の調査（坂田寺1985－２次）

（1985年12月）

この調査は納屋改築に伴って，明日香村阪田で行なったものである。調査地は坂田寺第３次調査で検出した建物ＳＢ150の北約20mである（第31図参照）。調査は東西1.5m，南北3.7mの発掘区を設けて行なった。堆積土は盛土，水田耕土，床土下が淡褐色砂礫層となり，遺構はその下，地表下約60cmで瓦を多く含む土坑を検出した。出土遺物からこの土坑は奈良時代後半に属すると考えられるが，今回の調査は小範囲のため，土坑のごく一部を検出したにとどまり，全貌は明らかではない。

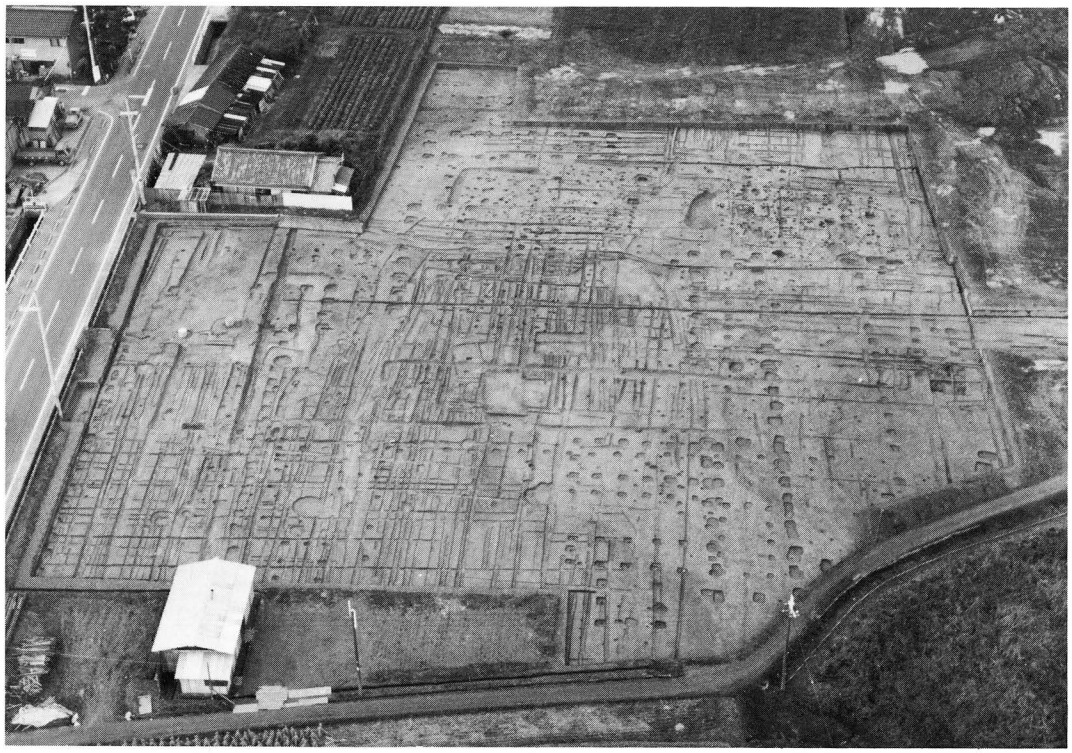


写真１　藤原宮第46次調査区全景（南から）

写真２　藤原宮第46次調査　掘立柱建物ＳＢ4331・ＳＢ4242（南から）

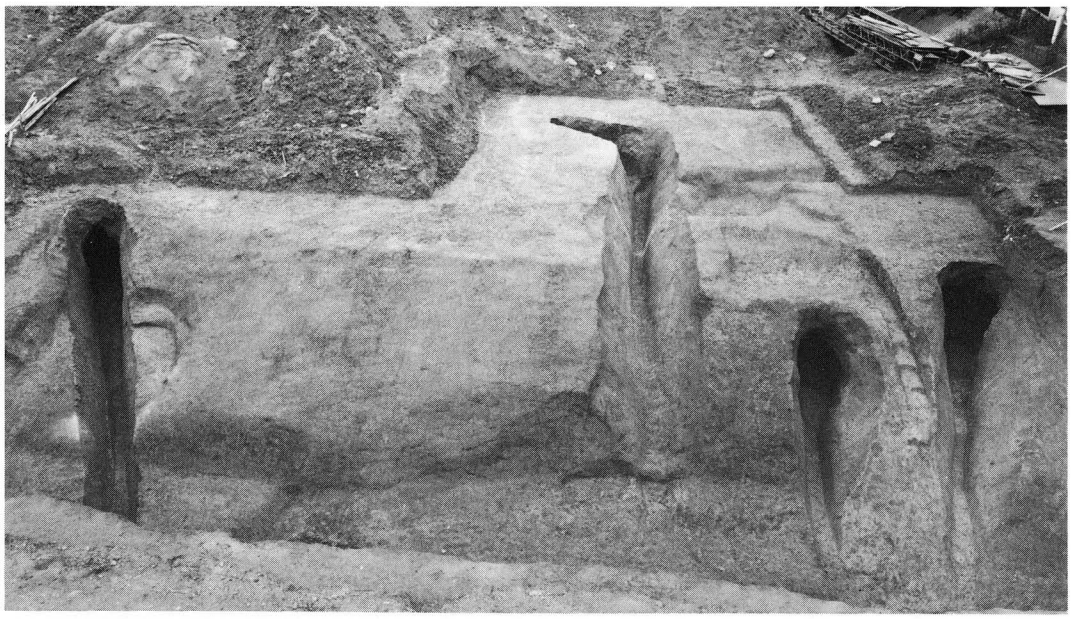


写真３　藤原宮第45－２次調査南区全景（西から）

写真４　水落遺跡第５次調査　銅管（東から）

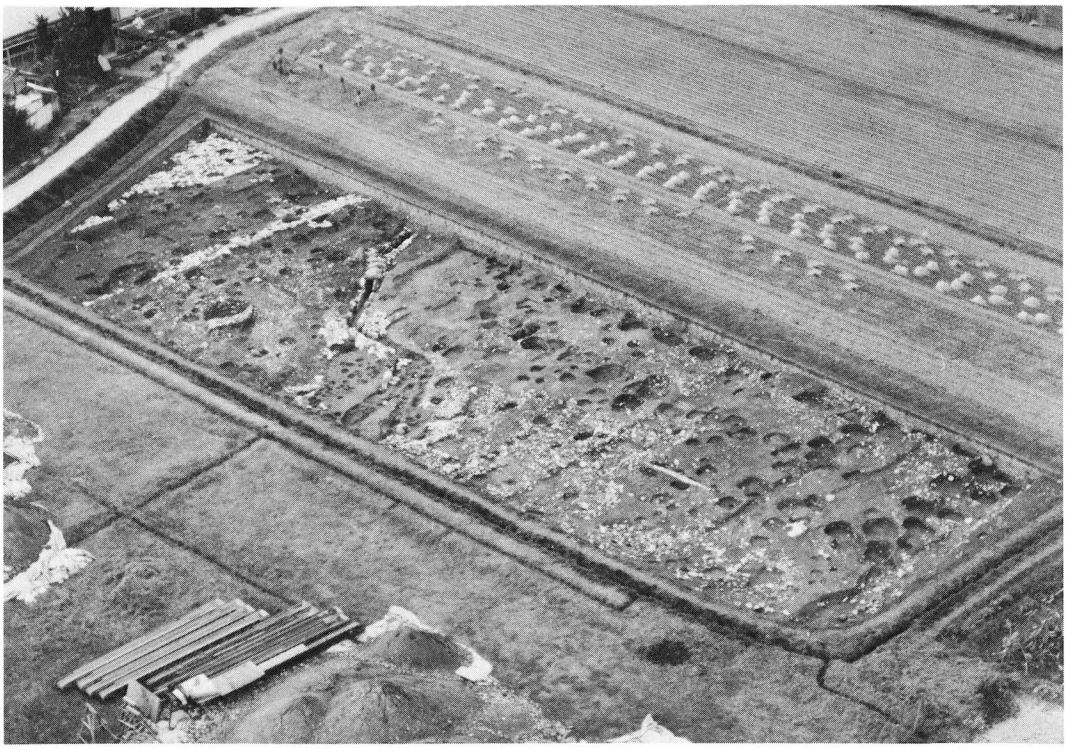
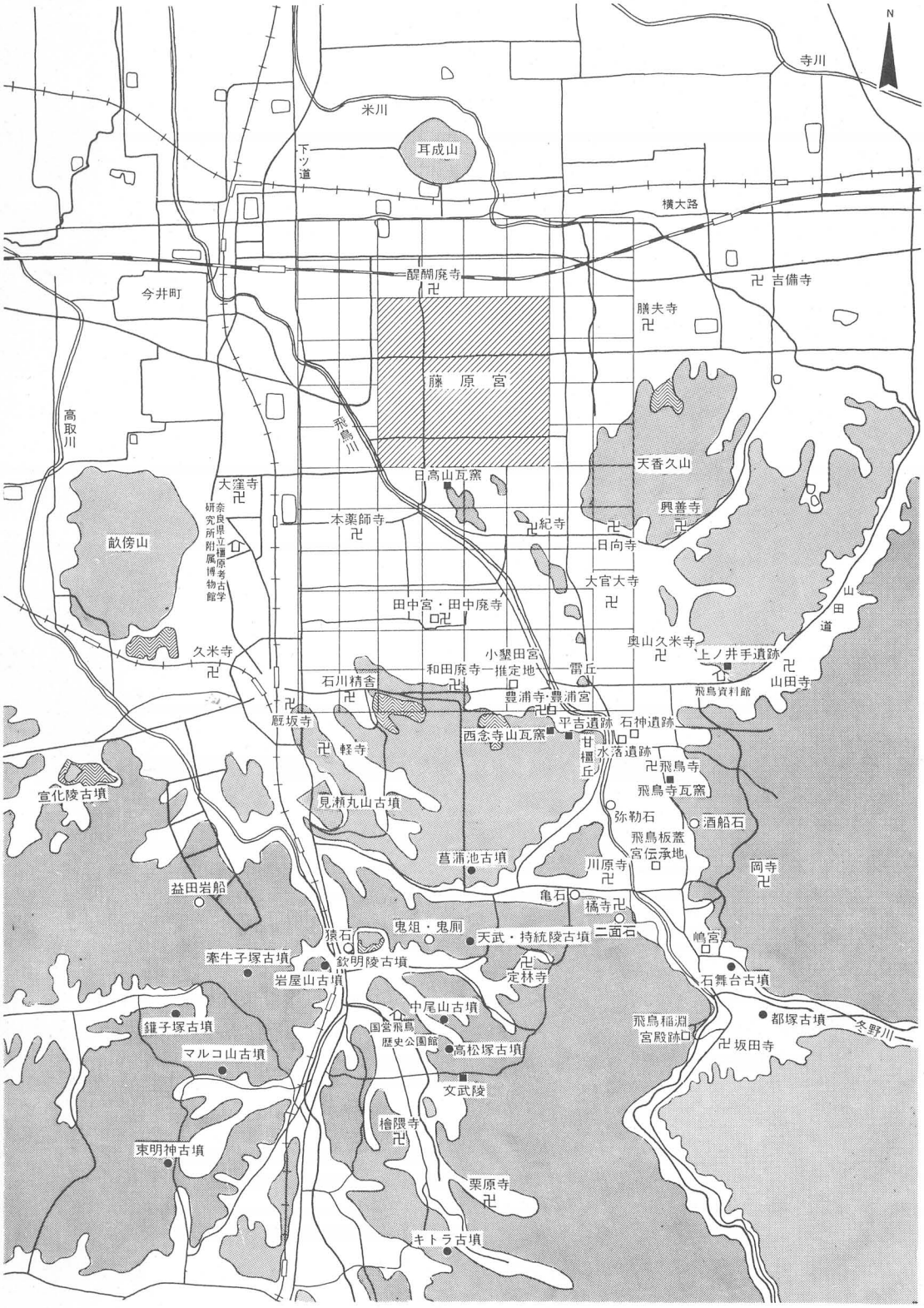


写真５　石神遺跡第５次調査区全景（南東から）

写真６　石神遺跡第５次調査　石組溝ＳＤ890・ＳＤ900（南東から）

写真７　豊浦寺第３次調査　掘立柱建物ＳＢ 450（東から）

写真８　坂田寺第５次調査　土坑ＳＫ 160 出土遺物



飛鳥・藤原地域の遺跡（１：40000）

飛鳥・藤原宮発掘調査概報　16

1986年 4 月25日発行　編集発行：奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
〒634　橿原市木之本町
Tel　07442 −(4)− 1122